

南葵音楽文庫

紀要



第7号

目次 CONTENTS

■論文・調査報告

- ・徳川頼貞による文化貢献の特性(3)——公共財化に見る選択と集中——.....6
美山良夫
- ・ミュージック・ライブラリーの夢
南葵音楽図書館の成立と展開 (5)
——1926～27年の資料蒐集と遠藤宏——..... 15
林淑姫
- ・徳川頼貞がワシントンの議会図書館で見たカミングス旧蔵書
——オスカー・ゾネックとの会話をめぐって——..... 26
佐々木勉

■資料紹介

- ・ヘンリー・パーセル オペラ《ディドとエネアス》手写楽譜 (総譜) 36
佐々木勉
- ・ジル=マルシェックス 《ぼくのお隣さんの窓のカーテンが…》..... 40
近藤秀樹

■関連歴史資料

- ・徳川頼貞抄訳「グリークとその音楽」(1920) (上)..... 46

■収蔵資料 目録と紹介

- ・南葵音楽文庫〈重要資料〉の選定..... 58
- ・徳川頼貞 『薈庭楽話』 年譜 61
 - 徳川家の家令・家扶・関係者..... 72
 - 大磯高麗園..... 73
 - 麻布飯倉本邸洋館 74
 - 麻布飯倉本邸とその周辺 75
- ・南葵音楽文庫 活動の記録 2022 (令和4) 年度..... 76
- ・『南葵音楽文庫紀要』総目次 第1号(2018年)～第6号(2023年)..... 78



論文・調査報告

徳川頼貞による文化貢献の特性 (3)

——公共財化に見る選択と集中——

美山良夫

徳川頼貞による文化貢献は、音楽振興に限られていたわけではない。徳川家が維持承継してきた、また頼倫の事業や活動に関連して収蔵された文化資源の公共財化に向け、おそらくは関係者の助言のもと、頼貞は粉骨砕身の努力を重ねた。本紀要前号において、頼貞による文化資源の保全と維持・活用について、便宜的ではあるが、1925年の南葵音楽事業部設立時を念頭に、その対象の分類を試みたので、再掲しておきたい。

- (A) 徳川頼倫旧蔵の学術資料
 - 1 銅駝坊陳列館に由来する資料
 - 2 静和園内の建物
- (B) 南葵音楽図書館所蔵の音楽関連資料群
 - 1 音楽書、楽譜、関連文献
 - 2 レコードと蓄音機
 - 3 楽器
- (C) 南葵文庫旧蔵資料（東京帝国大学寄贈除外分）等
 - 1 徳川家関係資料、印刷物
 - 2 その他

前号においては、上記分類のうち (A) 1 銅駝坊陳列館に由来する資料について検証を試みた。現在、東京国立博物館が所蔵展示するアイヌ資料の優品が、徳川家の抱える家政問題があったにせよ、頼貞の決断により私蔵から公共財へと転換された点を指摘しておいた。

今回は、銅駝坊陳列館に由来する資料以外、上記分類では (A) 2 と (B) ついて、対応の大略紹介と若干の検討を加え、その性格を明らかにしたい。

頼貞の行動は、帝室博物館による銅駝坊陳列館資料の受け入れ決裁（1927年10月）に先だって開始されていた。期間はおよそ20年余に及ぶ⁽¹⁾。その間に、彼の文化貢献の内容・方向は拡幅し、軸足も文化資源の保全と維持、公共財化から、文化外交に遷移してゆく。

外交であるが故、頼貞の活動は日本が置かれた十五年戦争（1931～45年）、敗戦国の国際社会復帰という環境と制約のなかであった。しかし、彼の判断により実現した成果も見られる。この点に関しては、この小考の次

(1) 美山良夫「徳川頼貞による文化貢献の特性 (2) ——公共財化への試行と実践」『南葵音楽文庫紀要』6号 (2023), p. 10. 頼貞がこの課題に取り組んだ時期を、1925年

回掲載分で検討してみたい。

(A) 徳川頼倫旧蔵の学術資料 (続)

徳川頼倫が所蔵していた学術資料のなかで、銅駝坊由来資料は、頼貞によって公共財化された経緯が明確になった。他の文化資源は、1924年5月5日に、麻布飯倉の本邸が閉鎖されるのに先立って、1922年に購入した代々木の静和園に移動ないし移築された。

静和園は、久米民之助が自邸として整備した広大な庭園をもつ豪邸で、和風の本邸のほか洋館、能舞台等を有していた⁽²⁾。日本建築学会大会における宮田伊吹らの報告によれば、1907年頃着工、1909年初めに敷地南側の三田用水に架橋して工事を本格化し、住居を完成。1911年初め頃、正門前の広場を整理、転居したと思われる。設計者は本邸が片山東熊(1854～1917年)と推定され、洋館は木子幸三郎(1874～1941年)。東京都立中央図書館の木子文庫には、久米邸の設計図面が遺されており、デジタル・アーカイブが公開されている⁽³⁾。

本邸の様子を伝える文献は乏しい。久米民之助の次男で建築家の権九郎(1895～1965年)は、『生い立ちの記』のなかに記憶を書き残している。

台湾の阿里山から取り寄せたヒノキの太い門柱のある門を入るとかなり長い砂利道があって、表玄関に突き当たります。玄関に向かって左には四十数間もある長い廊下で、住居棟が連なり、右側には応接間と客間になっていてメインガーデンに面していました。(中略)客座敷には迫り上げの舞台が付いていて、襖絵は河合玉堂先生を初め当時の有名な画家が筆をとっていたので、代々木御殿と噂されたほどの豪華なものでした⁽⁴⁾。

徳川頼倫は、本邸を麻布飯倉から静和園に移すにあたり、南葵文庫敷地にあった松浦武四郎(1818～88年)所縁の「一畳敷」を移築、この偉人を尊崇するために設けた高風居の一部とした⁽⁵⁾。また静和園に移ってから半年後の1924年(大正13)年秋には、関係者が園内各



代々木上原の静和園

道路と用水路を挟み、南側には帝国大学、前田侯爵邸が見える。『帝都地形図』(復刻版、井口悦男編、之潮、2005)～「北澤」(1922年11月測図、縮尺3000分の1)より



静和園本邸(旧久米民之助邸)



静和園庭園

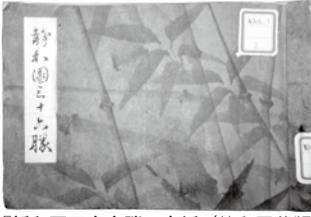
ともに『静和園蔵品展覧目録』(1933)より

(2) 宮田伊吹、志岐祐一、栢木まどか、朝日向猛「旧久米民之助邸(代々木御殿)に関する報告(その1) 代々木御殿の敷地と建築の変遷、設計者について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』(2021年7月20日), p. 639-640.

(3) 木子文庫(約29,000点)は1975年に寄贈された。近代の宮殿建築を網羅する膨大な資料群で、1995～98年に目録が刊行された。

(4) 久米権九郎追憶誌編集委員会編『久米権九郎追憶誌』(久米建築事務所, 1966), p. 11-12.

(5) 経緯の詳細不詳。現在は国の登録有形文化財(1999年10月14日登録)。



『静和園三十六勝』表紙（静和園蔵版，1924）和歌山県立図書館所蔵



『静和園三十六勝』より南龍神社

所を詠んだ歌に絵を添えた『静和園三十六勝』を上梓している(6)。

1925年5月、移転から1年余で頼倫はこの静和園で急逝する。目黒駅至近の上大崎にあった私邸ヴィラ・エリザに住んでいた徳川頼貞は、相続した広大な邸宅を、南葵育英会の大会に、紀州徳川家の理事会に、所蔵品の

売り立て会場等に活用する(7)。とはいえ財務上の逼迫から静和園の維持は困難であり、南葵音楽図書館の閉館と所蔵資料の慶應義塾図書館寄託を決する1932年11月3日と相前後して、静和園売却の方針も決していたと思われる。数年後には、静和園は主要建物をのぞき、林泉ふく

め解体整地されて分譲地になる(8)。



徳川邸跡分譲地案内
6折のうち表裏に当たる折

翌1933年1月20日に、南葵音楽事業部理事会は南葵音楽図書館蔵書の慶應義塾寄託にあたって細部を協議している(9)。同時期に徳川家は南葵文庫と南葵楽堂跡地の分譲を手がけており、また財務問題解決のため南葵産業を興してもいる(10)。

1931年に長期にわたる世界旅行から帰国して間もな

(6) 現在4部の残存を確認。うち3部は和歌山県立図書館所蔵。

(7) 南葵育英会は、頼倫逝去から半年後の1925年から1931年まで秋季大会を静和園で開催している。翌1932年からは上大崎のヴィラ・エリザに移った。所蔵刀剣類などの売り立てである「静和園贈品展覧」は1933年11月24日に催された。その第2回は翌1934年2月20日に開催されたが、会場は東京美術倶楽部であった。

(8) 1938年頃には、分譲地としての整備が進捗したと思われる。渋谷区郷土博物館・文学館は目黒蒲田・東京横浜電鉄株式会社田園都市課による『徳川邸跡分譲地案内』（発行年なし）を所蔵している。掲載された区画図は、静和園敷地にほぼ重なる。同館の特別展『住まいからみた近・現代の渋谷——郊外生活から都市生活へ』（2007年10月2日～12月27日開催）で展示された。

(9) 南葵音楽事業部理事会第69回（代々木上原徳川邸）議題書・南葵音楽文庫関係資料。

(10) 分譲は徳川家土地分譲事務所が実施主体となった。事務所は、隣接する我善坊町所在の南葵育英会本部と進修学舎内に置かれていた。民間に一部売却されたが大半は東京市が買いあげ学校用地とした。南葵産業は1932年頃に設立、社長には徳川家の財務を担当していた山東誠三郎が就任し、銀座の交詢社6階に本社をおいた。

い徳川頼貞は、多事多端な中で、静和園に関わる文化資源の保全や継承にどこまで関与したのであろうか。

この小論は、南葵音楽事業部設立時を念頭に、頼貞による文化資源の維持、保全に関する活動を明らかにすることを目的にしているが、その時点で静和園に存した学術資料とその後の状況について一瞥してみよう。

・**本邸**（設計：片山東熊？） 分譲地に含まれず。その後いつまで残存したかは不詳⁽¹¹⁾。玄関部分のみ、おそらくは、分譲主体となった企業の経営者であった五島慶太の判断により、彼が私財を投じ、1938年12月17日に設立認可されることになる東横商業女学校の木造2階建て校舎の玄関として移築された⁽¹²⁾。



静和園本邸（旧久米民之助邸）玄関

・**洋館**（設計：木子幸三郎） 分譲地に含まれず。戦災で一部損傷、進駐軍接収を経て岩佐多間邸に。その後厨房の増築や改修。解体の計画があったが2020年に久米民之助の故郷である沼田市へ移築が決まり、2023年旧久米家住宅として公開。設計図面残存（東京都中央図書館）。



久米民之助邸 洋館の外観

・**能楽堂** 能楽の支援者であった久米民之助が設けた能楽堂は、分譲地造成に先立って、おそらく1932年に、五島慶太が社長をつとめる株式会社多摩川園の園地内に移設された。戦災で都内の能舞台の殆どが焼失したなかで戦禍を免れ、戦後の能楽復興の拠点となった。現存しない。



久米民之助邸 洋館の内部

・**高風居、一畳敷** 松浦武四郎が全国の著名な社寺から古材を譲り受け組み上げた特異な空間である「一畳敷」（1886年）は、頼倫が武四郎の没後に神田から南葵文庫敷地に移築、さらに静和園に移築していた。頼倫は松浦武四郎を尊崇、記念するため茶室等を加え「高風居」と名付けた。1936年頃に実業家の山田敬亮が買い取り、三鷹に設けた別荘「泰山荘」の一部とした。現在は、その土地を購入した国際基督教大学 (ICU) が保存にあっている。



南葵文庫へ移築後の一畳敷
(故松浦武四郎記念室)

今回の調査で跡づけられたのは、以上の建築遺構についてであり、邸内を飾った筍の美術品については不明のままである。他方、保存や継承の発生時期は、ほぼ1932年から1936年に、すなわち五島慶太が社長をつ



国際基督教大学が管理している高風居

(11) 国土地理院が公表している1934～42年撮影の帝国地理院航空写真には確認できるが、戦後1945～50年の航空写真では視認できない。

(12) 五島慶太翁生誕一三〇年記念誌編集委員会編『熱誠』（五島育英会，2013），p. 41.

とめる企業が静和園を買収した時点から分譲地募集までに集中している。

売却の後、購入や移築に関わった実業人に、徳川頼貞ないし徳川家から、学術的価値、文化資源の保存について、働きかけがあったことを証す資料は見当たらない。銅駝坊陳列館に由来する資料群の帝室博物館寄贈とは異なり、土地と一体になった建築を、主要部分が久米民之助に由来するものとはいえ、個別に評定して保存、継承をはかる余裕はなかった。そのなかで、今もなお「高風居」に頼倫の松浦讃仰を偲ぶことができるのは幸いである。

(B) 南葵音楽図書館所蔵の音楽関連資料群

南葵音楽図書館所蔵の資料の中核を形成する音楽書と楽譜は、南葵音楽事業部の理事会において検討、1932年11月に大橋図書館などいくつかの候補の中から慶應義塾大学への寄託が決定し、翌年にかけて寄託契約の細部を調整、その結果3月には運搬され、4月から三田の同図書館で閲覧が可能になった⁽¹³⁾。

徳川家は、未整理の資料について整理をするほか経費負担もする契約が考えられていた⁽¹⁴⁾。頼貞が1945年4月12日に寄託の解約を通知するまで、12年間にわたって公開が続いた。

なお、1945年5月16日の山手大空襲により図書館は大きく損傷したが、寄託された音楽資料は無事であった。おそらく解約通知前に大木九兵衛（生年不明～1996年）に財産権がわたっていた資料群は、大木家ゆかりの白河（福島県）で保管され、1967年に読売新聞社主催の展覧会で多数の資料が公開展示された。1977年には財団法人読売日本交響楽団の基本財産に組み入れられ、今日に至っている。この間1970年代には駒場の日本近代文学館で仮公開された時期もある。1977年に閉じられてから40年を経た2017年12月、和歌山県立図書館における公開が始まった。

頼貞没後は、長く私蔵、非公開の期間があった。だが頼貞にとって、自らのもとにある音楽資料は、公開し広く利用に供するのが鉄則であった。この根幹は、彼が留学から帰国して以来、揺るぎがない。その営為や方向性などは一定ではなく、南葵音楽事業部を設立する1925年とその前後を境に変容する。その詳細は、林淑姫による一連の報告や論攷を参照願いたい⁽¹⁵⁾。ここでは、こ



1945年5月空襲後の慶應義塾図書館
東京大空襲・戦災資料センター所蔵

(13) 『慶應義塾図書館史』（慶應義塾大学三田情報センター、1972）。慶應義塾メディアセンターにより公開。<https://www.lib.keio.ac.jp/about/publication/history.html>（参照 2024.1.25）

(14) 前掲南葵音楽事業部理事会第69回（代々木上原徳川邸）議題書による。

(15) 林淑姫「ミュージック・ライブラリーの夢 南葵音楽図書館の成立と展開（4）—1926年の蒐書計画と田村寛貞」『南葵音楽文庫紀要』6号（2023）、p. 15-23.

の変容こそが、徳川頼貞の文化貢献における「私性」と「公共性」の輻輳の要にあるとのみ指摘、詳細は次回に譲るとし、分類の他の項目の瞥見を急ぎたい。

レコードと蓄音機

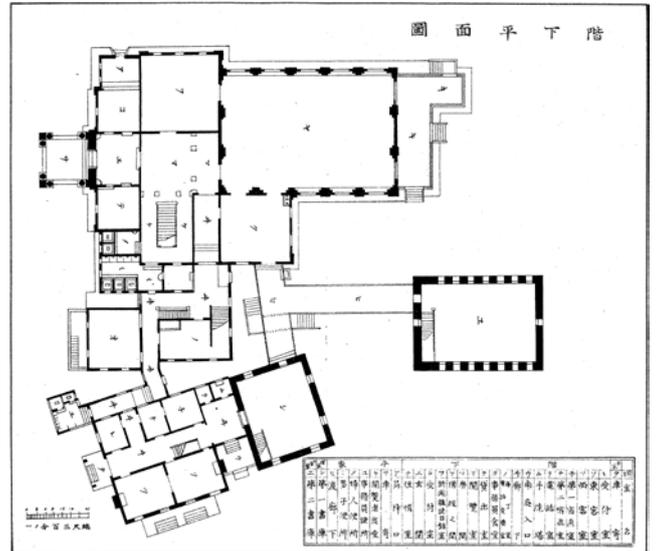
『南葵音楽事業部摘要』第1の南葵音楽図書館の紹介には、次の一節がある。「階下の一室にはピアノを置き閲覧者の研究上特殊要求ある時之に應じてみる。蓄音機室は三箇所あり、各室に一臺づゝの蓄音機を備へ請求に依つてレコードを貸與してゐる」。また、同ページで蔵書について紹介する冒頭にも「音楽に関する特殊図書館なるを以て収蔵する所の圖書は、音楽書楽譜並びに蓄音機レコードを主要なるものとすれども斯道研究上参考となるべき圖書及楽器をも網羅し」と音楽専門図書館の理想を追求する姿勢を明らかにしている⁽¹⁶⁾。

専門図書館としてのレコード蒐集は、この文面から進められたと推量できよう。しかし、所蔵レコード目録を作成したかは確認できない⁽¹⁷⁾。

楽器

楽器を通じた文化貢献は、購入、寄贈、啓蒙など多岐にわたっている。なかでも、頼貞自身が多く言及しているのはパイプオルガンの購入と設置である。その経緯は彼自身書き残しているほか、近年、調査報告、紹介がなされてきた⁽¹⁸⁾。

関東大震災で南葵楽堂は損壊、オルガンもダメージを受けた。「しかしその後應急の修理を施し爾來特殊の研究家の使用に供しつゝありしが昭和三年十一月今上陛下御即位の大禮を行はるゝ機会に際し曩に大禮記念事業として備付けたる本楽堂のオルガンを国立音楽學校に寄附して斯道研鑽に用に供するを得るは寧ろ斯界のため延いては社會のためその効果に於て遙かにを見るべきものあるを慮り遂にこれを東京音楽學校に寄附することになったのである」⁽¹⁹⁾。



南葵文庫 1階平面図

左下部分が事務棟で、南葵音楽図書館が使用した。

(16) 『南葵音楽事業部摘要』第1 (南葵音楽図書館, 1929), p.9.

(17) 南葵音楽文庫関連資料のなかに、タイプ打ちしたレコードリストが不完全だが残されている。作成年代不詳。この断片から南葵音楽図書館のレコード蒐集の全体像はわからない。図書館閉館後のレコードの行方についても不詳。

(18) 工藤哲朗「写真帖『南葵文庫附属御大礼奉祝記念館大風琴』の内容と来歴——朝香宮家との関係を中心に」『南葵音楽文庫紀要』6号(2023), p. 24-38 などがある。

(19) 『南葵音楽事業部摘要』第1, p.42



齋藤葵一技師



聖テモテ教会のオルガン
1932年3月完成



『パイプオルガンに就て 国産創製
記念編輯』(日本楽器製造, 1932)

文中にある「應急の修理」は、誰がおこなったのであろうか。頼貞はオルガン据付(1920年)にあたって、製作したアボット・スミス社に技師の派遣を要請、来日したプリチャード技師に、今後のメンテナンスを見据えて日本楽器製造に依頼して齋藤技師を迎え、技術の習得に努めさせた⁽²⁰⁾。大震災被災後の「應急の修理」も、できるのは組み立てに関わった齋藤技師をおいてない。

齋藤技師と頼貞が言うのは、日本楽器製造横浜工場の齋藤葵一である。彼は関東大震災後の応急修理を担当した後、1928年に東京音楽学校への寄附に際し、解体、移設組み立ての技術面を担った。その技術は、日本楽器製造が東京・本郷の聖テモテ教会に国産第1号パイプオルガンを設置する際に活かされた。この達成の中心に齋藤葵一がいた。1932年4月21日の披露式では齋藤が楽器の説明をした。その日に配布された記念誌には、徳川頼貞の讃辞が掲載されている⁽²¹⁾。以下抜粋してみよう。

先年飯倉の南葵樂堂に英國から買入れたとき、其將來の保存修理に一々香港あたりから技師を呼寄せるのは非常に手數なるべきを慮り、英國から來た技師と共に組立に従事して其機構を習熟させて置いたのが、現在の日本樂器會社の齋藤技師で、この人が今回最初の國産オルガンの製造主任である事は自分(侯爵)として非常に満足する處である。又聖テモテ教會がこれを備付けらるゝ様になつた事は、當に日本の樂界の一進歩であるばかりでなく、キリスト教としても敬虔なる禮拜の雰圍氣を醸成する事が出來て、教勢の進展に資する處頗る大なるを思ひ慶賀する次第である。

頼貞は、パイプオルガン購入、据付、寄附に由るだけでなく、技術移転機会を積極的に設けた点でも記憶されるべきである。

楽器を通じての貢献では、教育現場で不足している楽器の購入と寄贈について、自身で言及している⁽²²⁾。その詳細や経緯についての資料はなく、現時点で詳述はできない。

国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)は、紀州徳川家伝来楽器コレクションを所蔵している。20年前には、

(20) 徳川頼貞『薈庭樂話』新版, 美山良夫校注(中央公論新社, 2021), p. 41. 頼貞は日本楽器に依頼して技師派遣を求めたと記しているが、西川楽器製作所が日本楽器に吸収され、同社横浜工場になったのは、パイプオルガン設置の翌年(1921年)である。

(21) 日本楽器製造編『パイプオルガンに就て』(日本楽器製造, 1932), p. 37-39.

(22) 徳川『薈庭樂話』新版, p. 232.

調査研究をふまえた図録が刊行された⁽²³⁾。156点からなる楽器は、奈良時代や漢時代に遡るものが含まれている。また関連する楽譜、証書などの資料、それ自体が工芸品としての価値をもつ箱に収められており、学術的価値は計り知れない。

徳川頼貞は、そのコレクションについて、一文を草している。これは徳川家側で書かれた唯一の文書であり、ここにその全文を再録する⁽²⁴⁾。

記

紀州徳川家所蔵雅楽器に就いて

この雅楽器は今より約二百年前紀州徳川家の祖先第十代治寶卿其の当時一般には許されざりしを特に勅許を得て黄金五万両を投じ日本国内は勿論広く海外までも手を伸ばし蒐集せるもので古楽器としての価値高く国宝級に準ずべきもの数多く中には考古学及音楽史上の重要参考資料たるべきもの又は伝説的名器も含まれ現在日本に於て唯一のコレクションたることは斯界の権威田辺尚雄氏の鑑定に依り明かにせられた所である

品目は笙、箏、笛、琵琶、琴、太鼓等で百五十七点並びに楽譜等である

昭和二十八年十一月二十五日 徳川頼貞 [印]

再び『南葵音楽事業部摘要』第1を参照してみよう。研究室において進められている調査として、兼常清佐による「雅樂に関する文献の調査並にその楽器を基とせる科學的研究」が挙げられている。さらに、徳川治寶の蒐集品が徳川侯爵家に伝来し、続いて南葵音楽図書館の所蔵になっているとしている⁽²⁵⁾。紀州徳川家伝来の重宝のなかでも、まさしく奥道具にあたるコレクションもまた、研究のために供されていた。

音楽図書館閉館以後、楽器コレクションがどのように保管されていたか詳細は不明ながら、1938年には田辺尚雄による鑑定がおこなわれた⁽²⁶⁾。徳川家が見舞われた財務の破綻、戦時下、戦後の海外からの購入打診のなかでも、散逸や海外流出に抗して、徳川頼貞はこの楽器コレクションの維持に努めた⁽²⁷⁾。

(23) 『紀州徳川家伝来楽器コレクション』(国立歴史民俗博物館, 2004)。

(24) 水野僚子「紀州徳川家旧蔵楽器コレクションの伝来について」『紀州徳川家伝来楽器コレクション』, p. 323-328.

(25) 『南葵音楽事業部摘要』第1, p. 39.

(26) 頼貞が鑑定と言っているのは、1956年に刊行された『元紀州徳川家所蔵雅楽器目録』(島根県立博物館建設促進委員会発行)に掲載された「鑑定書」をさしている。同目録には、徳川頼貞による「譲渡証」も掲載されている。水野僚子による前掲論文参照。

(27) 徳川治寶が蒐集した楽器類の全体と田部長右衛門が譲渡を受けたコレクションとが同一であるかは疑義もある。



図録『紀州徳川家伝来楽器コレクション』
(国立歴史民俗博物館, 2004)



23代 田部長右衛門 (1906-1979)
田部グループのウェブサイト「たなべのあゆみ」より



「紀州徳川家伝来楽器コレクションの研究」『国立歴史民俗博物館 研究報告』第166集(2011)所収

音楽図書館閉館から21年を経た1953年11月、当時の文部大臣で島根県出身の大達茂雄の斡旋によって、コレクションは一括して田部長右衛門（第23代、1906～79年）に譲渡された。遠祖は紀州熊野庄（田辺族）にあるという田部家は島根の山林地主で、のちに島根県知事となる彼は、当時は衆議院議員、財団法人松江博物館の理事長であり、島根県立博物館の建設委員会会長でもあった。

田部長右衛門は、コレクションを私蔵することなく、財団法人松江博物館の所蔵とした。楽器類は、新設された島根県立博物館で展示された後に、1972年に松江博物館から文化庁に所蔵が移り、東京国立博物館を経て、1983年に国立歴史民俗博物館所蔵となり現在に至っている。

単なる楽器コレクションを遙かに超え、学術的にも貴重な由来や由緒に関わる資料を添え、しばしば優れた工芸品でもある箱に収められた楽器群は、文化の粋であり審美観の表象でさえある。公共財として活用しようとする田部長右衛門に、コレクションの「譲渡証」をしたため、紀州徳川家に残されていた最後の重要な文化・学術資源の公共財化への目処がついてから半年後、頼貞は杉並の寓居で逝去している。



箏 (1658-1661)

銘「君が千歳」、別銘「初音」

金銀金具による豪華な装飾が施された和琴

笙箱 (1810)

徳川治宝の筆で「播州斑鳩寺旧蔵品を模して文化7年正月に造る」と記されている



ミュージック・ライブラリーの夢

南葵音楽図書館の成立と展開 (5)

—1926~27年の資料蒐集と遠藤宏—

林 淑 姫

はじめに

南葵音楽図書館は1924(大正13)年10月、「南葵文庫」の東京帝国大学移管にともなって設けられた「南葵楽堂図書部」を経て、翌25年10月に発足、新たに独立した機関として活動を開始した。「南葵文庫音楽部」から「南葵音楽事業部附属南葵音楽図書館」へと展開するにあたってとりわけ深く考察されなければならなかった課題は図書館の性格を決定しその活動の中心となる蔵書形成についてだった。計画立案に加わった主要な人物は田村寛貞(1883~1934年)、兼常清佐(1885~1957年)、および遠藤宏(1894~1963年)、辻莊一(1895~1987年)である。新たなブレーンとして「事業部」評議員に迎えられた彼らは徳川頼貞とほぼ同世代の30代、40代の音楽研究者だった。

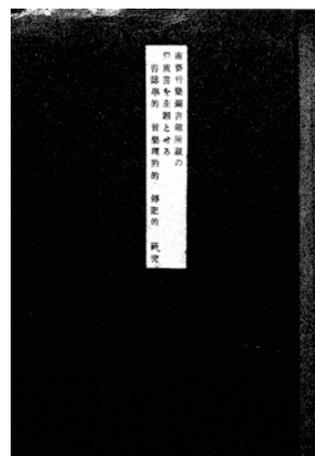
音楽に関する研究は大正期に入って明治期の教育、啓蒙を主眼とした草創期から脱しつつあり、ラファエル・フォン・ケーベル⁽¹⁾が伝えた音楽美学や構築されつつあった歴史学方法論などに基づく本格的な学問を志す研究者たちが活動を始めていた。そうした気運を背景にして南葵音楽図書館は出発した。したがって彼らが選択した道は、南葵文庫音楽部時代の音楽愛好家等を対象とした啓蒙的な一般向け図書館から本格的な音楽研究の領域をも視野に入れた学術図書館への転換であり、必要とされた資料は当代の研究書の上でのみ知っていた古典的文献(一次文献)そのものである。

その方針は田村寛貞の1926年の訪独を契機として具体化された。田村のドイツにおける蒐書活動はベルリン大学教授マックス・フリートレンダーの協力と助言を得て展開され、その後

(1)Raphael von Koeber (1848-1923)。ロシア生まれ。モスクワ音楽院で作曲をチャイコフスキーに、ピアノをN.G.ルビンシテーインに師事。卒業後イェーナ大学、ハイデルベルク大学で哲学、文学を学ぶ。ショーベンハウアーの研究で知られる。1893年、E.v.ハルトマンの推薦により東京帝国大学文科大学に招聘され哲学を講じる(～1914年)、その間1898年より10年間東京音楽学校講師を兼任、音楽史、ピアノを教授。周囲から尊敬と親しみをこめて「ケーベル先生」と呼ばれた。門下に西田幾多郎、阿部次郎、和辻哲郎ら、音楽の教え子に瀧廉太郎、幸田延、橋糸重、本居長世らがいる。1923(大正12)年6月14日横浜で永眠。



遠藤宏(1949年撮影)



遠藤宏稿「南葵音楽図書館所蔵の貴重書を主題とせる音楽書誌学的、音楽理論的、傳記的、研究」(明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館蔵 上図とも)



同上・標題紙と献辞

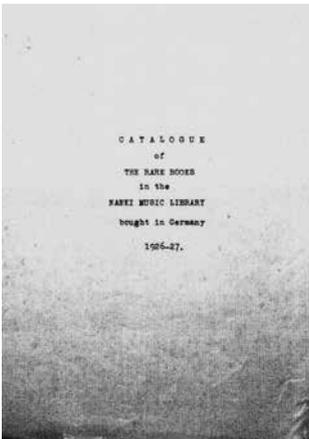
の南葵音楽図書館の蔵書の中核をなすものとなった。その過程と実績については既に述べた⁽²⁾。1929(昭和4)年に刊行された『南葵音楽事業部摘要』で誇らしげに紹介されている資料の数々はこの時期の方針と実践の成果である。その時から続けられた精力的な蒐集によって蔵書は質量ともに飛躍的に発展、内容的には1929年の改定分類表⁽³⁾が示す通り領域の拡大と深化が図られ、数量的には南葵文庫時代の約3,000点からほぼ5倍の蔵書を抱えるようになる。

田村とともに選書、資料整理にあたった評議員兼研究員の一人であった遠藤宏は、ドイツで蒐集された当該資料のうち特筆すべき書物を採り上げ、解題集「南葵音楽図書館所蔵の貴重書を主題とせる音楽書誌學的、音楽理論的、傳記的、研究」を執筆した。1926(大正15)年に兼常清佐、辻莊一が執筆したカミングス文庫の解説⁽⁴⁾に次ぐ蔵書の資料研究である。執筆時期は明記されていないが、南葵音楽図書館蔵書目録「音楽書編」刊行(1929年9月)以降のことと推察される。刊行が予定されていたようだが、南葵音楽図書館の閉鎖という事情のゆえであろう、未刊のまま残された。以後原稿は長く著者の手許に置かれていたが、没後に他の関係資料とともに遠山音楽財団附属図書館(現・明治学院大学図書館附属遠山一行記念日本近代音楽館)「遠藤宏文庫」に収められた。

本稿ではこの遠藤宏の未発表原稿を紹介し、南葵音楽図書館スタッフが思い描いたミュージック・ライブラリーの夢にも似た姿を彼らとともに追ってみたい。

遠藤宏原稿「南葵音楽図書館所蔵の貴重書を主題とせる音楽書誌學的、音楽理論的、傳記的、研究」について

「遠藤宏文庫」には、自筆原稿「南葵音楽図書館所蔵の貴重書を主題とせる音楽書誌學的、音楽理論的、傳記的、研究」⁽⁵⁾のほか、執筆にあたって準備されたものと思われるタイプ稿の目録 *Catalogue of the Rare Books in the Nanki Music Library bought in Germany 1926-27* がある。著者、書名のほか書誌事項が簡潔に記されており、原稿はこれに対応して執筆された。



「貴重書目録」タイプ稿

(2) 当時の蒐書活動については、拙稿「ミュージック・ライブラリーの夢(4) — 1926年の蒐書活動と田村寛貞」『南葵音楽文庫紀要』6号(2023), p. 15-23および「フリートレンダー文庫 目録と解説」『南葵音楽文庫紀要』5号(2022), p. 64-77参照。

(3) 分類表の変遷については拙稿「ミュージック・ライブラリーの夢(2)」『南葵音楽文庫紀要』2号(2019), p. 15-24参照

(4) 『南葵音楽図書館所蔵 カミングス文庫に就て』(南葵音楽図書館, 1925.1).

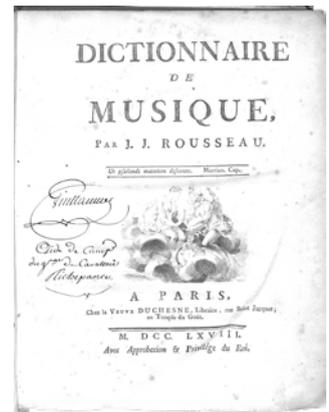
(5) 遠藤宏自筆原稿。B4判400字詰め原稿用紙136枚、二つ折り。綴じ。簡易製本(表紙付。題簽タイプ稿)。ペン書。標題紙(献辞を含む)1枚、前付(目次、序)4枚、本文131枚(番号付1-131)。日付記入なし。別稿貴重書一覧は、タイプ稿9枚(表紙1枚、本文8枚8p)。

遠藤が選定した「貴重書」は田村寛貞がドイツで購入した書籍に限られ、同時期に受入れたフリートレンダー文庫資料は対象としていない。理由は判然としないが、あるいは別にその目録を作る計画があったのかもしれない⁽⁶⁾。原稿標題紙には「南葵音楽図書館研究室にて」が付記され、献辞「本稿を南葵音楽図書館に献じ／音楽書の蒐集に努力せられ、研究に多大の／便誼を與へられる徳川頼貞侯に厚く感謝致します」が添えられている。

貴重書の選定基準は、1) 1800年以前の刊行書、2) 1800年以後の「得難き」書、3) 初版本または珍本、4) 内容的に優れているもの、5) 注目すべき書入れ、署名のあるもので、その観点から当初55点を対象とした。この点数は序文に記され、また前述のタイプ稿に記載された資料の点数でもあるが、実際は53点である。2点はその後考えを変えたとみえ割愛されている(後述)。取り上げた資料は南葵音楽図書館分類法にしたがった区分のもとで項目ごとに記述され、それぞれ著者の活動、著作の解題と位置づけ、時代背景等について考察されている。区分10項目ごとの収録書目の概略は次の通りである。(詳細は別掲「貴重書目録」を参照)。

- (一) 「辞書」(5点・刊年1703-1816)
S. de ブロッサール、J.-J. ルソーの音楽辞書ほか
- (二) 「一般音楽理論に関する書」(4点・刊年1555-1588)
N. ヴィチェンティーノとG. ツァルリーノの著作
- (三) 「和声学及びThorough-Bassに関する書」(12点・刊年1716-1814)
J. D. ハイニッヘン、J. マッテゾン、J. Ph. ラモー、G. タルティーニ、F. W. マルプルフ、F. A. ヴァロツティ、J. H. クネヒトの著作
- (四) 「対位法並にカノン、フーゲに関する書」(4点・刊年1742-1806)
J. J. フックス、J. Ph. キルンベルガー、G. B. マルティーニ、F. W. マルプルフの著作
- (五) 「楽式論及び作曲學に関する書」(5点・刊年1745-1832)
M. シュピース、J. リーペル、H. Ch. コッホ、G. ウェーバーの著作
- (六) 「聲樂に関する書」(2点・刊年1780-1426)
J. A. ヒラー、A. B. マルクスの著作
- (七) 「器樂に関する書」(7点・刊年1759-1830)
C. Ph. E. バッハ、L. モーツァルト、J. J. クヴァンツ、J. P. ファンメルの著作、ほか

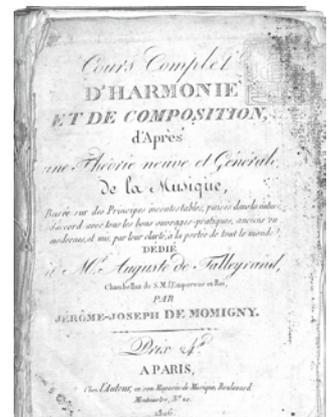
(6) 注1 参照。



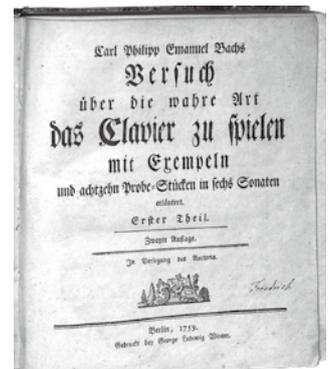
ルソー『音楽辞書』初版(1768)



ツァルリーノ『ハルモニア教程』(1588) 3部作を所蔵。図は第3部



モミニ『和声と作曲講義』第3巻(1806)



C.Ph.E. バッハ『正しいクラヴィエア奏法への試論』2版(1759-1762) 合冊版



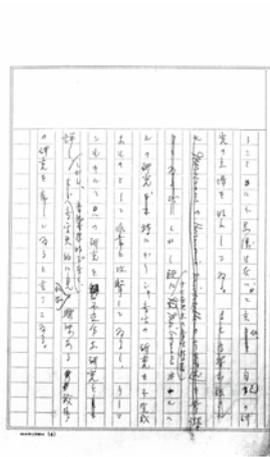
キルヒャー『普遍音楽』(1650)

- (八) 「教則本」(5点・刊年1793-1845)
18世紀初期のヴァイオリンおよびチェロ教則本
- (九) 「音響學に關する書」(7点・刊年1650-1855)
A. キルヒャー、E. F. クラドニの著作
- (十) 「音樂美學に關する書」(2点・刊年1753-1825)
Ch. アヴィソンとA. F. J. ティボーの著作

当初候補に挙げられていて最終的に割愛された書目は、田中正平の *Studien im Gebiete der reinen Stimmung* (純正律の研究) (Leipzig, 1890) と P. リヒテンタールの4巻本の音楽辞典 (Milano, 1826) である。前者は市販されたとはいえ学会誌抜刷りであることが割愛の理由であったろうか。後者はイタリアの近代的音楽辞典の先駆をなすものだが所謂「得難き書」ではなかったのかもしれない。



遠藤宏稿「音響學・キルヒャー」の項 (No. 114-115) フリートレンダー文庫蔵書票に採用した図について。



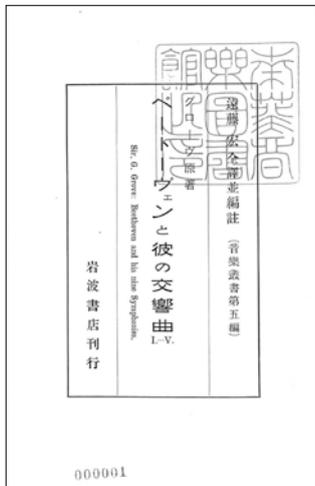
序文にはまた執筆にあたって参考にした書目が挙げられている。A. フォルケルやA. ホフマイスターの音楽文献目録、R. アイトナー、Fr. J. フェティスの音楽事典、H. リーマンの辞書、音楽史文献をはじめとする20数点の書冊もまたこの時期に精力的に蒐集されたものである。

資料の整理と調査にあたった遠藤宏の書物をひとつひとつ繙き読み解いてゆく真剣なまなざしと亢奮が見えるようだ。

遠藤宏について

1894 (明治27) 3.20 ~ 1963 (昭和38) 2.2

横浜生まれ。1921 (大正10) 年東京帝国大学文学部哲学科卒業、大学院に進学し音楽美学、音楽史を修める。大塚保治 (1869 ~ 1931年) に師事。在学中より学友会音楽部のオーケストラにヴァイオリン (ヴィオラ) 奏者として参加、のち指揮者も務める。父が学習院で教鞭をとっていたこともあって、田村寛貞、徳川頼貞たちの「音楽奨励会」に加わり、大正末年ごろより幹事役を務める。1922年12月に南葵楽堂で開催された東京帝国大学学友会音楽部による「ベートーヴェン祭」ではヴィオラ奏者として《交響曲第4番》などの演奏に加わるとともにプログラム解説を担当している。1925 (大正14) 年2月より南葵音楽図書館の前身「南葵楽堂図書部」で蔵書の整理にあたり、同年10月の南葵音楽事業部の創



『ベートーヴェンと彼の交響曲 I-V』(岩波書店, 1925)

設時に評議員に就任。兼常清佐、辻莊一らと附属南葵音楽図書館の研究事業に携わるとともに、12月、G. グローヴの*Beethoven and His Nine Symphonies*を翻訳、全2巻予定のうち第1巻として『ベートーヴェンと彼の交響曲I.-V.』を岩波書店より刊行（第2巻は未刊）。この頃より瀬戸口藤吉に代って東京帝大音楽部の常任指揮者を務めた（1935年まで）。年1度開かれる定期演奏会のための選曲、演奏にあたって南葵音楽図書館所蔵の楽譜を大いに活用したようである。

南葵音楽図書館時代に蔵書の調査を通して資料研究を進め、最初の編著書に民族音楽文献目録 *Bibliography of Oriental and Primitive Music* (1929年5月刊) がある。同じ頃シューベルト作品目録 *Franz Schubert's Gesamtwerke chronologische-tabellarische Übersicht* (1928年) を執筆。シューベルト没後100年を期して南葵から刊行が予定されていたようで原稿もほとんど完成させていたが「貴重書研究稿」同様こちらも未刊に終わった。一方、1931（昭和6）年1月には帝大時代の恩師大塚保治の還暦記念論文集『美学及藝術史研究』に阿部次郎、上野直昭らとともに寄稿、「十四世紀に於ける伊太利の音楽“Ars nova”に就て」を発表している。

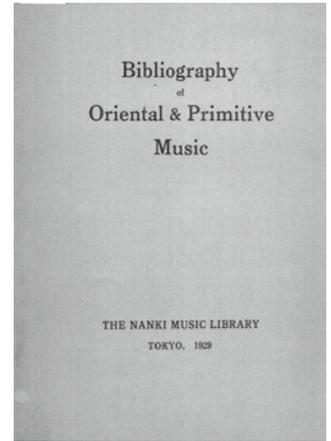
南葵音楽図書館が閉鎖されたのち、1935（昭和10）年東京音楽学校教授に就任（1946年公職追放令により免官）、のち北海道大学教授、北海道学芸大学教授を務める。東音教授時代より洋楽受容史および瀧廉太郎研究を進め、戦後、名著『明治音楽史考』（有朋堂、1948年4月刊）、『瀧廉太郎の生涯と作品』（音楽之友社、1950年9月、改訂再版1952年）を刊行、その後の洋楽史研究に多大な影響を及ぼした。北海道では研究、教職の傍ら札幌放送交響楽団の指揮者も務めている。1926（大正15）に結婚した比佐夫人（1903～86年）はピアニスト。

遠藤宏関係資料は前述のように、現在明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館「遠藤宏文庫」として保管されている。南葵関係資料を含む興味深い資料群である。

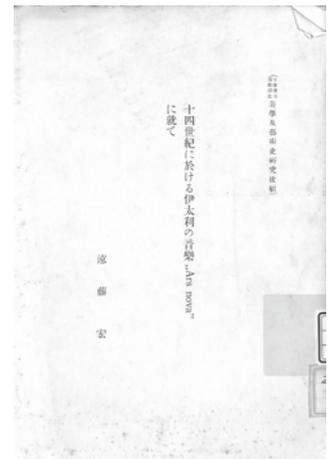


東京帝国大学音楽部第22回演奏会（日本青年館, 1935）
遠藤宏指揮。遠藤比佐追想文集『かくも嬉しく生き
生きと』（1987）より

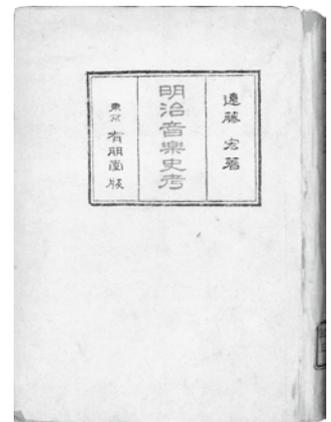
本稿執筆にあたり、同館の懇切なご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。



Bibliography of Oriental and Primitive Music (1929)



「十四世紀に於ける伊太利の音楽“Ars nova”に就て」（1931）『大塚博士還暦記念 美学及藝術史研究』 抜刷



『明治音楽史考』（1948）



『瀧廉太郎の生涯と作品』
改訂再版（1952）

Catalogue of the Rare Books in the Nanki Music Library bought in Germany 1926-27.

1. 「音楽辞典」 (M02 Encyclopaedias & Dictionaries)

資料 記号 M	著者標目	書名と著者表示、版表示 (叢書)	出版地 : 出版者	刊年	形態	注記	請求記号
1 02/67	Brossard, Sébastien de, 1654-1730.	Dictionnaire de musique, contenant une explication des termes grecs, latins, italiens, & François les plus usitez dans la musique ... / par Sebastien de Brossard	Paris : chez Christophe Ballard	1703	[112] p. ; 31 cm.		M-3/14
2 02/68	Rousseau, Jean-Jacque, 1712-1778.	Dictionnaire de musique / par J.J. Rousseau	Paris : chez la Veuve Duchesne	1768	ix, 548 p., 14 fold. leaves of plates		M-6/73
3 02/69	Rousseau, Jean-Jacque, 1712-1778.	Musique / [Jean-Jacques Rousseau] ; [édité et reproduit par Framery, Ginguéné et Momigny, 1791, 1818]	[Paris : chez Panckoucke]	1791- 1818	40 p., 33 fold. Reprint from Encyclopedié methodique selon l'ordre des matieres. Tom. II. Pl. du Dict. rais des Arts		M-6/74
4 02/40 /a	Gerber, Ernst Ludwig, 1746-1819.	Neues historisch-biographisches Lexikon der Tonkünstler, welches Nachrichten von dem Leben und den Werken. 4 Bde.	Leipzig : A. Kühnel	1812- 14	4 vols. ; 23 cm. 2 部所蔵		M-6/28 -31
5 02/62	Choron, Alexandre, 1771-1834.	Dictionnaire historique des musiciens, artistes et amateurs, morts ou vivants : qui se sont illustrés en une partie quelconque de la musique et des arts qui y sont relatifs... Précédé d'un sommaire de l'histoire de la musique / par Al. Choron et F. Fayolle. Tome I-II in 1.	Paris : Chimot	1817	2 vols. in 1 (xcii, 435, 470 p.) ; 21 cm.		M-6/9

2. 「一般音楽理論に関する書」 (M11 General Theory of Music)

6 11/62	Vicentino, Nicola, 1511-1576?	L'antica musica ridotta alla moderna pratica, con la dichiaratione : et con gli esempi de l tre generi, con le loro spetie, et con l'inventione di uno nuovo stromento, nelquale si contiene tutta la perfetta musica, con molti secreti musicali ([Reprod.]) / dal reverendo M. Don Nicola Vicentino	Roma : Antonio Barre	1555	291 p. ; 30 cm.		M-3/19
7 11/63	Zarlino, Gioseffo, 1517-1590.	Le istituzioni harmoniche del reverendo M. Gioseffo Zarlino da Chioggia : nelle quali; oltre le materie appartenenti alla musica; si trovano dichiarati molti luoghi di poeti, L'historici, & di filosofi ...	Venetia : appresso Francesco Senese	1562	[10], 347 p. ; 32 cm.		M-3/12
8 11/64	Zarlino, Gioseffo, 1517-1590.	Dimostrationsi harmoniche del R.M. Gioseffo Zarlino da Chioggia maestro di capella della illustris. signoria di Venetia : nelle quali realmente si trattano le cose della musica: & si risolvono molti dubbii d'importanza : opera molto necessaria à tutti quelli, che desiderano di far buon profitto in questa nobile scienza : con la tavola delle materie notabili contenute nell'opera.	Venetia : per Francesco de' Franceschi Senese	1571	312, [10] p. ; 30 cm.		M-6/49

資料 記号	著者標目	書名と著者表示、版表示 (叢書)	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
9 11/65	Zarlino, Gioseffo, 1517-1590.	Sopplimenti musicali del Rev. M. Gioseffo Zarlino da Chioggia. Maestro di cappella della sereniss. Signoria di Venetia : ne i quali si dichiarano molte cose contenute ne i due primi volumi, delle istituzioni & dimostrationi ; per essere state malintese da molti ; & si risponde insieme alle loro calornnie. Con due tavole, l'una che contiene i capi principali delle materie, & l'altra le cose piu notabili, che si trovano nell'opera. Terzo volume.	Venetia : Francesco de' Franceschi Senese	1588	[14], 330, [20] p. ; 30 cm.		M-3/19
3. 「和声学及びThorough-Bass に関する書」 (M13 Harmony, Thorough-Bass)							
10 13/78	Heinichen, Johann David, 1683-1728.	Der General-bass in der Composition, oder, Neue und grundliche Anweisung, wie ein musiclebender mit besonderm Vortheil, durch die principia der Composition, nicht allein den General-bass im kirchen- cammer- und theatralischen Styl6 vollkommen, & in aliori gradu erlernen, sondern auch zu gleicher Zeit in der Composition selbst, wichtige profectus machen könne	Dresden : bei dem Autore	1728		Revised ed. of his "Neu erfundene und grundliche Anweisung, zu wollkommener Erlernung des general-basses", Hamburg, 1711 未確認	／
11 13/79	Mattheson, Johann, 1681-1764.	Johann Mattheson's Kleine General-Baß-Schule : worin nicht nur Lernende, sondern vornehmlich Lehrende ... zu mehrer Vollkommenheit in dieser Wissenschaft ... angeführt werden. 2. Aufl.	Hamburg : Johann Christoph Kisser	1735	[12], 224, [12] p. ; 22 cm.		M-1/15
12 13/73	Rameau, Jean-Philipp, 1683-1764.	Génération harmonique, ou, Traité de musique theorique et pratique / par M. Rameau.	Paris : chez Prault fils	1737	[14], 201 [i.e.227], [40] p. : music, plates ; 20 cm.		M-1/17
13 13/74	Tartini, Giuseppe, 1692-1770.	Trattato di musica secondo la vera scienza dell'armonia	Padova : nella Stamperia del Seminario, appresso G. Manfrè	1754	[8], 175, [1] p., 1 fold. plate ; 26 cm.		M-6/95
14 13/75	Tartini, Giuseppe, 1692-1770.	De' principi dell' armonia musicale contenuta nel diatonico genere dissertazione / di Giuseppe Tartini.	ibid.	1767	[12] 120 p. : ill., music ; 23 cm.		M-1/35
15 13/76	Daube, Johann Friedrich, 1730-1797.	General-baß in drey Accorden, gegründet in den Regeln der alt- und neuen Autoren ... / von Johann Friedrich Daube.	Leipzig : Verlegts Johann Benjamin André	1756	xxii, 215 p. ; 22 cm.		M-1/47
16 13/81	Marpurg, Friedrich Wilhelm, 1718-1795.	Handbuch bey dem Generalbasse und der Composition. 3 Teile u. Anhang in 1 Bd.	Berlin : J. J. Schützens Wittwe ; G. A. Lange	1755, 57, 58, 60		未確認	／

目録料 記号M	著者標目	書名と著者表示、版表示 (叢書)	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
17	13/77 Vallotti, Francesco Antonio, 1697-1780.	Della scienza teorica, e pratica della moderna musica. Libro primo.	Padova : nella Stamperia del Seminario, appresso Giovanni Manfrè	1779	xxxi, 168 p., 7 leaves of plates ; 36 cm.		M-7/38
18	13/80 Knecht, Justin Heinrich, 1752-1817.	Elementarwerk der Harmonie : als Einleitung in die Begleitungs- und Tonsetzkunst, wie auch in die Tonwissenschaft. 2. ganz umgearb. u. verm. Ausg. 2 Abt. in 1.	München : Falter	1814	iv, 264 p. ; 25cm.		M-6/113
19	13/67 Catel, Charles Simon, 1773-1830.	Traite d'Harmonie / par Catel ; adopté par le Conservatoire pour servir à l'Étude dans cet Établissement.	Paris : chez Janet et Cotelle	1802	70, [1] p. ; 34 cm.		M-7/10
20	13/69 Momigny, Jérôme-Joseph de, 1762-1842.	Cours complet d'harmonie et de composition, d'après une théorie neuve et générale de la musique, basée sur des principes incontestables ... / par Jérôme-Joseph de Momigny. [Tome III]	Paris : chez l'Auteur	1806	314 p. : plates ; 22 cm.	"Dédié / M. Auguste de Talleyrand" -- t.p. 図版篇 Tome I, II (合本. 「研究」稿によれば G. Meyerbeer蔵書 票貼付) 未確認	M-1/53
21	13/68 Reicha, Anton, 1770-1836.	Cours de composition musicale, ou, Traité complet et raisonné d'harmonie / par Antoine Reicha.	Paris : chez Gambaro	1716	269 p. ; 34 cm.	"Dédié à monsieur de la Ferté" 2 部所蔵	M-4/2 M-7/29
4. 「対位法並にカノン、フーゲに関する書」 (M14 Counterpoint, Canon & Fugue)							
22	14/29 Fux, Johann Joseph, 1660-1741.	Gradus ad Parnassum, oder, Anführung zur Regelmässigen musikalischen Composition ... / ausgearbeitet von Johann Joseph Fux ; aus dem Lateinischen ins Deutsche übersetzt ... herausgegeben von Lorenz Mizlern.	Leipzig : im Mizlerschen Bühverlag	1742	[6], 197 p., 57 leaves of plates ; 21 cm.		M-1/30/
23	14/30 Kirnberger, Johann Philipp, 1721-1783	Die Kunst des reinen Sazers in der Musik : aus sichern Grundsätzen hergeleitet und mit deutlichen Beispielen erläutert / von Joh. Phil. Kirnberger. 4 vols.	Berlin ; bey G.J. Decker und G.L. Hartung	1773, 76,77,79	4 vols. ; 21 cm.		M-6/42 -45
24	14/32 Martini, Giovanni Battista, 1706-1784.	Esemplare o sia saggio fondamentale pratico di contrappunto sopra il canto fermo / da F. Giambattista Martini. Parte primo.	Bologna ; per Leilio dalla Volpe Impressore	1774	xxxii, 260 p. : port. ; 31 cm	Bound with the parte seconda. [dedica 1775]. xxxxvi, 328 p.	M-7/24
25	14/31 Marburg, Friedrich Wilhelm, 1718-1795.	Abhandlung von der Fuge nach den Grundsätzen und Exempeln der besten deutschen und ausländischen Meister / entworfen von Friedrich Wilhelm Marburg.	Leipzig : bei A. Kühnel (Bureau de Musique)	1806	vi, 120, 92 p. ; 24 cm.	"Nebst Exempeln in LXII und LX Kupfertafeln"	M-6/59

5. 「楽式論及び作曲学に関する書」 (M16 Form and Composition)

資料 記号	著者 書名と著者表示、版表示 (叢書)	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
26 16/27	Spieß, Meinrad, 1683-1761. Tractatus musicus compositorio-practicus : das ist musicalischer Tractat, in welchem alle gute und sichere Fundamenta zur musicalischen Composition aus denen alt- und neuesten besten Autoribus herausgezogen / von von R.P. Meinrado Spiess. Opus VIII.	Augsburg : gedruckt und verlegt bey Johann Jacob Lotter	1745	[14], 220, [8], 11 p. ; 34 cm.		M-7/34
27 16/37	Riepel, Joseph, 1709-1782. Anfangsgründe zur musicalischen Setzkunst : nicht zwar nach alt- mathematischer Einbildungsart der Zirkel- harmonisten, sondern durchgehends mit sichtbaren Exempeln abgefasset, De Rhythmopoeia, aber, Von der Tactordnung Anfangsgrunde zur musicalische Setzkunst. / zu etwa beliebigem Nutzen herausgegeben von Joseph Riepel. 2. Ausg.	Regensburg : Verlegts Johann Leopold Montag	1786	79 p. ; 33 cm.	Bound with the same editor's books: Grundregeln zur Tonordnung insgesamt ... (Frankfurt,1755)-- Gründliche Erklärung der Tonordnung ... (Frankfurt, 1757) -- Erläuterung der betrüglichen Tonordnung ... (Augsburg, 1765) -- Unentbehrliche Anmerkungen zum Contrapunct ... (Regensburg, 1768) -- Baßschlüssel, das ist, Anleitung für Anfänger und Liehaber der Setzkunst ... (Regensburg,1786). Erk's signature	M-3/9
28 16/38	Riepel, Joseph, 1709-1782. Harmonisches : Dichtern melodischer Werke gewidmet und angehenden Singcomponisten zur Einsicht mit platten Beyspielen geschpächweise abgetaßt / durch Joseph Riepel.	Regensburg : bey J.L. Perile	1776	93 p. ; 33 cm.		M-7/31
29 16/36	Koch, Heinrich Christoph, 1749-1816. Versuch einer Anleitung zur Composition / von Heinrich Christoph Koch.	Leipzig ; bey Adam Friedrich Böhme	1782, 87, 93	3 vols. ; 18 cm.		M-2/2
30 16/39	Weber, Gottfried, 1779-1839. Versuch einer geordneten Theorie der Tonsetzkunst / von Gfr. Weber. 3. neuerdings überarbeitete Aufl.	Mainz : im verlage der Hof-Musikhandlung von B. Schott	1830- 32	4 vols. ; 22 cm.		M-3/1
6. 「声楽に関する書」 (M21 Vocal Music)						
31 21/25	Hiller, Johann Adam, 1728-1804. Anweisung zum musicalisch-richtigen Gesange ; mit hinlänglichen Exempeln / erläutert von Johann Adam Hiller.	Leipzig : bey Johann Friedrich Junius	1780	[18], 224, 64 p. : music ; 22 cm.	Bound with: Anweisung zum musikalisch-zierlichen Gesange : mit hinlänglichen Exempeln. Leipzig, 1780. (xxx, 152 p. ; 22 cm)	M-1/40
32 21/26	Marx, Adolf Bernhard, 1795-1866. Die Kunst des Gesanges, theoretisch-praktisch / von Adolph Bernhard Marx.	Berlin : in Adolph Martin Schlesinger's Buch- und Musik-Handlung	1826	x, 357, [10] p. ; 23 cm.		M-1/45

7. 「器楽に関する書」 (M22 Instrumental Music)

目録記号	著者	書名と著者表示、版表示 (叢書)	出版地	出版者	刊年	形態	注記	請求記号
33 22/22a	Bach, Carl Philipp Emanuel, 1714-1788.	Carl Philipp Emanuel Bach's Versuch über die wahre Art das Clavier zu spielen : mit Exempeln und achtzehn Probe-Stücken in sechs Sonaten erläutert. Th. I, II.	Berlin :	gedruckt bey George Ludewig Winter	1759-1762	2 vols. in 1 ; 21 cm.	Th. I: 2. Aufl., 1759 Th. II: 1. Aufl., 1762 Friedlander文庫に4版(G. Schilling編. 1852)がある (M-1/36).	M-1/28
34 22/39a	Mozart, Leopold, 1719-1787.	Leopold Mozarts ... Gründliche Violinschule : mit vier Kupfertafeln und einer Tabelle. 3. vermehrte Aufl.	Augustsburg :	gedruckt und zu finden bey Johann Jacob Lotter	1787	[7], 268 p. ; 24 × 19 cm.	カミングス文庫に初版 (1769)がある (M-2/5).	M-1/31
35 22/72a	Quantz, Johann Joachim, 1697-1773	Johann Joachim Quantzens Versuch einer Anweisung die Flöte traversiere zu spielen : mit verschiedenen, zur Beförderung des guten Geschmacks in der praktischen Musik dienlichen Anmerkungen begleitet, und mit Exempeln erläutert. 3. Aufl.	Breslau :	bey Johann Friedrich Korn dem ältern	1789	[10], 334, 24 p. : ill. ; 24 cm.		M-2/14
36 22/63	Türk, Daniel Gottlob, 1750-1813.	Klavierschule, oder, Anweisung zum Klavierspielen für Lehrer und Lernende, mit kritischen Anmerkungen / von Daniel Gottlob Türk.	Leipzig :	Schwickert	1789	[6], 408, [12], 15 p. ; 22 cm.		M-1/43
37 22/39	Knecht, Justin Heinrich, 1752-1817.	Vollständige Orgelschule für Anfänger und Geübtere / herausgegeben Justin Heinrich Knecht. Abt. I, II, III.	Leipzig :	in der Breitkopfisch Musikhandlung	1795, 96, 98	3 vols. in 1 ; 32 cm.		M-7/22
38 22/64b	Hummel, Johann Nepomuk, 1778-1837.	Ausführliche theoretisch-practische Anweisung zum Piano-forte-Spiel, vom ersten Elementar-Unterrichte an, bis zur vollkommensten Ausbildung / von J.N. Hummel.	Wien :	bei Tobias Haslinger	1828	444 p. ; 34 cm.		M-7/16
39 22/60	Schneider, Friedrich, 1786-1853.	Handbuch des Organisten / von Friedrich Schneider. 3 Theile in 2.	Halberstadt :	bei Carl Brüggemann	1829, 30	3 vols. in 2 ; 22 × 28 cm.		M-2/24, 25

8. 「教則本」 (N31 Schools & Studies)

40 31/5b	Baillot, Pierre Marie François de Sales, 1771-1842.	Méthode de violon / par Baillot, Rode et Kreutzer ; révisée par Baillot.	Paris :	Magasin de Musique Faubourg Poissonnière	1793	165 p. : ill., music ; 32 cm.		M-7/5
41 31/15b	Baillot, Pierre Marie François de Sales, 1771-1842.	L'art du violon : nouvelle méthode dédiée a ses élèves / par P. Baillot.	Paris :	Conservatoire de Musique, dépôt Central de la musique	1835	279 p. : ill., music ; 37 cm.	著者署名本	M-7/4
42 31/16	Spohr, Louis, 1784-1859.	Violinschule / von Louis Spohr.	Wien :	bei Tobias Haslinger	1832	250 p. ; 34 cm.	Pl. no.: T.H.6050	M-7/35
43 42/3	Baillot, Pierre Marie François de Sales, 1771-1842.	Méthode de violoncelle et de basse d'accompagnement / Rédigée par Baillot, Levasseur, Catel et Baudiot.	Paris :	an Magasin de Musique du Conservatoire Royal	[n.d.]	206 p. ; 34 cm.		M-7/7

資料 番号	著者標目	書名と著者表示、版表示 (叢書)	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
44	42/4	Duport, Jean Louis. Essai sur le doigté du violoncelle et sur la conduite de l'archet / par J.L. Duport.	Paris : A. Cotelle	[1845]	269 p. : music ; 34 cm.		763.44/ DU

9. 「音響学に関する書」 (M62 Acoustics)

45	62/40	Kircher, Athanasius, [Musurgia universalis] Athanasii Kircheri Fvidensis e Soc. lesv presbyteri Mvsurgia vniversalis sive Ars magna consoni et dissoni in X. libros digesta ...	Romae : Ex typographia hæredum Francisci Corbelletti	1650	2 vols. in 1 : ill., music, plates (2 fold.), ports, tables ; 32 cm.		M-7/20
46	62/41	Kircher, Athanasius, [Phonurgia nova. German] Athanasii Kircher è Soc. Neue hall- vnd thon-kunst, oder Mechanische geheim-verbinding der kunst und natur ...	Nördlingen : gedruckt bey Friedrich Schultes, In verlegung Arnold Heylen, buchhändlers in Elwangen	1684	3 p.l., 162, [16] p. : ill., music, fold. plates, diagrams ; 34 cm.	Original ed. : Phonurgia nova, sive coniugium mechanico-physicum artis et naturae paranympha phonosophia Concinnatum, ... Campidonae 1673. Tr. by Agathus Carion, 1636-1710.	M-7/21
47	62/36	Chladni, Ernst Florens Entdeckungen über die Theorie des Klanges / von Ernst Florens Friedrich Chladni.	Leipzig : bey Weidmanns Erben und Reich	1787	77 p., 11 fold. plates ; 21 cm.		M-1/51
48	62/37	Chladni, Ernst Florens Über die Longitudinalschwingungen der Saiten und Stäbe / Ernst Florens Friedrich Chladni.	Erfurt : bey Georg Adam Keyser	1796	14 p. ; 30 cm.		M-6/8
49	62/38	Chladni, Ernst Florens Die Akustik / bearbeitet von Ernst Florens Friedrich Chladni.	Leipzig : bey Breitkopf und Härtel	1802	xxxii, 310 p., 12 leaves of plates ; 25 cm.	Bound with: an article of the author's "Über seine Aufnahme bey Napoléon und sonst in Paris, Cécilia, 5. Band (Heft 18)"	M-2/20
50	62/39	Chladni, Ernst Florens Neue Beyträge zur Akustik / von Ernst Florens Friedrich Chladni.	Leipzig : Breitkopf und Härtel	1817	xii, 90 p., 10 leaves of plates : ill. ; 24 cm.	未確認	/
51	62/35	Drobisch, Moritz Nachträge zur Theorie der musikalischen Tonverhältnisse / M.W. Drobisch.	Leipzig : S. Hirzel	1855	40 p. ; 30 cm.	"Aus den Abhandlungen der mathematisch-physischen classe der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften" -- Cover	761/DR/

10. 「音楽美学に関する書」 (M64 Aesthetics and Philosophy of Music)

52	64/38b	Avison, Charles, 1709-1770. An essay on musical expression / by Charles Avison. 2nd ed., with alterations and large additions. To which is added, a letter to the author, concerning the music of the ancients, and some passages in classic writers, relating to that subject. Likewise, Mr Avison's reply to the author of Remarks on the essay on musical expression. In a letter from Mr Avison. to his friend in London.	London : printed for C. Davis	1753	[12], 152, 43, [5], 53, [7] p., 3 fold. leaves of plates ; 20 cm.	ほかに2部所蔵 (M-1/19. およびカミングス文庫本M-1/21, 関連書と台冊). 初版 (1752) あり (M-1/25)	M-1/7
53	64/13	Thibaut, Anton Friedrich Justus, 1772-1840. Ueber Reinheit der Tonkunst / von Ant. Friedr. Just. Thibaut ; mit dem Vorwort von K.Ch.W.F. Bähr.	Heidelberg : J.C.B. Mohr	1825	xv, 100 p. ; 22 cm.	未確認	/

徳川頼貞がワシントンの議会図書館で見た カミングス旧蔵書⁽¹⁾

—オスカー・ゾネックとの会話をめぐって—

佐々木勉

1920（大正9）年のこと、南葵音楽文庫（当時の名称は「南葵文庫音楽部」）では、1月に購入から3年が経過していたウィリアム・ヘイマン・カミングス William Hayman Cummings (1831~1915年) の、やがて「カミングス文庫」と呼ばれることになる旧蔵書がイギリスから到着し、10月にはそれらを含む蔵書の閲覧が始まるなど、音楽図書館としての活動が軌道に乗り始めていた⁽²⁾。また、南葵楽堂（1918（大正7）年落成）に設置されたオルガンも同年10月に完成し、翌11月には披露演奏会が開催された⁽³⁾。これらを見極めた徳川頼貞（1892～1954年）は、翌1921（大正10）年1月から11月にかけて、音楽界や音楽図書館、音楽教育機関などの視察を目的にヨーロッパとアメリカを巡った。これが、『薔庭楽話』にいう、「第二次外遊」である⁽⁴⁾。同書の第9章「第二次外遊」は、この外遊の記録であり、ヨーロッパ各地で面会し、親交を結んだ音楽家たちとのエピソードや、訪問した音楽院や図書館での出来事が綴られている⁽⁵⁾。

本稿では、『薔庭楽話』に基づいて、頼貞がワシントンの議会図書館を訪れた際の出来事を振り返り、その記述について検討したい。

徳川頼貞の第2次外遊

最初に、『薔庭楽話』第9章「第二次外遊」に従って、徳川頼貞の第2次外遊を概観しよう（日付は『薔庭楽話』による）。

(1) 本稿は、2023年9月9日に和歌山県橋本市教育文化会館第1研修室で開催された「令和5年度南葵音楽文庫アカデミー」における講演『徳川頼貞がワシントン議会図書館で見たカミングス旧蔵書』に加筆したものである。

(2) 1920年頃の南葵音楽文庫については、林淑姫「ミュージック・ライブラリーの夢 南葵音楽図書館の成立と展開—南葵文庫音楽部の頃」『南葵音楽文庫紀要』1号（2018）, p. 19-27 に詳しい。また、カミングス文庫の購入については、佐々木勉「南葵音楽文庫収蔵『カミングス文庫』の研究—その沿革とカミングス文庫『音楽書』目録」『南葵音楽文庫紀要』4号（2021）, p. 15-24 及び篠田大基「故ダブリウ・エイチ・カミングス博士」『カミングス音楽文庫競買残餘図書購入顛末』「資料解題」『南葵音楽文庫紀要』1号（2018）, p. 88-91 参照。

(3) 篠田大基「南葵楽堂の演奏会のプログラム」『南葵音楽文庫紀要』2号（2019）, p. 25-34. 特に p. 29.

(4) 徳川頼貞『薔庭楽話』（春陽堂、1943）、同、美山良夫校注（中央公論新社、2021）, p. 178-235.

(5) 徳川頼貞の「第2次外遊」については、林淑姫「ミュージック・ライブラリーの夢 南葵音楽図書館の成立と展開（3）—南葵音楽図書館館長徳川頼貞・その形成」『南葵音楽文庫紀要』3号（2020）, p. 15-22 の「欧米の旅・1921年」で紹介されている。

頼貞は、1921（大正10）年1月25日に神戸港から旅立った。マルセイユに上陸し、その後ニース、モンテ・カルロを経てローマに到着、4月上旬と推測されるが、親交のあったエンリコ・サン・マルティーノ伯爵 Enrico San Martino（1863～1947年）の仲介でジャコモ・プッチーニ Giacomo Puccini（1858～1924年）に面会した⁽⁶⁾。さらにたまたま演奏旅行で同地に滞在していたアルトゥール・ニキシュ Arthur Nikisch（1855～1922年）を訪ね、彼からはフェルッチョ・ブゾーニ Ferruccio Busoni（1866～1924年）の紹介を受けた。次いで、フィレンツェに赴き、「皇室音楽院」を訪問している。

その後、ヴェネツィアを経てフランスに向かい、パリに到着したのは5月1日だった。同地では、セルゲイ・プロコフィエフ Sergei Prokofiev（1891～1953年）と再会したり⁽⁷⁾、その紹介でイーゴリ・ストラヴィンスキー Igor Stravinsky（1882～1971年）と会話する機会に恵まれた。また、旧知のジョセフ・ホルマン Joseph Hollman（1852～1927年）の紹介でカミーユ・サン＝サーンス Camille Saint-Saëns（1835～1921年）に面会した。さらに「春も盛りを過ぎた」頃に、ホルマンからヴァンサン・ダンディ Vincent d'Indy（1851～1931年）⁽⁸⁾の紹介を受け、食事を共にした。

夏には、ベルリンを経てロンドンに渡り、同地では、ヘンリー・ウッド Henry Wood（1869～1944年）に面会し、オーケストラやパイプオルガンについて助言を受けることができた⁽⁹⁾。

イギリス以降の旅については、旅の前半に比べてあまり詳細に記述されていないが、10月の初めにサザンプトンから出港して大西洋をニューヨークに渡り、ワシントンで議会図書館⁽¹⁰⁾を訪ねるなどした後、ボストンを経由してカナダに入り、オタワ、トロント、ヴァンクーヴァーを訪ね、アメリカに戻ってシアトル、サンフランシスコとたどり、11月3日に横浜に帰着している。

(6) 篠田大基「プッチーニに届かなかった楽譜」『南葵音楽文庫案内』和歌山県教育委員会編（中央公論新社，2021），p. 46。

(7) 徳川頼貞，前掲書，p. 135、及び近藤秀樹「プロコフィエフと頼貞：偶然の再会から」『南葵音楽文庫案内』，p. 47 参照。

(8) 南葵音楽文庫には、この面会の際にダンディから贈られた Vincent d'Indy, *César Franck* (Paris: Librairie Félix Alcan, 1914) が収蔵されている。ダンディによるサインと1921年5月16日の日付入り。近藤秀樹「ダンディ『セザール・フランク』」『南葵音楽文庫紀要』5号(2022), p. 58-62 参照。

(9) 篠田大基「徳川頼貞抄訳『指揮者ヘンリー・ウッドに関して』」（1920）『南葵音楽文庫紀要』6号(2023), p. 66-77 参照。

(10) 頼貞は、ワシントンの議会図書館の訪問については、『薈庭楽話』第9章「第二次外遊」ではなく、第7章「南葵楽堂」中の「南葵楽堂附属図書館とカミングス文庫」で思い出を語っている。徳川頼貞，前掲書，p. 154-156。



議会図書館 ジェファーソン館
Thomas Jefferson Building,
Library of Congress
ワシントンD.C.、1902年頃

ワシントンの議会図書館の訪問

頼貞は、すでに述べたように外遊の帰路にワシントンの議会図書館を訪問した。当時の議会図書館は、1902年に竣工したジェファーソン館を本館とする、すでに世界でも有数の図書館であった。頼貞は、同館について次のように説明している。

私は第二次外遊の帰途米国のワシントンを訪れた時、彼地〔ワシントン〕の有名なライブラリー・オブ・コングレス〔議会図書館〕を見物に行った。この図書館の音楽部は世界的に有名で、就中オペラのリブレットの蒐集は世界第一という評がある⁽¹¹⁾。

館内を案内したのは、オスカー・ゾネック Oscar Sonneck (1873～1928年) で、1902年から17年まで議会図書館の音楽部門を統括し、頼貞が訪問した当時は、すでに職を辞してニューヨークの音楽出版社「シャーマー Schirmer」に移っていた。同社では出版部門の責任者を務め、現在も刊行が続く *Musical Quarterly* 誌 (1915年創刊) の編集を担当している。ゾネックについては、次のように記した。

私は音楽部長のゾネック博士 (Dr. Sonneck) に案内されて館内を見て廻った。博士は其後ニューヨークのシャーマー出版会社に入社されて音楽に関する著述を出版しているから、日本でも博士の名を知っている人もあろうと思う⁽¹²⁾。

頼貞は、ゾネックに案内されて館内を一巡した後、1917年5月に開催されたカミングスの旧蔵書の競売で議会図書館が購入した、その旧蔵書が並ぶ書棚の前にやって来た。



オスカー・ゾネック
Oscar Sonneck
(1873-1928)

(11) 徳川頼貞, 前掲書, p. 154. 「オペラのリブレットの蒐集は世界第一という評がある」という情報は, "Sonneck, Oscar", *Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 5 (1928) の記述によると思われる。議会図書館は, 1908年にドイツの音楽商アルベール・シャッツ Albert Scahtz (1839～1910年) から12,000点を超えるイタリア、ドイツ、フランスの17～18世紀のオペラのリブレットのコレクションを購入し、収蔵していた (<https://www.loc.gov/collections/albert-schatz/about-this-collection/>) (参照 2023.12.14)。この購入に際し、交渉に当たったのが、議会図書館で頼貞を案内した、後述のオスカー・ゾネックである。

(12) 徳川頼貞, 前掲書, p. 154. この記述は, "Sonneck, Oscar," 前掲 *Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol.5 を参照したものと思われるが、オスカー・ゾネックは、おそらく博士号を取得していない。なお、ゾネックの経歴や著作については, "Sonneck, Oscar", *Grove Music Online* (<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.26217>)、及び "Libraries and Collections in the United States", *Grove Music Online* (<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.A2253081>) に詳しい (参照 2023.12.14)。なお、頼貞が議会図書館を訪ねた時には、すでにゾネックは同館を退職しており、ゾネックが頼貞を案内した経緯は不明である。

博士は私を顧みて、これは先頃亡くなった有名なカミングス博士のコレクションですと云った。

今日、議会図書館が収蔵するカミングスの旧蔵書は、59点である⁽¹³⁾。しかし、そこには、頼貞が訪問した1921年以降に同図書館が入手したカミングスの旧蔵書⁽¹⁴⁾も含まれており、頼貞の訪問当時、収蔵していたカミングスの旧蔵書の数は明らかではない。

徳川頼貞がワシントン議会図書館で見たカミングス旧蔵書

この時、頼貞が実際にカミングスの旧蔵書を手にとって閲覧したという記述はないが、書棚には、次のような楽譜などが並んでいた。

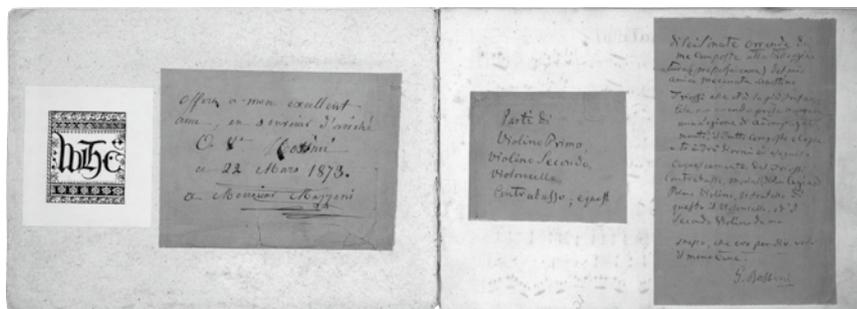
書棚でまず最初に目に留まったのは、著名な作曲家たちの自筆楽譜であろう。フランツ・シューベルト Franz Schubert (1797~1828年) のソプラノ独唱と弦楽合奏のための《サルヴェ・レジーナ (天の女王よ、聴き給え) *Salve Regina*》イ長調 作品153 (D. 676) の自筆楽譜⁽¹⁵⁾があった。裏表紙見返しに、頼貞が、南葵音楽文庫のカミングスの旧蔵書で見慣れていたのであろう、その署名入りの蔵書票が添付されている。また、ジョアキーノ・ロッシーニ Gioachino Rossini (1792~1868年) の《弦楽のための6つのソナタ》の自筆楽譜⁽¹⁶⁾もあった。表紙見返しにカミングス



フランツ・シューベルト《サルヴェ・レジーナ》議会図書館蔵 (ML96.S41)

[写真上] 表紙裏見返し、カミングスのサイン入り蔵書票

[写真下] 楽譜冒頭



ジョアキーノ・ロッシーニ《弦楽のための6つのソナタ》議会図書館蔵 (ML96.R8)

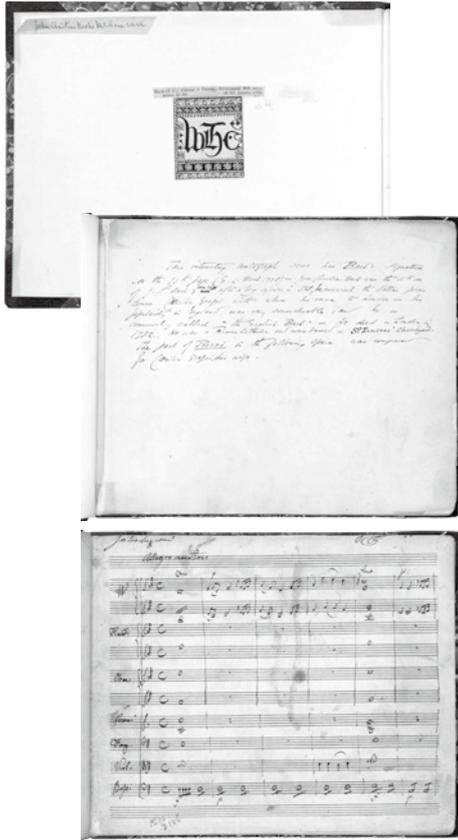
[写真上] 表紙見返し(左ページ)にカミングスの蔵書票、見返し(右ページ)にロッシーニ署名入りの作品説明
[写真下] 楽譜冒頭

(13)“Cummings, W(illiam) H(ayman)”, *Grove Music Online* (<https://doi.org/10.1093/gmo/9781561592630.article.06945>) (参照 2023.12.14) .

(14) 議会図書館には現在、ベートーヴェンの《弦楽三重奏曲》変ホ長調 作品3のフィナーレ楽章が所蔵されている (分類番号 ML96.B44)。カミングスの旧蔵書が1917年5月に競売にふされた際の競売目録番号は94番で、スティーヴンス社が落札しているが、議会図書館が、この自筆楽譜を購入したのは、1923年である。競売目録 *Catalogue of the Famous Musical Library of Manuscripts, Autograph Letters and Printed Books, The Property of the Late W. H. Cummings, Mus.Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E.*, (Sotheby, Wilkinson & Hodge, 1917), p. 10、及び https://opac.rism.info/metaopac/singleHit.do?methodToCall=showHit&curPos=268&identifier=251_SOLR_SERVER_604625398 (参照 2023.12.23) 参照。

(15) 議会図書館分類番号 ML96.S41. 前掲書, 競売目録, ロット番号 177.

(16) 議会図書館分類番号 ML96.R8. 前掲書, 競売目録, ロット番号 1465.



ヨハン・クリスティアン・バッハ《セファロスとプロクリウス》議会図書館蔵 (ML96.B185)
 [写真上] 表紙見返し、カミングスの蔵書票
 [写真中] 見返し、カミングスによる作品についてのメモ書き
 [写真下] 楽譜冒頭

の蔵書票とメモ書き、さらに続く見返しにはロッシェニ自身の署名入りの作品についてのメモ書きが添付されている。大バッハの末子でロンドンで活躍したことから「ロンドンのバッハ」と呼ばれたヨハン・クリスティアン・バッハ Johann Christian Bach (1735～82年) の3声のカンタータ《セファロスとプロクリウス *Cefalo e Procri*》の自筆楽譜⁽¹⁷⁾もあり、表紙見返しにはやはりカミングスの蔵書票があった。

印刷楽譜では、バロック初期に撥弦楽器の名手として活躍し、リュート音楽の発展に多大な貢献をしたジョヴァンニ・ジロラモ・カプスベルガー Giovanni Girolamo Kapsperger (1580～1651年) による《ギターネのタブラチュアを伴う1声の装飾されたアリア集第1巻 *Libro primo di Arie passeggiate à vna voce con l'intavolatura del chitarone*》(ローマ、1612)、《1声、2声、3声のヴィラネッラ集 *Libro prime di Villanelle à 1, 2 et 3*》(ローマ、1612)、《ギターネのためのタブラチュア曲集 *Libro primo d'intavolatura di chitarrone*》(ローマ、1612)、《1声の装飾されたモテット集第1巻 *Libro primo di mottetti passeggiati à una voce*》(ローマ、1612)、《リュートのためのタブラチュア曲集第1巻 *Libro primo d'intavolatura di lavto*》(ローマ、1612) という一連の作品集の合本⁽¹⁸⁾が書棚にあった。この合本では、最初に置かれた《装飾されたアリア集第1巻》の表紙見返しにカミングスの蔵書票、続く見返しにカミングスによって合本の一覧と説明が記され、彼の署名を見ることができる。



ジョヴァンニ・ジロラモ・カプスベルガー《ギターネのタブラチュアを伴う1声の装飾されたアリア集第1巻》議会図書館蔵 (M1490.K2)
 [写真左] 表紙見返し(左ページ)にカミングスの蔵書票、見返し(右ページ)にカミングスによる署名入りの合本内容の説明
 [写真右] タイトルページ

資料が並んでいた。

これらの他、カミングスが、特に自国イギリスの音楽に強い関心をもっていたことから、書棚には、自国作曲家たちの楽譜や音楽書を中心に、数は少なかったかもしれないが、貴重な

(17) 議会図書館の分類番号 ML96.B185. 前掲書, 競売目録, ロット番号 215.

(18) 議会図書館分類番号 M1490.K2. 前掲書, 競売目録, ロット番号 949.

徳川頼貞とオスカー・ゾネックとの会話

頼貞は、カミングスの旧蔵書が並ぶ書棚を前にして、ゾネックと次のような会話を交わしている⁽¹⁹⁾。その数が少ないことに気がついたが、気づいていないふりをした。

私はさてはと直ぐ心に思ついたがさあらぬ体で、大変本が少ないようですがと訊ねた。すると博士は口籠りながら「それが実はカミングス・コレクションがロンドンで競売されるということを知って、この図書館が早速買い取ろうと申し込んだのですが、すでに大部分が他に売られてしまっていたのです。ここにあるのはその残りなのです。」と答えた。そして、他の大部分はどこへ売られたかいまだに判らないのですと言った。

私が「それで解りました」と云うと、博士は吃驚して私の顔を覗き込んで、それはまたどういうわけですかと訊く。私は「実はあなたの仰有る不明の大部分は私が持っているのです。私はコレクションの目録を見て、どうも少し不足していると思っていたのですが、こんなところに来ていようとは思いませんでした」と云った。

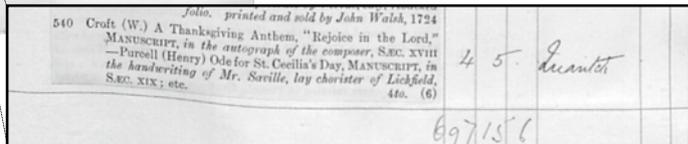
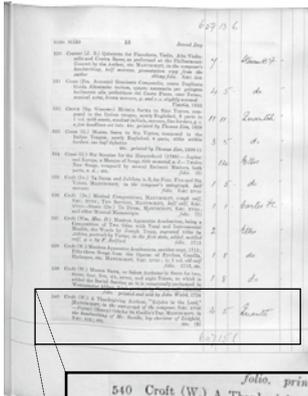
博士は驚きを顔に現して、そうですか、あなたが買われたのですか、そうですかと繰り返し肯いていた。

ゾネックによる説明についての記述では、「すでに大部分が他に売られてしまっていた」という「大部分」が、カミングスの旧蔵書、すなわち「カミングスのコレクション」全体の「大部分」のことなのか、あるいは、競売に出品されたカミングスの旧蔵書の「大部分」であるのか、判然としないが、おそらく後者、競売に出品されたカミングスの旧蔵書の「大部分」であると考えられる。

今日、カミングスの旧蔵書の全貌は明らかではなく⁽²⁰⁾、競売に先行して旧蔵書全体の「大部分が他に売られてしまっていた」ということを確認するのは困難である。生前、カミングスは、蔵書家たちの死後、そのコレクションが競売にかけられ、散逸してしまったことを憂いており、重要な資料は、国家が管理することを提

(19) 徳川頼貞, 前掲書, p. 155-156.

(20) カミングスの蔵書については、息子のノーマン・パーシー・カミングス Norman Percy Cummings (1868 ~ 没年不明) が編纂した蔵書目録があるが、アルファベット順に並べられた蔵書のBの項目(1,257点)までしか出版されておらず、そこから全体像を推測することはできない。The Music Library of Dr. William H. Cummings, Catalogued by Norman P. Cummings (London, 1910). 大英図書館蔵。



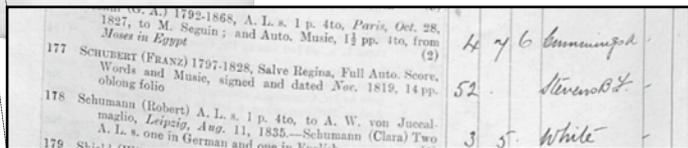
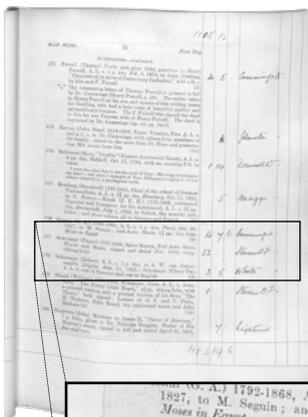
サザビーズ社によるカミングスの旧蔵書の競売記録、大英図書館蔵
p. 53. 最下段の競売番号540ヘンリー・パーセル『聖セシリアの祝日のオード』に落札者として“Qauritch”の書き込み。

唱して国立図書館、イギリスの場合には大英博物館（当時、大英図書館は大英博物館の一部だった）がその任に当たるべきことを主張していた⁽²¹⁾。こうしたカミングスの見解を考慮すると、彼の旧蔵書中の重要資料が競売の前に先行して、例えば大英図書館に譲渡された可能性も考えられる。しかし、カミングスの旧蔵書の競売を執行したサザビーズ社の落札記録⁽²²⁾によると、現在大英図書館が収蔵するカミングスの旧蔵書の多くは、ロンドンの古書籍商の“Quaritch”、すなわちバーナード・クォーリッチ Bernard Quaritch (1819～99年) が創業し、その事業を継承した“Bernard Quaritch Ltd”

バーナード・クォーリッチ社⁽²³⁾によって落札されており、競売に先立って譲渡が行われた形跡は見られない。大英図書館は、クォーリッチ社が競売で落札、あるいは同図書館が事前に同社に落札を依頼したカミングスの旧蔵書を購入したと考えられるのである。また競売目録によれば、競売には多くの著名音楽家の貴重な自筆楽譜が出品されており、競売前に譲渡が行われたとすれば、それらが目録に記載されることもなかったであろう。

おそらく、ゾネックが、「早速買い取ろうと申し込んだのですが、すでに大部分が他に売られてしまっていた」というのは、競売に先行してではなく、競売を通してカミングスの旧蔵書を入手しようとしたが、「すでに大部分が他に売られてしまっていた」ということであろう。

上記サザビーズ社の競売記録によると、議会図書館が購入したカミングスの旧蔵書のほとんどは、すでに紹介した4点の自筆譜や印刷楽譜を含め、落札者の欄に“Stevens, B. F.”と記入されている。それは、芸術関連の書籍を扱う書籍商で、アメリカ合衆国政府のロンドンでの代理人を務めていたベンジャミン・フラン



同
p. 21. 競売番号177シューベルト『サルヴェ・レジーナ』に落札者として“Stevens, B. F.”の書き込み。

(21) Cummings, W. H., “On the National Musical Library”, *Proceedings of the Musical Association*, iv (1877-78), p. 13. 邦訳「国立音楽図書館の設立」長屋晃一訳『Oxalis』3号(2010), p. 27-32.

(22) *Catalogue of the Famous Musical Library of Manuscripts, Autograph Letters and Printed Books, The Property of the Late W. H. Cummings, Mus.Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E.* (Sotheby, Wilkinson & Hodge, 1917) 大英図書館蔵 Hirsch 433.

(23) バーナード・クォーリッチとバーナード・クォーリッチ社 Bernard Quaritch Ltd については下記を参照。

“Bernard Quaritch”, https://en.wikipedia.org/wiki/Bernard_Quaritch (参照 2023.12.22)

“Bernard Quaritch Ltd”, <https://www.quaritch.com/about/our-history/> (参照 2023.12.22)

クリン・スティーヴンス Benjamin Franklin Stevens (1833 ~ 1902年) の事業を継承した“B. F. Stevens & Brown” B. F. スティーヴンス・アンド・ブラウン社⁽²⁴⁾を指していると考えられる。

サザビーズ社の競売記録によれば、スティーヴンス社は、6日間(1917年5月17~24日、5月19日土曜日と20日日曜日は除く)すべての競売に参加し、出品された全1,744点中の187点を落札している。したがって、「カミングス・コレクションがロンドンで競売されるということを知って、この図書館が早速買い取ろうと申し込んだ」というゾネックの発言は、議会図書館は、スティーヴンス社が落札したカミングスの旧蔵書の中から購入するものを選んだが、それらの「大部分が他に売られてしまっていた」、すなわち、すでに買い手が決まっていたということであろう。

この会話の後半で、ゾネックが「他の大部分はどこへ売られたかいまだに判らない」と述べている。それに対して、頼貞は、「実はあなたの仰有る不明の大部分は私が持っている」と応じた。しかし、これは、今日明らかとなっている、頼貞がカミングスの旧蔵書を入手した経緯と矛盾する。すなわち、頼貞が、カミングスの旧蔵書が競売されることを知ったのは、すでに競売が終了した1917年夏であり、南葵音楽文庫は、454点のカミングスの旧蔵書を収蔵してはいたが、それらは、留学時代の恩師エドワード・ネイラー Edward Nayler (1867 ~ 1934年) の仲介によって遺族から競売で売れ残ったり、競売に出品されなかった蔵書を購入したものである⁽²⁵⁾。したがって、ゾネックの言う「すでに大部分が他に売られてしまっていた」という「大部分」、そして頼貞が反復した「あなたの仰有る不明の大部分」は、頼貞が購入したカミングスの旧蔵書ではない。

『薈庭楽話』には、頼貞の記憶違いに基づくと考えられる記述や、曖昧な記述がしばしば見受けられる。本稿では、「第二次外遊」からワシントンの議会図書館での出来事を検証したが、詳細には不明な点が依然として残されている。

(24) ベンジャミン・フランクリン・スティーヴンス Benjamin Franklin Stevens (1833 ~ 1902年) 及び“B. F. Stevens & Brown Ltd”社については下記を参照。
“Benjamin Franklin Stevens”, <https://www.libraryhistorybuff.org/bfstevens.htm> (参照 2023.12.22)

“BF Stevens & Brown”, <https://www.britishmuseum.org/collection/term/BLOG17968> (参照 2023.12.22)

(25) 篠田大基「故ダブリュー・エイチ・カミングス博士」「カミングス音楽文庫競賣残餘図書購入願末」.

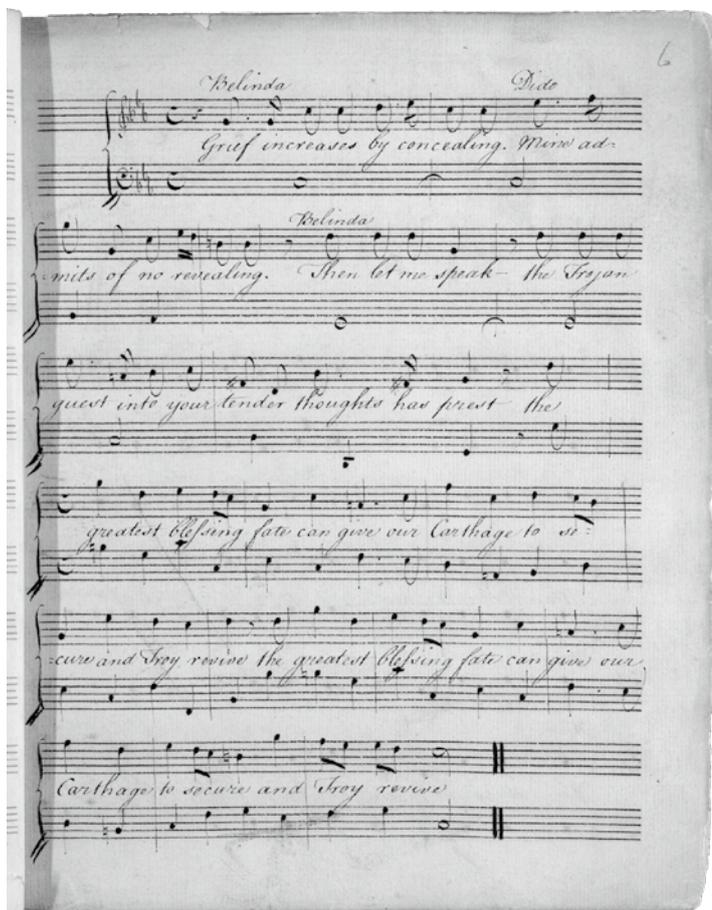


資料紹介

ヘンリー・パーセル オペラ《ディドとエネアス》手写楽譜（総譜）、筆写者不明
 Purcell, Henry, Opera, *Dido and Aeneas*, Z.626, Manuscript Score, Unknown
 handwriting, 31.6 × 25.6cm (収蔵番号：N-4/41, 和歌山県立博物館収蔵)

《ディドとエネアス》は、イギリスのバロック期を代表する音楽家ヘンリー・パーセル Henry Purcell (1659～95年) が残した唯一の本格的なオペラであると同時に、17世紀イギリス音楽の記念碑的な作品でもある。台本は、ネイハム・テイト Nahum Tate (1652～1715年) によっており、題材は、古代ローマの詩人ウェルギリウス Vergilius (紀元前70～19年) の叙事詩《アエネーイス *Aeneis*》のトロイの王子エネアスとカルタゴの女王ディドの物語に取材している。作曲年代は明らかではない。従来、ロンドンのチェルシーで舞踏教師のジョサイアス・プリースト Josias Priest (1645頃～1735年) が経営する寄宿制の女子音楽舞踏学校で、1687年に生徒たちによって初演されたと考えられてきたが、近年、それに先立つ1684年頃に宮廷で初演されたとする説が有力となっている。

今日、《ディドとエネアス》の自筆楽譜は失われており、作品は、作曲者のパーセル以外の筆写者による手写楽譜によってのみ伝えられている。また、それらの手写楽譜は、1684年頃の宮廷での演奏や、1687～89年頃のプリーストの女子舞踏音楽学校における演奏、あるいはその後の1700～04年に行われた上演のいずれとも無関係とされ、パーセル存命中は勿論のこと、初期の上演の記録ではない。



手写楽譜《ディドとエネアス》(南葵音楽文庫収蔵)の1774年以前に筆写された部分の冒頭。ディドとベリンダのレチタティーヴォ「隠せば悲しみは増すばかり Grief increases by concealing」

近年、《ディドとエネアス》の学術的な調査研究に基づく校訂楽譜が、2つ刊行された。パーセル研究で知られた、ウェールズのバンゴー大学のブルース・ウッド名誉教授が校訂を担当した、パーセル協会によるパーセル全集第3巻の最新版(2021年刊行、以下「パーセル協会版」と、17世紀イギリス音楽の資料研究の権威、アメリカのコロラド大学音楽学部のロバート・シェイ教授によるベーレンライター原典版(2023年刊行、以下「ベーレンライター

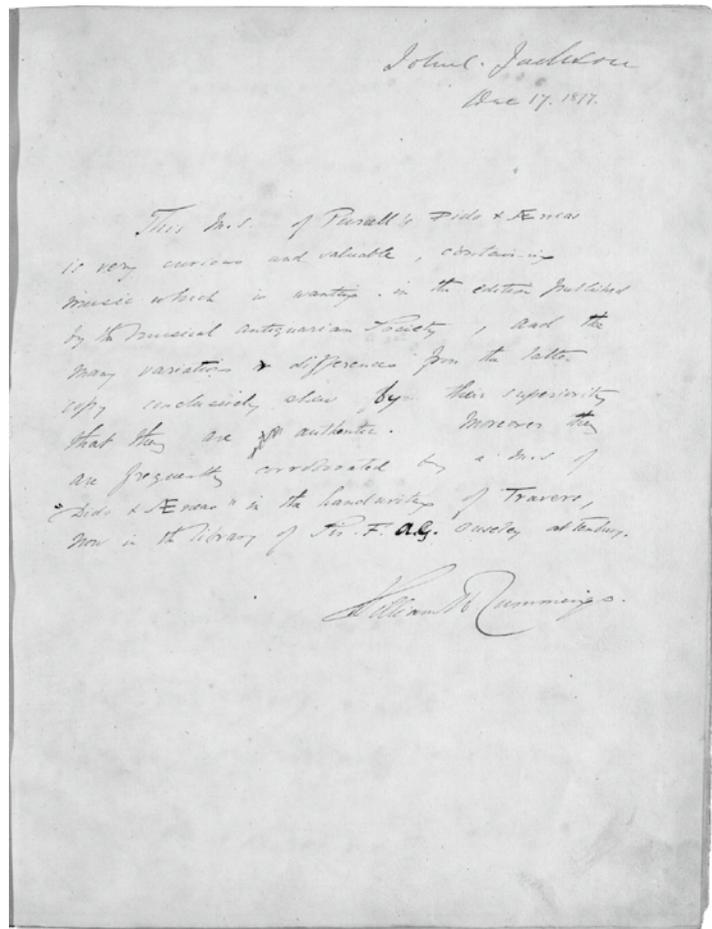
(1) Purcell, H., *Dido and Aeneas*, ed. Bruce Wood, *The Works of Henry Purcell*, vol. 3 (London: Stainer & Bell, 2021). 及び Purcell, H., *Dido and Aeneas*, ed. Robert Shay, *Bärenreiter Urtext*, (Kassel: Bärenreiter (BA8744), 2023).

版)である⁽¹⁾。最新の知見に基づくこれらの校訂楽譜に収録された、両校訂者による報告に基づいて本文庫収蔵の《ディドとエネアス》の手写楽譜について紹介しよう。

現存する《ディドとエネアス》手写楽譜は8点で、そのうち3点が、作品全体が筆写されている総譜で、他の5点は部分的な手写楽譜である⁽²⁾。南葵音楽文庫が収蔵する手写楽譜は、作品全体が収録された楽譜3点のうちの1点である。

南葵音楽文庫が収蔵する《ディドとエネアス》の手写楽譜は、もともとウィリアム・ヘイマン・カミングス William Hayman Cummings (1831 ~ 1915年) の旧蔵書で、1917 (大正6) 年に徳川頼貞が遺族から購入し、本文庫の所蔵となった「カミングス文庫」のひとつである。この手写楽譜の来歴、すなわちカミングス以前の所有者はほぼ不明で、見返しに「John C. Jackson Dec. 17. 1877」(ジョン C. ジャクソン、1877年12月17日) という旧蔵者と推定される人物による署名があるものの、この人物については同定できていない。一方、カミングスは、1889年に刊行されたパーセル協会による旧パーセル全集の第3巻として《ディドとエネアス》を校訂した際にこの手写楽譜を拠り所のひとつとしており、その序文で「数年前に幸いにも入手」⁽³⁾と述べていることから、入手したのは、1880年代中頃であったと推察される。なお、カミングスの死後、旧蔵書が競売にかけられた際のロット番号(競売目録番号)は、1388号である⁽⁴⁾。

カミングスは、彼が所蔵した《ディドとエネア



《ディドとエネアス》(南葵音楽文庫収蔵)の見返し

(2) 南葵音楽文庫が収蔵するパーセル《ディドとエネアス》の手写楽譜以外の総譜は、以下の2点である。

・ Oxford, Bodleian Library, MS Tenbury 1266(5). (以下「タンプリー写本」)

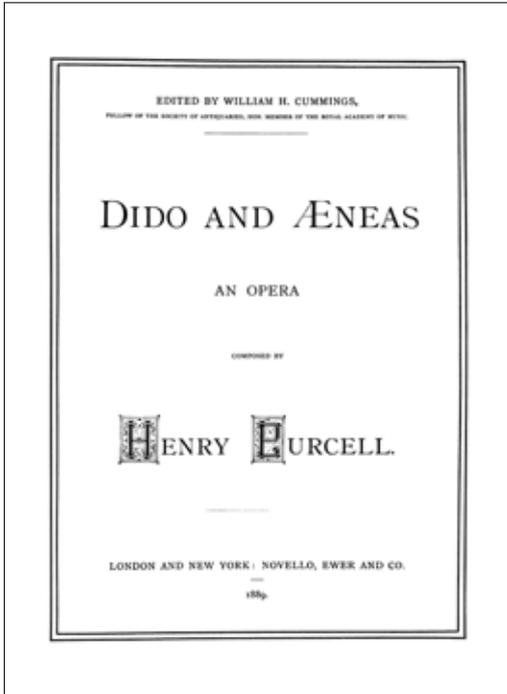
筆写者不明、成立年代 1780 年頃 (パーセル協会版)、1775 ~ 79 年 (ペーレンライター版)

・ Cheshire, Tatton Park, MS2-5, 3.

筆写者フィリップ・ヘイズ Philip Hayes (1738 ~ 97 年、イギリスの作曲家、オルガン奏者)、成立年代 1784 年 (パーセル協会版)、1784 ~ 85 年 (ペーレンライター版)

(3) Purcell, H., *Dido and Aeneas*, ed. William H. Cummings, *The Works of Henry Purcell*, vol. 3 (London: Novello, 1889), ii.

(4) *Catalogue of the Famous Musical Library of Manuscripts, Autograph Letters and Printed Books, The Property of the Late W. H. Cummings, Mus.Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E.* (Sotheby, Wilkinson & Hodge, 1917), p. 130.



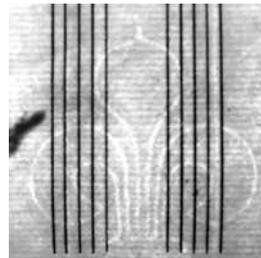
ヘンリー・パーセル《ディドとエネアス》W. H. カミングス校訂、パーセル協会版パーセル全集第3巻（1889）タイトルページ

ス》の手写楽譜について、次のように同楽譜の見返しで述べるに留まっている⁽⁵⁾。

このパーセルの《ディドとエネアス》の手写楽譜は、大変興味深く、貴重なものである。古楽協会 the Musical Antiquarian Society によって出版されたエディションに欠けている音楽や多くのヴァリエーションや他の手写楽譜との異同を含んでいるからである。それらは信頼できるものであり、最終的に他よりも正しいものである。さらに、それらは、現在テンブリーのフレデリク・アーサー・ゴア・オウズ

リー卿の文庫にある、トラヴァースによる《ディドとエネアス》の手写楽譜によってもしばしば裏付けられるものである。

パーセル版の校訂者ウッド教授は、南葵音楽文庫の《ディドとエネアス》の手写楽譜について、他の資料との相関関係や資料間の異同を詳細に検証し、さらに記譜法上の特徴からその成立年代を1770年頃と推定した⁽⁶⁾。一方、ベーレンライター版の校訂者シェイ教授は、同手写楽譜の所々に見られる書き込みと、和歌山県立図書館が教授の要請に従って提供した手写楽譜で使われている紙の透かし (fol.6-79) による研究から遅くとも1774年以前という結論を導き出している。南葵音楽文庫の手写楽譜に見られる書き込みは、18世紀に起こった、オペラをはじめとするパーセルの作品の上演活動の中で、ロンドンの「古楽アカデミー The



透かし「ストラスプールのユリ」上部 (f.79)



透かし「ストラスプールのユリ」下部 (fol.49)

(5)"This m.s. of Purcell's Dido & Aeneas is very curious and valuable, containing music which is wanting in the edition published by the Musical Antiquarian Society, and the many variations and differences from the latter copy conclusively show by their superiority that they are authentic. Moreover they are frequently corroborated by a M.s. of "Dido & Aeneas" in the handwriting of Travers, now in the Library of Sir F. A. G. Ouseley at Tenbry."

「現在テンブリーのフレデリク・アーサー・ゴア・オウズリー卿の文庫にある、トラヴァースによる《ディドとエネアス》の手写楽譜」とは、今日オクスフォード、ボドリアン図書館に収蔵されているタンブリー写本のことである。カミングスは、このタンブリー写本に言及して「トラヴァースによる手写楽譜」と述べているが、今日、同写本の筆写者は不明となっている。F. A. G. Ouseley (フレデリク・アーサー・ゴア・オウズリー Frederick Arthur Gore Ouseley (1825 ~ 89年)) は、イギリスの作曲家、オルガン奏者で聖職者としても活躍。

(6)Purcell, H., *Dido and Aeneas*, ed. Bruce Wood, xvi-xvii 及び xxxii.

Academy of Ancient Music」が1774年に行った《ディドとエネアス》の復活上演と関わりがあるとされ、また、南葵音楽文庫の手写楽譜で使われている紙の透かしが、「ストラスブールのユリ」と呼ばれる透かしのひとつで、18世紀に広く使われ、ジョージ・フレデリク・ヘンデル George Frederick Handel (1685～1756年)が、1770～75年頃に使用した紙にも認められることが確認されたのである⁽⁷⁾。ただし、両教授は、南葵音楽文庫の手写楽譜に書かれている《ディドとエネアス》の序曲から第3曲 (fol.1r-5r, 5v.は空白) については、第4曲以降の筆写者とは別の人物によって、ジョージ・アレクサンダー・マクファーレン George

Alexander Macfarren (1813～87年)が1841年に刊行したエディション⁽⁸⁾から書き写されたものと断定している。また、これらの冒頭部分が筆写された紙は、明らかに第4曲以降の紙 (fol.6以降) とは異なっており、19世紀のものである。

結果的に、南葵音楽文庫が収蔵する《ディドとエネアス》の手写楽譜は、冒頭部分は19世紀に筆写されたものではあるが、全体は、現存する手写楽譜の中で最も古いものということになる。また、18世紀に行われた演奏の記録でもある。南葵音楽文庫の《ディドとエネアス》の手写楽譜は、これからも同作品の貴重な資料として世界から注目され続けるに違いない。

(佐々木勉)



手写楽譜《ディドとエネアス》(南葵音楽文庫収蔵)の序曲冒頭

(7) Purcell, H., *Dido and Aeneas*, ed. Robert Shay, VIII-XI 及び p. 86-88.

(8) Purcell, H., *Dido and Aeneas*, ed. George Alexander Macfarren, London: Musical Antiquarian Society, 1841.

ジル＝マルシェックス 《ぼくのお隣さんの窓のカーテンが…》

Gil-Marchex, Henri. *Le rideau de ma voisine...* Paris: Maurice Senart, 1927. 3p. 36cm.
(収蔵番号：3B4/254)



スナール室内楽シリーズ⁽¹⁾1927年度の「歌とピアノ編」中の一曲。同じくジル＝マルシェックス作曲の歌曲《果てしなく憂鬱に広がる…》⁽²⁾と併せて掲載された。いずれもピアノ伴奏の歌曲。

アンリ・ジル＝マルシェックス Henri Gil-Marchex (1894～1970年) はフランスのピアニストで、1925年に初来日し、意欲的なプログラムによる連続リサイタルを行って当時の日本楽壇に大きな影響を与えた。その後もたびたび来日してレクチャーコンサート等を開催。日本の音楽についての論考もいくつか残している⁽³⁾。また、ジル＝マルシェックスはラヴェルの歌劇《子どもと魔法》の〈ティータイムのフォックストロット〉のピアノ独奏用編曲

⁽⁴⁾を手掛けたほか、ピアノ独奏曲や歌曲などオリジナル作品も遺しており、そのうちの幾つかはスナール室内楽シリーズに入っている⁽⁵⁾。

披献呈者のシャルル・パンゼラ Charles Panzéra (1896～1976年) はスイス出身のバリトンで、フランスを拠点に活躍した。フォーレの歌曲集《幻想の水平線 *L'horizon chimérique*》作品118 (1921年) の初演で成功を収めて名を知られるようになり、デュパルクやフォーレなどのフランス歌曲に名録音を残した。また、パリ音楽院で教鞭を執り、多くの後進を育てた。フランス歌曲を語る上で外すことのできない名前である。

(1) スナール室内楽シリーズについては、「スナール室内楽シリーズ 目録と解題」『南葵音楽文庫紀要』3号 (2020), p. 88-112 参照。

(2) 近藤秀樹「ジル＝マルシェックス作曲の歌曲《果てしなく憂鬱に広がる…》」『南葵音楽文庫紀要』6号 (2023), p. 60-64 参照。

(3) 以下を参照。白石朝子「アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み—4度の来日 (1925-1937) における音楽活動と日本音楽研究をもとに」愛知県立芸術大学音楽研究科博士後期課程学位論文 (平成25年度)。

(4) 以下を参照。近藤秀樹「ジル＝マルシェックス編ラヴェル《ティータイムのフォックストロット》」『南葵音楽文庫紀要』2号 (2019), p. 74-77。

(5) ジル＝マルシェックスの作品については、白石朝子、前掲書を参照。

的。随所に交えられた装飾音も、この伴奏にギター風の響きを添えている。これがそのまま伴奏となり、第5小節から歌が入ってくる。この書き方は、この歌曲が一種の「セレナード」として構想されたことを示唆している。すなわち、夜、若い男がギターをつま弾きながら、恋人の部屋の窓の下で自らの想いを歌う歌である。

ただし、ironiquementという指示が暗示するように、このセレナードはひとひね

りしてある。恋人が窓辺に出てくるのかな、と思ったら、風がカーテンを揺らしていただけだった、というオチがつき、音楽もそれに合わせて皮肉っぽく幕を閉じる。すなわち、第19小節では、「ぼく」の落胆が、第4拍の4分音符のフェルマータで少々大袈裟に表現されたあと、a tempoであっけなく終わるのである。全部で20小節、演奏時間1分ほどの小品である。



ジル=マルシェックス《ぼくのお隣さんの…》第18～20小節

ところで、この曲の、いわば「セレナード」的なシチュエーションは、ミュッセの詩にふさわしいものであろうか？なるほどこの詩では、「ぼく」は「お隣さん」の部屋の窓の様子をうかがっており、「ぼく」は彼女が窓に姿を現すことを期待している。一方、「ぼく」がギターを携えているとか、恋人の気を惹こうとして歌っているとは書かれていない。また、この歌が、「ぼく」が彼女に歌って聞かせる歌そのものだとすれば、「カーテンを持ち上げたのは風にすぎなかった」という結末は、いかにも不自然である。

この点で興味深いのは、ミュッセの詩のもとになったゲーテの詩 *Selbstbetrug* との比較である。三浦朝郎氏はこのタイトルを「うぬぼれ」と訳したうえで、次のような注をつけている。「表題を正確に訳せば『自己欺瞞』。隣の娘について、いろいろ想像をたくましくしているが、心の中では、そんなことはありえないことを、十分承知

しているのである」⁽⁶⁾。三浦訳では、最後の2行はこうである。

Ich seh', es ist der Abendwind,
Der mit dem Vorhang spielt.

わかっている あれは夕風なんだ
あのカーテンをゆらしているのは

つまり、「ぼく」は詩の結末で「なんだ、あれは風だったのか」と初めて気がついて落胆するのではなく、最初から風のいたずらだとわかったうえで妄想していたわけである。こうしてみると、少なくともゲーテの詩においては、「セレナード」的なシチュエーションは必ずしも意図されてはならず、「風のいたずらだった」というオチも、ジル=マルシェックスの歌曲のようなコミカルな性格のものではなかったのではないかと思われる。

一方、ミュッセの詩ではどうか。第3連

(6) 『独和对訳叢書 37 ゲーテ詩集』三浦朝郎訳注、郁文堂、1970年、p.18-19。

を比較してみよう。上記の「わかっている Ich seh」に相当する部分をミュッセの詩に探すとすれば、それは第3連第1行「これはただの夢 ce n'est qu'un rêve;」であろう。その前には「ああ！ hélas !」という間投詞があり、その後には、ゲーテの詩では特定されていない嫉妬の対象が「無骨者 un lourdaud」と名指されている。演劇的な要素が強くなった、という見方もできるかもしれない。ジル＝マルシェックスを「セレナード」的なシチュエーションに傾かせる誘因は、ミュッセの詩自体に含まれていたと見ることもできよう。

もうひとつ、ジル＝マルシェックスのこの詩に対するアプローチでポイントとなるのは、歌詞が「ぼく」の一人称の語りであるにもかかわらず、音楽自体は第三者的な観点から書かれていることである。「ぼく」の妄想がいよいよ膨らんでいく第2連では、音楽は「調子外れの音」をたくさん含んだ、よりコミカルなものになっていく。事実でないことがうたで妄想に身をゆだねる「ぼく」の「自己欺瞞」を、内側から表現するのではなく、外から描いて笑っている、そんな歌曲になっているわけである。喜劇的な歌、オペレッタ的な歌ということもできようか。

もちろん、同じミュッセの詩にまったく別の角度からアプローチすることも可能である。エルネスト・ショーソン Ernest Chausson (1855～99年)の歌曲《ぼくのお隣さんの窓のカーテンが…》(1879年)はその一例である。これはショーソン最初期の作品の一つで、作品番号を持たず、作曲者の生前には出版されなかった。おそらくショーソンは、この詩の「セレナード」的なシチュエーションや演劇的な特徴よりも、「カーテンが風に揺れている」こと、それとともに「ぼく」の心も揺れていることに重点を置いたのであろう。曲の冒頭、行きつ戻りつするピアノ伴奏に乗って歌われる歌は、むしろ子守歌を想わせる。反面、アイロニカルな要素は希薄である。

ニノンのセレナード

ここで、ジル＝マルシェックスを「セレナード」的なシチュエーションに傾斜させた誘因を、もうひとつ考えてみよう。

ミュッセの詩で、多くの作曲家が歌曲にしたもののひとつに「ニノン *Ninon*」がある。戯曲『娘たちが夢見ること *A quoi rêvent les jeunes filles*』(1832年)第1幕第1景の挿入歌の歌詞として書かれたもので、ラエルト公爵の双子の娘の一人ニノンが、部屋の外で誰かが自分に向かって愛の歌を歌っているのを聴く、という場面で歌われる。まさに「セレナード」的なシチュエーションの詩であり、かつ演劇的な性格の詩である。

この詩は作曲家たちの中で人気があったようで、フランスではセザール・フランク César Franck (1822～90年)、レオ・ドリーブ Leo Delibe (1836～91年)、バンジャマン・ゴダール Benjamin Godard (1849～95年)、ガブリエル・デュボン Gabriel Dupont (1878～1914年)らが歌曲にしたほか、イタリアの作曲家トスティ Francesco Paolo Tosti (1846～1916年)もフランス語の原詩に曲をつけている。

これらの歌曲の多くは、「セレナード」的なシチュエーションを反映して、ギターかリュートを想わせるピアノ伴奏を多用している。ドリーブにおいては連打音、フランク、デュボンにおいては軽妙な分散和音。ジル＝マルシェックスが「ぼくのお隣さんの窓のカーテンが…」を歌曲にしたとき、彼の念頭にはこれらの「ニノン」の歌があったのかもしれない。

アイロニカルなセレナード

だが、ジル＝マルシェックスは20世紀の音楽家である。《ぼくのお隣さんの窓のカーテンが…》をミュッセの詩で書かれたフランクやドリーブの歌曲と比較するだけでなく、これを同時代のコンテキストのなかに位置づけてとらえる必要もあろう。ここで一旦、ミュッセの詩を離れ、楽譜の冒頭に記された *ironiquement* という指示を手掛

かりに考えてみよう。

「アイロニカルなセレナード」とでもい
うべき歌曲で、ジル＝マルシェックスの同
時代人が書いた歌曲としては、アルベール・ルーセル Albert Roussel (1869～1937年)⁽⁷⁾の《サラマンカの独身者 *Le bachelier de Salamanque*》がある。この歌曲は、もうひとつの歌曲《サラバンド *Sarabande*》と併せて、《2つの歌曲 *Deux mélodies*》作品20として1919年に出版された。いずれの曲も詩はルネ・シャリュ René Chalupt (1885～1957年)である。

《サラマンカの独身者》でも、やはりギターを想わせるピアノ伴奏にのせて歌手は歌いだが、それは恋人のいる窓の下で若い男が歌うセレナードではない。これからセレナードを歌おうとギターを抱えて、夜も更けたサラマンカの街に行く若者への呼びかけである。「お布令を知らないのかい？／セレナードを捧げる奴は／ひとり残らず牢屋ゆき」「おいはぎに会えば会ったであんたの金の鎖をもってちまう／司令官の娘に／焦がれたって無駄、／見晴し窓のかげであんたをわらってるとさ」(支倉寿子訳)。詩も曲もジル＝マルシェックスの歌曲より辛辣で皮肉である。

「アイロニカルなセレナード」を歌曲に限定せず、ピアノ独奏曲にまで広げて考えるなら、ドビュッシーの《前奏曲集》第1巻第9曲〈遮られたセレナード *Sérénade interrompue*〉が視野に入る。これまたギターを模した伴奏にのせて、セレナードが歌いだされる——と思いきや、そのたびに陽気な学生歌に遮られてしまう、という「アイロニカルな」展開の曲である。

セレナードと対をなすオーバード *Aubade*が「後朝の歌」であり「朝のセレナード」であることを考えれば、ラヴェル《鏡 *Miroirs*》(1904～05年)の第4曲〈道化師の朝の歌 *Alborada del Gracioso*〉をここに加えることもできよう⁽⁸⁾。上記のド

ビュッシー、ラヴェルの作品の影響下に書かれたという理由で、カロール・シマノフスキ Karol Szymanowski (1882～1937年)の《仮面 *Maski*》(1915～16年)第3曲〈ドン・フアンのセレナード *Serenada Don Juana*〉にまで話を広げるのは、さすがに行き過ぎであろうか。だが、これら一連の「アイロニカルなセレナード」が、多くの場合スペインと結びついていることは、指摘しておく価値がある。

このような「アイロニカルなセレナード」の「星座」の中にジル＝マルシェックスの歌曲《ぼくのお隣さんの窓のカーテンが…》を位置づけてみると、スペイン色は比較的希薄であること、また、アイロニカルといってもさほど辛辣なものでないことがわかる。同時期のアイロニカルなセレナードたちの傍らでは、この歌曲は少し「大人しく」見える、ということもできるかもしれない。

ヴェルレーヌの傍らで

しかし、まさにそのゆえに、この曲は『スナール室内楽シリーズ』に収められたもうひとつの歌曲《果てしなく憂鬱に広がる…》とは、うまく調和するように思われる。ジル＝マルシェックスがこの2曲——それぞれが別の歌手に献呈されている——をセットで考えていたかどうか、2曲が続けて歌われることを想定していたかどうかは明らかでない。しかし、ヴェルレーヌの詩による憂鬱な雪景色の歌のあとに、演劇的、オペレッタ的な軽快さをもつこの曲が歌われるのは、演奏効果の点でプラスに働くのではないか。(近藤秀樹)

※本稿の執筆にあたっては、以下の方々にご協力をいただきました。記して感謝します。松井るみ (声楽)、宮本絵真 (声楽)、角田知香 (ピアノ、音楽学)。

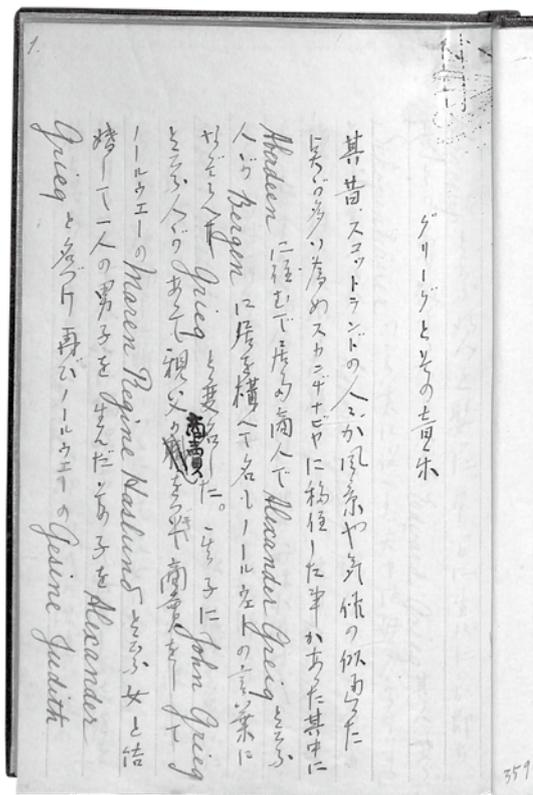
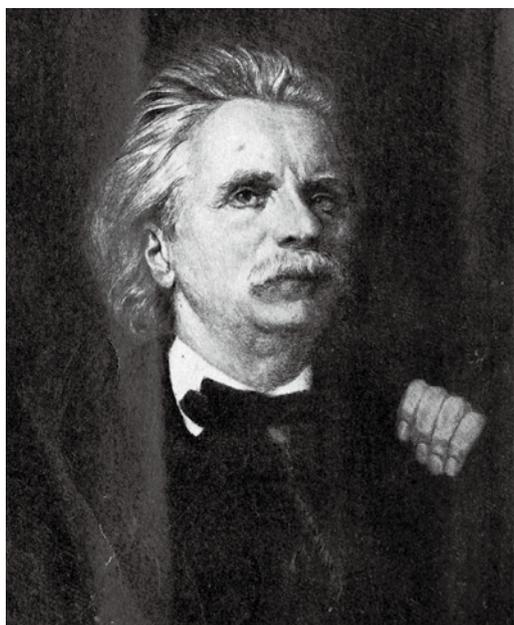
(7) ルーセルはのちにピアノ曲《プレリュードとフーガ *Prélude et fugue*》(1932～34年)をジル＝マルシェックスに献呈している。

(8) ラヴェルのピアノ曲には《グロテスクなセレナード *Sérénade grotesque*》(1893年)があるが、この曲は生前未出版であり、《ぼくのお隣さん窓のカーテンが…》を作曲した時点でジル＝マルシェックスがこれを知っていたかどうか不明。



関連歴史資料

徳川頼貞抄訳「グリーグとその音楽」 (1920) (上)



[1. 家系と少年時代—オーレ・ブル]

其昔、スコットランドの人々が風景や気候の似通った点が多い為めスカンヂナビヤに移住した事があった。其中にAbadeenに住むで居た商人でAlexander Greigと云ふ人がBergenに居を構へて名もノールウエーの言葉になぞらへGriegと変名した。その子にJohn Griegと云ふ人があって親父の商売をつぎ商売をしてノールウエーのMaren Regine Haslundと云ふ女と結婚して一人の男子を生んだその子をAlexander Griegと名づけ再びノールウエーのGesine Judith Hagerupと云ふ婦人を娶った。その間に生まれたのが即ち吾々の尊敬する大音楽家Edvard Grieg其人である。

Schopenhauerの言葉に従へば「天才は母方から生ずる」と云ふのであるがこのEdvard Griegの場合も他の多くの場合の様に矢張り左様である。彼一Edvardは母の音楽の才の大部分を受けた。彼の母は小供時代ハンブルグで其当時有名であった作曲家で又良教師たりしAlbert Methfessel氏からピアノと歌の教授を受けた。その後彼女は良人と共に屢々ロンドンを訪れて彼

の地で音楽を勉強した。斯くの如くにして彼女はBergenに於ける大音楽会に独唱者として出演する技能を勝ち得たのであった。Edvardの幼い時代の記憶に彼の母がベートーベンの作品八十番〔合唱幻想曲ハ短調〕のコーラスを管絃樂の伴奏で美しく歌ったのを判然記憶して居ると云ふ事を晩年に物語って居る。彼Edvardが六才の時に始めて音楽を教授した彼の母程彼れにとりて良音楽教師はなかったが然し彼の家庭に於ける音楽の空気は彼れに其れ以上の効果を与へた。彼の母グリーグ夫人は単に家庭に於てピアノを弹奏して小児に聴かせるのみならず一週間に一度彼女の友人を招待し家庭音楽会を開くのを常として居た。その様な場合にモザルト及びウエーバーの曲が弾かれグ夫人は管絃樂を洋琴になほした部を弾くのが常であった。

グリーグ夫人は斯くの如くモザルト及びウエーバーの愛好者であったと共に又他の多くの音楽者がほとんど耳をかさなかった当時の音楽に多大の興味を以て居た。彼女はたゞに純粹なローマンチック派の音楽者メンデルゾーンの賞讃家であったのみなら

ず其当時極く少数の人にのみ理解されて居った、急進的な而して又革新的なシヨパンのUniqueな音楽を非常に愛したのであった。そのシヨパンの音楽こそ非凡の才能を有して居るEdvardに美しい音楽の花の種をまいたのである。



十五才のグリーグ

彼が真面目に作曲し始めたのは十二か十三の時であった。或る日彼は“Variations on a German Melody for the Piano by Edvard Grieg, Opus 1”と書いた自分の曲を学校へ持って居って友達に見せて居た所を不幸にして教師の発見する所となりその当時彼は不勉強であった為に音楽等しなくてもっと勉強しろと云ふ意味で取り上げられて叱かれた事があった。十才の時に彼の家族はBergenから程遠からぬLandaasと云ふ所に土地を買って引移った。十五才の夏の或る日彼の家を訪れた人こそ其当時世界に名を轟かして居たヴァイオリン弾きOle Bullであった。ブ氏はグリーグの音楽的生涯に多大の影響を与へた人である為めこゝに一言彼に就いて述べて置く。彼はグリーグより三十三年前にBergenで生れた。而して独逸に行つて有名なSpohrに就てヴァイオリン^[音]を^[得]取得したが彼の楽風があまりアカデミックで彼に適さないのを発見

し理想的なPaganiniに師事した。其後業を終へてスカンチナビヤ^[マ]、ロシヤ、ドイツ、フランス、イタリア、米国の諸国を遊歴し到る処で名声を博した。彼が一度巴里に居た時彼の命より大切なヴァイオリンが盗まれた為め非常に悲観してセーヌ河に身投しようとした処を非常に有^[裕]福な婦人に助けられ後ち以前より良いヴァイオリンを買ひ与へられたと云ふ逸話もある。

一八八〇年にスカンチナビヤの一大ヴァイオリン弾きOle Bullは逝つたのである。而してその葬式には皇帝自ら彼の未亡人に電報を送られて個人として又国家として心からの哀悼の意を表せられた。又スカンチナビヤの文豪たるBjörnsonはその数千の会葬者に向つて逝きしOle Bullこそ愛国心の化身であると云つた。

グリーグは其葬式に際しその教会でオルガンを弾いて心から彼に哀悼の意を表したのであった。

グリーグの言葉に従へば或る時Ole Bullがグリーグの家を訪づれて四方八方の話の序に且つて作曲した事を彼に話した処非常に^[よろこ]喜び且つ音楽上の注意をして呉れた。その後或る時不意に訪れて両親の許しを得て、ライプチッヒの音楽院に自分をやらして呉れたのも彼であったと云ふ事である。

[2. ライプチッヒ音楽院にて——ゲーゼ]

面白い事にはライプチッヒの音楽院の開かれた年は丁度Edvard Griegが生まれた一八四三年であつた。

その創立者たりしメンデルゾーンは創立後僅か四年にして逝き、教授たりしシユウマンは在職僅か一年にしてDresdenに去り一八五九年に逝つた。斯くの如く其中心を失つた時にEdvard Griegは入学したのであつた。然し其中には有名なピアニストであり又同時に作曲家であつたMoschelesや、其著書和声学が拾弍版も出版されて有名になつたRichter教授やモザート弾きとして作曲家として又Gewandhaus楽堂の楽長として有名なCarl Reinecke教授も居た。グリーグの言

葉に従へばMoschelesは特にベートーベンを愛好したがその解説に至っては天下一品であったと云ふことである。

其音楽院の制度の或部に於ては不完全なところがあったと見えてEdvardが未だ一度もヴァイオリンの稽古や総譜の読方を習はない以前にライネッケ教授は彼に絃楽四部曲を作ることを命じた。それ許りではない。同教授は形式学や楽器編成学も未だ学んで居ない彼に対して序楽の作曲を命じたのであった。彼と同時代の生徒の内には後年歌劇ミカドに依⁽⁷⁷⁾って名声を博したArthur SullivanやピヤニストのFranklin Taylor等が居た。生徒であった時代彼グリーグは余り多くサリバンと共に過した時はなかったが只一度あった。それは又永久に彼の記憶に残った。その時は丁度メンデルゾーンのオラトリオ“St. Paul”〔聖パウロ〕が演奏された時で彼等二人は楽譜を追ふて聴いて居たが其楽譜こそ実はサリバンが音楽院の校長であつて嘗て作者メンデルゾーンの親友であつたConrad Schlcinitz氏から借りて来た作者の自筆稿であつた。

彼は三度の食事以外夜も昼も勉強を続けた結果一八六〇年の春病の床に臥さねばならなかつた。病気の報知を手にした母は直にベルゲンから彼の病床を見舞つた。彼の病氣は肺を包む膜皮の炎症で今で云ふ肋膜炎であつたのだが其当時の医学者は今程進歩して居なかつたため遂にこの病氣を見出すことは出来なかつた。従つてグリーグは一生この病氣の爲めに体を損して晩年の如きは右の肺のみで呼吸をして居たと云ふ有様であつた。若し彼の健康が以上の如くでなかつたならば必ずやワグナー或はシヨパンと並び称せらる可き否以上の作品を出したに相違なかつたらふに実に残念な事であつた。一冬をベルゲンで暮したならば彼の病氣は必ず全快するであらふと云ふ確心を以て彼の母は彼をベルゲンへ連れて歸つたが余りはかばかしくゆかなかつた。それにも拘らず両親の心配を外にして彼は再びライプチヒに歸つた。

ライプチヒの校風は彼の好む処ではな

かつたがそこに居れば良い音楽が聴けると云ふ事は彼にとって少なからざる引力であつた。一八六二年に卒業して其夏を久し振りにてLandaasの両親の許で送つた。

スカンヂナビヤのローマンチック楽派の泰斗のGadeは彼の先生であつたと伝えられて居るが事實は之に反して彼はGadeから一度も習つた事はなかつた。

[3. ドイツからノールウエーへ]

グリーグが同国の音楽家で其當時有名であつたNordraakに始めて会つたのは一八六四年であつた。グリーグとノルドラークとの親交はグリーグをして音楽的に独逸からノールウエーに歸らしたのである。ノールウエーの生れを誇るグリーグがその作品にノールウエーの色彩が出るのは当然であると云ふのがノルドラークの主張であつた。

グリーグとノルドラークとが共同して一八六四一六五年に至る間コッペンハーゲンでEuterpe協会を組織して北方の若き音楽家を奨励したがそれは永く続かなかつた。その翌年の春にノルドラークはコッペンハーゲンを去りてベルリンに行った。

[4. クリスチャニア——結婚——リスト]

グリーグの作品中“Jeg elsker dig” (“I love you”)と云ふ歌謡が人気を得たのも訳があつた。丁度その時代即ち一八六四年に彼は彼の従妹に当るNina Hagerup嬢に恋してアンデルセンの詩に音楽を附したのがそれであつたのである。彼等が結婚するまでは三年間があつた。彼は一八六七年の六月十一日に彼女と結婚して楽しい月日をクリスチャニアに送つた。一八六八年に彼の親友たるHalfdan Kjerulfが死んだ時には非常な悲歎に落ち入つた。而して翌年には彼の只一人の十三ヶ月になる女子を失つた。此悲しみを忘れんが爲め多くの音楽会を催した。その内にはSchumannの“Paradise and the Peri”〔樂園とペリ〕 & “Gipsy life”〔流浪の民〕、Gadeの“Elverskud”〔妖精の娘〕

やMendelssohnの“Elias”〔エリヤ〕及びMozartのRequiem等があった。同年の十二月二十九日にFranz Lisztはローマから彼に手紙を出して彼の作品八番のソナタ〔ヴァイオリン・ソナタ第1番 へ長調〕を激賞して居る。翌年の十二月⁽¹⁾に彼はクリスチャニアを去ってローマに趣いた。そこでリストに会って居る。その初めて会った事を後で人に語った処に依れば彼がリストを訪れた時にリストは玄関迄で出て来てさながら永年の友達の如き親みを持ち吾々は既に手紙でお互ひに近づきに成って居ましたねと云って彼の手を握った時には彼に昔のOle Bullを思ひ出さるゝ程親しみがあつたと云って居る。又グリーグはリストの楽譜を読むことに暁通して居たことに驚いている。或時ライブチヒから自作の洋琴司伴奏を取り寄せてそれを持ってリストを訪問したことがあつた。その時に丁度リストの処にWindingとSgambatiとその外二三の婦人⁽²⁾が客室に居たがウィンディングとグリーグとは未だ嘗て見たこともない、而してグリーグ自身ですら一度の練習なしではとても弾くことが不可能だと思はれて居る此司伴奏をリストは如何に弾くかと云ふ興味を持って居た。その譜を見せる前にリストは「弾きませんか」と問ふたのにグリーグは之に答へて「私は未だ一度も練習した事はありませんから出来ません」と答へた。するとリストはその曲をピアノの処に持って行って皆なの方を向いて彼独特の笑ひを⁽³⁾ 刺しながら「それでは私も亦出来ないと云ふ事を示しませう」といって彼は弾き始めた。彼はその第一楽章を大変よく弾いて終りには滅茶苦茶になつてし

まったからグリーグは正しいTempoを教へたのでそれからは実に驚くべき正確さを持って弾いた⁽³⁾。特に驚⁽⁴⁾ 驚⁽⁵⁾ すべき事には全曲を通じて最も六ヶしきCadenzaを一番美事に弾いた事であつた。数週間の後彼はローマから帰ってクリスチャニアに住み音楽協会を創立した。その後Johan Svendsenと知り合に成って共に此協会の為に尽した。

〔5. イプセンと《パール・ギュント》〕

一八七四年に至りてノールウエーの政府はグリーグとスウベンセンとが同国の音楽藝術に尽した功勞を賞して年俸一六〇〇クラウンを与へた。我が国の八百八十円程に当るのであるが英米に較ぶれば諸物価低廉の為めそれ丈の価格でも非常に助かつたのである。その為めグリーグは専心作曲の方に力を尽す様になつた。

〔6. 家庭でのグリーグ——性格——逸話〕

グリーグは作曲中には誰れでも側で聴いて居る事を好まなかつた。而してもし聴く人が来た時には作曲をやめてピアノを伏せるのを常として居た。

グリーグ夫人は彼の助手であつた⁽⁴⁾。彼等が結婚してから既に数年になつて居るにも拘らずそれでも夫人の前では彼は決して作曲をしなかつたと云ふ事であつた。彼は少しも勲章と云ふ様な物には氣をとめなかつた。只一番喜んだのは彼が六十才の誕生日を祝する為めにライブチヒの音楽院の講堂に彼の胸像がをかれて有名なGewandhaus楽堂に於て彼の作品のみの音楽会が開かれた時であつた⁽⁵⁾。

(1) 原文：October = 10月 (p. 48)。

(2) 原文：a German Lisztite = 一人のドイツ人のリスト信奉者 (p. 55)。

(3) 原文：he took the first part of the concerto too fast, and the beginning consequently sounded helter-skelter; but later on, when I [Grieg] had a chance to indicate the tempo, he played as only he can play. = 彼はこの協奏曲の最初の部分のテンポを速くしすぎたので、その結果、冒頭は滅茶苦茶な響きになつた。しかし後で私〔グリーグ〕が折を見てテンポを指示すると、彼は彼にしかできない弾き方で弾いた (p. 55-56)。

(4) 原文：His wife was his inspiration as well as his best interpreter. = 彼の妻は彼のインスピレーションの源であり、また彼の最高の理解者であつた (p. 70)。

(5) 原文：he was particularly pleased when, on the occasion of his sixtieth birthday, his bust was placed in the hall at Leipzig where the famous Gewandhaus concerts are given. = 彼が特に喜んだのは、彼の60歳の誕生日に際して、彼の胸像が、有名なゲヴァントハウスの音楽会が開かれているライブチヒの音楽堂に設置された時であつた (p. 92)。

一八七二年に彼はスウェーデンの音楽院の教授に任ぜられた。

又一八九三年には英国 ^{〔ケンブリッジ〕} 劍橋大学の名誉音楽博士の称号を賜られた。非常に興味ある事には彼と同時にTchaikovsky, Saint-Saëns, Max Bruch及びBoito等が同大学から音楽博士の称号を受けた事である。彼れは健康がすぐれなかった為にその式に列する事が出来なかったが一八九四年五月十日に劍橋に行って学位を受けて居る。而して二年後の同月に於て ^{〔オクスフォード〕} 牛津大学から音楽博士の称号を受けた。英国の批評家は彼を評してメンデルゾーン以後英国にをける最もpopularな音楽家だと云って居る。

[7. 指揮者・ピアニスト—ドレフュス事件—ニーナ・グリーグ]

一八八八年の八月三十日バーミングハム音楽祭にSir George Groveが列した後で云って居るには昨夜の音楽中一番自分の興味を引いたのはグリーグの序楽であった。彼の容ぼうはベートーベンに似て居たが指揮振りはベートーベン程無法でなかった。

同年の五月三日にロンドンのフィルハーモニー協会は一音楽会の全部を彼の作品で満たして居る。而してグリーグ自身がそれを指揮した。

当時ロンドンタイムスは評して曰ク「グリーグは彼の洋琴伴奏曲短イ調を彼独特の弾法で弾いた。而して此 ^{〔司伴奏〕} 司伴奏は同種類の中で最も美しい物である。あの夢の様な第一楽章やあの麗わしいアダチオはテニソンの詩中“Dark and true and tender is the north”を思い出させる」。

話しは前にもどるが⁽⁶⁾ Christian Schiøttは面白い逸話を書いて居る。ベルゲンで或日彼は彼の友Frants Beyerと魚つりに出かけた事があったが一度その最中一つの楽想が浮んだのでポケットから紙

を出してそれに書きとめて舟ペリにをいてつりをつづけて居たがふいに風が来てその紙を水の上に飛ばしたのを彼は知らなかった。彼の友は急いでその紙を拾って其節を口づさんだ。

グリーグはすぐ気がついて「それはどうしたのだ」と彼に問ふた。彼は笑ひながら「今作ったばかりだ」と答へた為グリーグは真面目になって「人をばかにして居る。自分もそれと同じ楽想が浮んだのに」と云ったといふ事である。



ハダゲンフィヨルドで釣りをするグリーグ

グリーグは作曲家として ^{〔はたまた〕} 将又洋琴家としてロンドンで非常に評判で有った。彼の音楽会の時は朝の十一時頃から人が詰掛けて行つたと云ふ事で夫れはルビンスタイン以後無かつた事である。

巴里に於ても同様で有った。有名な作曲家Gabriel Fauréは *Le Figaro* 紙上に評して「今生存して居る音楽家の中でグリーグ程一般に歓迎される人は無い」と云って居る⁽⁷⁾。巴里に於てグリーグの生涯中最も著しい事が起つて居る。夫れは当時巴里に於て有名な管絃楽長で有ったEdonard Colonneが其属して居るChâtelet座に彼を ^{〔聘〕} へいして一大音楽会を催した事である。

初めグリーグはコロヌ氏の招待を否んだが其切なるに及んで一九〇三年巴里に來た。音楽会の当日はシャトレ座の前は数万の人⁽⁸⁾を以て埋まった。グリーグが指揮すべく指揮台に昇つた時彼は数十分⁽⁹⁾

(6) 前段は原書の p. 100 に該当するが、ここで頼貞は実際にページをさかのぼり、前章 p. 91-92 の逸話を訳している。

(7) 行末に縦線を引いた箇所は、南葵音楽文庫所蔵の原書でも赤鉛筆で同様の線が引かれている (p. 103)。

(8) 原文：hundreds = 数百人 (p. 106)。

(9) 原文：several minutes = 数分間 (p. 106)。

も続いた拍手に迎えられた。各曲が数度となく繰返され其度毎に聴衆は熱狂的の拍手を以て迎えた事は云ふ迄もない。米国の有名な音楽批評家FinckがTroidhaugenにグリーグを訪ねて其印象中に自分は初め彼の音楽を聴いて其美に酔はされたが其内に音楽に熱中して彼自身〔が〕弾じて居る事を忘れて仕舞た。それは宛も一男優が或役を演じて居る際其妙技が熟して居る為にスッカリ劇中の人になり終ると同じ事であると云って居る。グリーグ夫人はロンドンで一八九八年にビクトリア女王陛下の前で唄ったのを最後として決して公衆の前で唄はなかった。其以後は重に家庭でグリーグを援けて居た。グリーグの最良の歌謡は彼の夫人の為に作られたものである。

[8. ノールウェーの民俗音楽—グリーグの独自性]

グリーグは屢々スカンチナビア音楽に就て話して居るが其中に紐育の一新聞に宛てた公開状で「自分はスカンチナビアの音楽に就て明るいのは無く単にノールウェーの音楽に就てのみ語る事が出来るのである。スカンチナビアを組織して居る三国民即ちスエーデン人デンマーク人、及びノールウェー人の性質は全然異って居て〔^{あたか}〕宛も其音色が異って居ると同じ事である⁽¹⁰⁾。ノールウェー人は非常に粗暴で有るが又一方には春の野に咲く花の床しさが有る。それがグリーグの音楽に能くあらはれて居る⁽¹¹⁾。

音楽の立場から云ってグリーグは過去現在に於て最も特色有る天才の一人である。彼の歌の如きはシユーベルトをのぞいては是に比す可き人はない。或る歌の如きはシユーベルト以上のものが有る。彼の和声に至っては是に比すべきものが六人あるのみだ。即ちバッハ、シユーベルト、ショッパン、シューマン、ワグナー及びリストである。ブラームスが或時ドブジャックに就いて云って居た“Dem fällt immer etwas

ein”（彼は楽想が一度浮んだ時は夫を決して失はない）と云って居る。亦サンサエンが紐育へ来た時或人が彼に問ふて曰く「もう詩的交響楽はお作りにならないのか」と云ふ間に答へて「少しも楽想が浮んで来ませんから」と答へた。グリーグもドブジャック、サンサエンと同様に楽想が無い時には決して作曲をしなかった。

[9. 晩年、死と葬儀]

グリーグの六十才の誕生日が一九〇三年六月十五日にスカンチナビアの各都市のみならず全歐洲及びアメリカに於て祝され多くの音楽会が彼の為に催されスカンチナビアの文豪ビヨルンソンは彼の誕生日を祝して彼を激賞した、そして最も愛国的な演説をして居る。



グリーグ六十才の誕生日

グリーグを敬愛して居る一人に独逸の皇帝がある。或夏皇帝がノールウエイの風景を賞せんとして自用のヨット「ホーヘンツォルレン」号に乗ってノールウエイを訪問した事があった。そしてグリーグを彼の舟に招待したが彼は断った。一九〇四年の六月⁽¹²⁾廿一日にライプチヒに居る彼の友達に送った手紙は非常に興味あるものであった。以下でその手紙を訳す。

或る日私はあなたのお国の皇帝にお目にかゝる機会を得ました。皇帝はそれ以前既に私に会いたいと言ふ事でしたが其の当時

(10) 原文：It differs very much as the scenery does = 風景が異なるのと同じように全く異なっている (p. 125)。「宛も……」以下は、原文ではグリーグの言葉ではなく、地の文。

(11) 行頭に縦線を引いた箇所は、南葵音楽文庫所蔵の原書でも赤鉛筆で同様の線が引かれている (p. 125)。

(12) 原文：July = 7月 (p. 144)。

病気があったために私はお断りしましたが今又その希望を継続されるむね申越された為今度は否む事が出来ず止むなく彼の招待を受けました。

吾々が始めて皇帝に御目にかゝった時は独逸の領事の家で朝食をして居られる時でした。食事中吾々は音楽に就て色々語りました。私は彼の風が好きです。——希妙な事には私共の意見はよく会いました。食後皇帝は私の傍へ来りました。そして私は彼と一時間程二人ざりて話す光栄を得ました。私共は世界のあらゆる者に就て話しました——詩、絵画、宗教、社会主義等に関して——。

彼も一人の人間です。神様ではありませんでした。ですから私は私の意見を遠慮なく演べました。話がとぎれてから音楽が始まりました。皇帝は五十人がかり⁽¹³⁾のオーケストラをつれて来て居たのでした。音楽が奏せられてゐる間皇帝は私をたずけて拍子や表情を直しましたが実際のところ私はそれを好みませんでした⁽¹⁴⁾。一曲すむとその曲についての印象を語りました⁽¹⁵⁾。最後に私は彼の為にピアノを奏きました。彼の最も近くに座して居た私の妻は彼がその曲の最も美しい部分に来た時にその印象を説明したと後で私の妻が言っていました。私は彼が非常に独逸的だと言ったのでピアノソナタの中のミニユエットと又彼が好きであった‘Wedding Day at Trolldhaugen’の二曲⁽¹⁶⁾を奏きました。

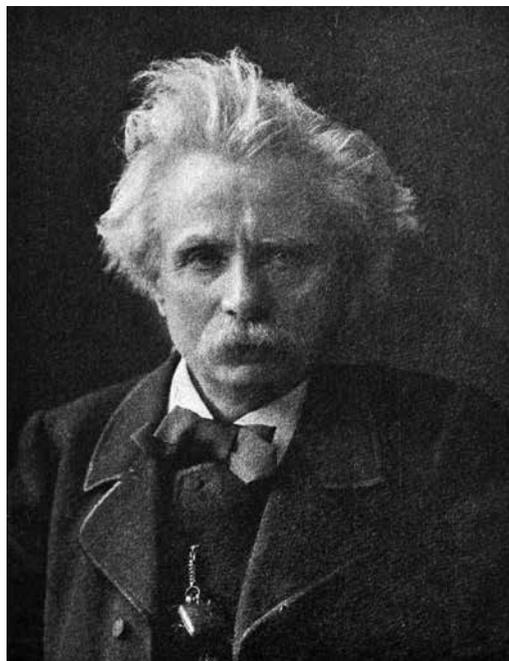
翌夜皇帝の座として居るホーヘンツォルレン号の上で一大夜会が催され私共も招待されました。その夜は非常に晴れ渡った夏の夜で空には一面星が出ておりました。その下で船上のオーケストラは私の曲やモザルト、ベートーベンの曲を奏しました⁽¹⁶⁾。一曲終る度毎にホーヘンツォルレン号の周囲に集まって居る数百の小舟否数千の小舟

から拍手が起りました。特に皇帝が甲板上にその姿を現した時などは拍手が数十分間絶へませんでした。皇帝は私を患者の様に遇して呉れました。彼は私に彼の着て居た外套を貸して呉れましたのみならず毛布を取寄せて私の腰を包んで呉れました。

私は皇帝が自作の‘Sigurd Jorsalfar’ [十字軍の王シーグル]に就てその由来を聞き、非常に興味を持ち、傍に居た皇室座の支配人 von Hülsen に是非上演させ度いと言って居た事を忘れる訳には行きません。

独逸皇帝は実際非凡な人で勢力家⁽¹⁷⁾で有り又大なる自信家で有り而して誑しい心の持主で有りました。

翌年の正月の元旦に独逸皇帝は彼に打電して「新年を祝すると共に其年に於ても又音楽界に目覚しき活動を望む」と云って居る。若グリーグをして常に独逸皇帝が自ら自分で彼に示した様に自分の健康を懸念したならば今少し長寿を保たかも知れなかったらうに!!



グリーグ 1904年5月

[13] 原文：about forty men = 約 40 人 (p. 145)。

[14] ここでオーケストラはグリーグの作品を演奏しており、皇帝はグリーグが曲のテンポ（頼貞は「拍子」と訳している）や表現のしかたを訂正するのを手伝ってくれたが、グリーグ自身は訂正することを好まなかった、ということ。

[15] 原文：Then he illustrated the impression made by the music by movements of his head and body = そして彼 [皇帝] は曲から得られた印象を頭や体の動きで示しました (p. 146)。

[16] 原書に誰の曲が演奏されたかは書かれていない (p. 146)。

一九〇六年に一書店に送った手紙の内に「今私は世界各国から音楽会の招待を受けて居る⁽¹⁷⁾。実に僅か一度か二度の練習で是等の外国管絃楽団が自らの精密なる意思を理解し得ると云ふ事は奇蹟で有る」と云って居る。又一九〇二年の四月に彼の友オスカーマイヤーに送った手紙の中で「自分は廿二度ロンドンのフィルハーモニー管絃楽団で自作を指揮したが⁽¹⁸⁾彼等が如何にそれを能くなし終へたかは自らの予期以上のものが有った」と書いて居る。

瑞西に居るMonastier Schroeder of Monclonに送った手紙——夫れは雑誌*Die Musik*に掲載されて居る——に「貴方が自分が戴冠式カンタタ^[ソ]を作りはしまいかと云ふ恐を持って居る事は私を非常に笑はせた。私はどんな事が有ってもそれは決して忘ないでせう。数年前英国から皇帝⁽¹⁹⁾の戴冠式の為めに行進曲を作って呉れと云って来ましたが無条件に断りました^[]。是れに反して一九〇六年の五月の十七、二十四の両日ロンドンに於て二つの音楽会をして呉れと熱心に申込んで来たのは崑んで請けました⁽²⁰⁾。私のコンサートはクインズホールでした。そしてその日は一階から四階までぎっしり人が詰って居ました。一体これと同じ曲目でもし他の人が指揮をしたとしたならばやはり此様に人が来るでせうか。それ以上面白い事には次の日の室内音楽会の切符が全部売り切れた事です。

管絃音楽会以外の音楽会で是程の盛況を呈した事は実に未曾有の事です⁽²¹⁾。欧羅巴の作曲家で其音楽会の切符が全部売切れ

た場合には米国から非常に多くの招待状が来ます⁽²²⁾。

私は既に老年の域に達して居りますが夫れでも次の様な申込がありました。三ヶ月の内に三十回の音楽会を開催して一音楽会毎に二千五百^[ドル]弗を支払ふと云ふ契約です⁽²³⁾——と書いて居る。

グリーグは彼の最後の近きを自覚して決して米国に行かなかった。如何なるよい音楽も歌劇以外のものは有利なものでは無い。ビエナの一記者がクリスチャニアの一劇場で二百回も続いたLeharの人気りのオペレッタ「メリウイドー」を見物して彼に逢った時グリーグは下の様に語って居る。

「此『メリウイドー』も——私は実際そう言い得る事を信じて居るが——私の音楽と共に世界中何処でも聞く事が出来るが併し私のすべての作品に依って得る^[物?]収入よりも遥かにクリスチャニアのみで此のオペレッタから入るレハールの収入の方が数倍多い」。

グリーグは一九〇六年一月にその友Röntgenに送った手紙に「自分は外国でする音楽会は千マルク『約五百円』以下では為ない」と言っている。そして今年の五月にロンドンに於ける特別音楽会から千五百円で申込んで来て居るのを断はってそして「金よりも健康が大事だ」と言っている。

一九〇七年の六月⁽²⁴⁾に到って彼の病勢は進んで歩き乍ら話す事が出来なくなった。随って彼が話たいと思ふ時には往來の

(17) 原文：From all over the world I am now getting invitations to conduct. =世界中から今私は指揮の招聘を受けている (p. 149)。

(18) 原文：On the twenty-second I conducted a concert at the Philharmonic with works of my own. =私は22日にフィルハーモニック [ホール] で自作を指揮しました (p. 150)。

(19) 原文：The King =国王 (p. 153)。

(20) 原書で「是れに反して……請けました」に該当する部分 (p. 153) は地の文で、グリーグの手紙の文章ではない。

(21) 「私のコンサートは……未曾有の事です」に該当する部分 (p. 154-155) はロンドンの新聞 [News of the] World の記事からの引用で、グリーグの手紙の文章ではない。頼貞は室内音楽会の日を、グリーグが指揮した管絃音楽会の「次の日」と記しているが、2つの音楽会の開催日は5月17日と24日なので、「次の週」が正しい。

(22) 原書で「欧羅巴の作曲家で……招待状が来ます」に該当する部分 (p. 155) は地の文で、グリーグの手紙の文章ではない。

(23) 原書で「私は既に老年の域に……と云ふ契約です」に該当する部分 (p. 155) は、正しくはニューヨークからの出演依頼に対するグリーグの回答であり、原書では雑誌 *Musical America* に掲載されたものと説明されている。本文にあるような条件の依頼が実際にあったのではなく、これはグリーグが提示した出演条件であった。グリーグは現実的にあり得ない破格の条件を提示しており、これは実質的に出演依頼に対する謝絶の回答である。

(24) 原文：July = 7月 (p. 157)。

真中でも立止らなければならない。翌年⁽²⁵⁾の八月彼は数人の友人と共にベルゲンの傍なるBlaamandenと言ふ山に登った。山登りは可成りの努力を要せしめたが、絶頂の眺望は彼の疲れを忘れせしめた。そして彼は「農夫の楽人を連れて来て農夫の舞踏を聞かして貰い度い」と絶叫せしめた。併し此の疲労は彼をして彼の最後に近からしめた。そして彼は死が近づいて来て居るのを自覚して丁度その時彼を訪れたRöntgenに「自分は明らかに再び君に会ふ事が出来ない事を感じる。私の努力はつきた。そして此の世から去る事も近い将来だ。吾々は永久に別れねばならぬ」と言って居る。その事のあった少し前に彼は英国からリーズ市の音楽祭に彼の作品ばかりの音楽会を^{【なしたい】}為度から来て呉れと言ふ手厚い招待状を受けたので行く事になって居たが医者^{【なしたい】}の注意で病院に入らねばならなくなったので行く事を中止した。

一九〇七年の八月廿八日にベルゲンの病院に入院し⁽²⁶⁾その九月の三日の朝昏睡状態に墜ってその夕心臟麻痺で此の世を去った。医者^{【なしたい】}の言に依れば彼の内臓のすべてが非常に悪くなって居て彼が之程の長寿を保ち得たと言ふ事がすでに奇蹟であると言って居る。

蓋し彼グリーグ程全国人に一般に知られ且つ愛された作曲家は他にあるまい。手紙は単に“Edvard Grieg”と書いてありさへすればたゞちにベルゲンの彼の家に送られた程一般に知られて居た。

彼の死んだ朝は非常に天気がよく市中の誰彼となく此の小春日和を毟んで居た様に見へた。一旦彼の死が各新聞の号外に依って報ぜらるゝや商人はその用事を忘れ工場に通ふ人々は今迄の大きな音声で話し合っ居たが急に唾の様にだまり込み楽譜を小腋にかゝへて通っていた^{【少】}少女は真青になりキャッキョと笑って居た下女が静かになって了った程彼の名はすべてに知られて



グリーグ 最期の写真

居た。

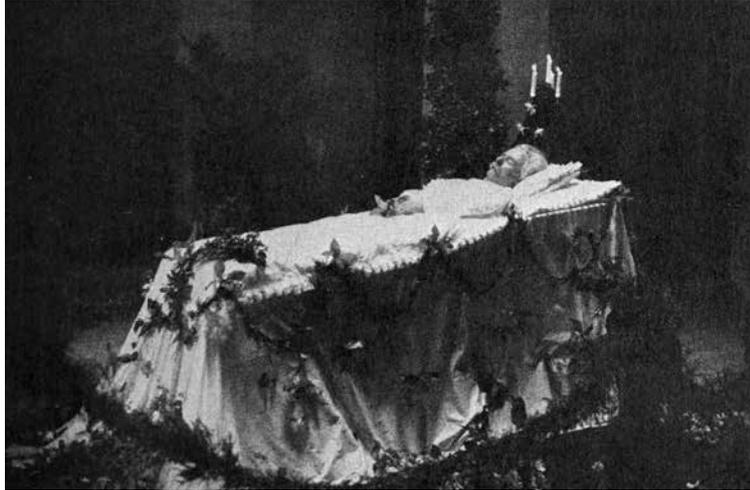
彼の遺骸は遺言に依って茶毘に附せられ、九月九日にベルゲンに於て国葬を以って行はれた。その時の事を故人の友人である有名なヴァイオリニストAdolph Brodskyが英紙*Manchester Guardian*に投書したのによれば「グリーグの葬式で第一に人を感じしめた印象は五万と称せられた群集である。その葬儀は正午に始まり最初故人の作になる‘Varen’（春）が絃楽に依って奏せられ続いて同じく彼の作の民謡が合唱団に依って歌はれ最後に彼が且って親友Nordraakの死を悲しんで作られた送葬曲が百五十人の管絃楽団に依って奏せられた。その管絃楽団の部員は各座そのオルゲストラ員及び素人に依って組織され^{【少】}ライプチヒ音楽院の卒業生で現在クリスチャニアの帝国座の楽長であるHalvorsenが指揮をした。此グリーグの送葬曲は元来軍楽隊の為に作られたもので有るがクリスチャニア⁽²⁷⁾にはよい軍楽隊無かった為め是れを管絃楽になほさねばならなかった。

(25) 原書に「翌年」とは書かれていないので (p. 158)、前段と同じ 1906 年のこと。

(26) 原書によれば、この日付はグリーグが病院で書いた最後の手紙の日付であり (p. 158)、これが入院日とはかぎらない。

(27) 原文：Bergen=ベルゲン (p. 161)。

是れが為めハルボルセンは十一時間を費して⁽²⁸⁾立派に管絃楽用として美しく送葬曲を作り上げた。特にその楽器編成上から云はばまるでグリーグ丸出して是れをグリーグがしたと云っても誰れも不審を起さないほどで有った。



死の床のグリーグ

弔詞は山の様に積まれた⁽²⁹⁾。そして最初にノールウエー国王から代理として派遣せられたLegationsrat [公使参事官] Scheller-Steinwartz—自身音楽家で故人の友人で有った—が長く且つ美しい弔辞を述べた。その次に独逸皇帝の代理としてニッセン將軍が弔辞を述べ⁽³⁰⁾次いでベルリンの帝室音楽院⁽³¹⁾を代表してvon Bülowが弔詞を呈した。式後棺は数人の人々によって屋外に運び出されそこに待って居た美しく飾られた棺馬車に入れられそこで誰からも一般に見える様に置かれた。葬列が通る町々の家々には半旗を掲げ各自は帽を脱いで敬意を表した。葬列に列した人のみで既に一万人で我々棺側に居たものが町を外れた時分に葬列の最後はまだベル

ゲンの町に居た程で有る。それから棺は町から程遠くない小山の墓所に運ばれた。そこで独逸皇帝、ノールウエー王及びその政府、ベルゲン市、音楽者、学者、学生、職工、農夫の皆一つに成った心からの哀悼を以てノールウエーの一大音楽家グリーグの遺骸

は其処に葬られた」。

グリーグ未亡人に送られた独逸皇帝の弔詞に曰く「自分はあなたの愛さるゝ夫君の逝去に対して心から同情する者であります。彼とその藝術は私の記憶から忘れられる事はありません。否、独逸国民から永遠に忘れられる事のないのを明言します。私は貴国に居る私の国の大使に命じて私

の代理として葬儀に列せしめます。そして私の名を以て弔詞を呈させ様と思ひます。どうか私の心からの哀悼の意を受けてください」。

葬儀の際演奏されたノルドラクの為に作られた彼の送葬曲は彼の遺志によったもので一九〇四年の十二月二十九日にベルゲンの一友人に送った手紙によると「私は私の生れた土地に葬られたいのです。そしてその時には私の親友ノルドラクの為に作った送葬曲を出来るだけ美しく奏して貰りたい。その楽譜は何処に旅行しても一緒に持って行きます」と書いて居る。

グリーグの墓地は彼の音楽が幻想的で有る様に最もローマンチックな墓所である。それはTroidhaugenから見えるfjordに突

(28) 原文：at the eleventh hour (p. 161)。「土壇場で」という意味の慣用句。

(29) 原文：There were fifty-seven wreaths, which had to be 'laid down' by nearly as many delegates = リース (花輪) は 57 個もあり、それらを「捧げる」ことになっていた [各国、各団体の] 代表者とほぼ同じ数だった (p. 162)。以下、本文中の「弔辞」「弔詞」は、シェラー・シュタインヴァルツが述べた弔辞 = oration を除き、原文ではすべてグリーグに捧げられたリース = wreath(s) である。

(30) 原文：The German Emperor's wreath came next after the wreath of the King and Queen of Norway, which was 'laid down' by General Nissen = ドイツ皇帝のリースは、ニッセン將軍が捧げたノルウェー国王夫妻のリースの次であった (p. 162)。原書には、これに続き、フォン・ビューローのリースの前に、ノルウェー議会、政府、ベルゲン、クリスチャニア両市からもリースが捧げられたとある。

(31) 原文：the Imperial Chancellor = [ドイツ] 帝国宰相 (p. 162)。ベルンハルト・フォン・ビューロー Bernhard von Bülow (1849 ~ 1929 年) のこと。



グリーグの墓

出した切り立った崖の下から五十尺の上
に有る洞窟で其処へ行くには船に乗らねば
ならない。此処はグリーグの生前に彼自身
に定めたので葬式の後灰燼にした彼の亡骸
をその処に納め大理石⁽³²⁾を以て蓋をしそ
の上に単にEdvard Griegと書かれて居る。
彼の生前彼は孤独を愛して居たので其墓ま
でも船で行かねばならない様な淋しい所を
撰んだと云はれて居る。

凡例

南葵音楽文庫に収蔵されている徳川頼貞
の手稿「グリーグとその音楽」の前半部分、
全79ページ中46ページまでを掲載した。
転記を原則としたが、明らかな誤字、脱字
は改めた。漢字の字体は新字体で統一した。
ただし、同音の漢字の書き換え（絃→弦、
洲→州、など）は行わず、原文のままとし
た。句読点は原則として原文に従ったが、読
者の便宜を配慮し適宜補った箇所もある。鍵
括弧類も同様に適宜補った。

「グリーグとその音楽」は、ヘンリー・
フィンク Henry Finck (1854 ~ 1926
年) 著 *Grieg and His Music* (New York: J.
Lane, 1910, 和歌山県立図書館請求記号：
ナ/762.3/GR/) の抄訳であり、本号掲載部
分は全15章中第1章から第9章までに相当
する。原文と頼貞の訳文とを対照し、文意
が異なる箇所には、注に原文と拙訳を付し
た。また頼貞の手稿では省略されている各
章のタイトルも訳して [] で補った。南
葵音楽文庫所蔵の原書には所々、頼貞によ
るものと思われる赤鉛筆による下線、傍線
が見られる。ここに頼貞の抄訳を掲載する
にあたり、手稿に線引きがあるわけではな
いが、彼が原書に下線を引いた箇所には、
同様に下線を付した。ただし原書に下線が
引かれていても訳出されていない文もあ
る。

手稿の書き起こしには林淑姫氏のご協力を
いただきました。記して御礼申し上げます。
(篠田大基)

(32) 原文 : a stone slab = 石板 (p. 165)。



収蔵資料 目録と紹介

南葵音楽文庫〈重要資料〉の選定

現在、南葵音楽文庫の「貴重資料」とされている資料群は、1970年までに、当時の南葵音楽文庫に対する価値観、とりわけ西洋音楽史の研究に資する資料としての視点が強く意識されたなかで選択された。現在でも本文庫は、西洋音楽史の研究に関わる重要な資料を多数所蔵していることに変わりはない。一方で、1970年から半世紀を経て、以下のような状況も生まれている。

- (1) 音楽史研究の進展から、所蔵している研究書が、いわば古典になった。
- (2) デジタル化による知の共有化が進み、資料を所蔵する意味や意義が変質した。
- (3) 音楽史研究の幅が、作品・作家研究中心から、受容史、演奏史、社会史等に拡大し、新しい研究方法や手法が拓かれている。
- (4) 日本における洋楽とその歴史への関

心が高まり、資料の整備や研究書の公刊が進んだ。

このような環境の変化にあって、南葵音楽文庫についても、ただ西洋音楽史資料の宝庫といった視点からだけではなく、複眼的な視座から、所蔵資料の価値を見いだす必要性が生まれている。

以上をふまえ、南葵音楽文庫の『蔵書目録（貴重資料）』（1970年）に記載されていない資料のうちから、音楽史学のみならず、音楽をめぐる社会史、演奏史、受容史、加えて南葵音楽文庫の形成につながる資料、また広く文化学術的な価値や、書誌学的に重要な資料を、新たに「重要資料」として選定する。複眼的な視座による選定となるため、選定にあたっては、おおまかな「ガイドライン」（下記）を設定し、「選定理由」を付記する。

重要資料選定ガイドライン

希 少 性	世界的に残存例が少ない資料である。 日本においては唯一ないしそれに近い資料である。
来 歴	徳川頼貞ないし紀州徳川家との繋がりが明らかな来歴がある。 当該資料にふさわしい重要な個人や団体に由来している。
手 沢 本	当該資料にふさわしい重要な個人による書き込みがある。 作者等による献辞などが明記され愛蔵されていた資料である。
音楽図書館	南葵音楽図書館の活動から生成された資料である。 日本の（音楽）図書館史を証す資料である。
日本近代音楽	日本近代の音楽活動を伝える一次かそれに準じる資料である。 西洋音楽の受容や普及を伝える資料である。
音楽史研究	西洋音楽史研究のうえでの古典的ないし重要な業績である。 一次資料のファクシミリ版で、今日では入手困難である。

その他、保管保全上の理由を勘案する場合もある。

『蔵書目録（貴重資料）』（1970年）記載の資料は「重要資料」の対象とはしない。
上記ガイドラインは、今後追記、変更する場合がある。

南葵音楽文庫〈重要資料〉選定結果
令和3～令和5年度

1.ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト作品全集 第1部門全17巻
Oeuvres complètes de Wolfgang Amadeus Mozart. Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1798-1806. 17vols., 25×34cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ楽譜/762.346/MO/1-17)
【選定理由】希少性 音楽史研究

音楽出版社ブライトコプフ・ウント・ヘルテルがモーツァルトの妻コンスタンツェの協力のもと、作曲家の死後6年を経て刊行した史上初の『モーツァルト作品全集』(旧全集)の第1部門全17巻セット。国内唯一の所蔵である。

2.リヒャルト・ワーグナー《ローエングリン》**Wagner, Richard. Lohengrin.** Leipzig: Breitkopf & Härtel, [1883, 1887]. (収蔵番号：3K4.1/18 I-IV)
【選定理由】来歴 手沢本 日本近代音楽

1942年に当時、南葵音楽図書館の蔵書が寄託されていた慶應義塾大学図書館から借り出され、同年11月23～29日に東京の歌舞伎座で行われたワーグナーの《ローエングリン》全幕初演(マンフレート・グルリット指揮、藤原歌劇団)で使用された楽譜。戦時統制を受けて公演時間を調整した跡が随所に見られる。詳細は本紀要5号, p. 54-57参照。

3.ハンス・フォン・ビューロー『書簡集・著作集』**Bülow, Hans von. Briefe und Schriften.** Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1895-1896. Vol. 1-3, 21cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ/762.3/BU/1-3)
【選定理由】来歴

南葵音楽文庫が所蔵する8巻のうち最初の3巻には、フェルッチョ・ブゾーニの蔵書票が貼られている。徳川頼貞は1921年にローマでブゾーニに会い、彼の演奏を聴いた。そのときに譲り受けたものか。しかし頼貞は著作にそのような記述は見られない。

4.カミーユ・サン＝サーンス チェロ協奏曲第2番 二短調 作品119

Saint-Saëns, Camille. 2e Concerto pour Violoncelle et Orchestre, Op. 119.

Paris: A. Durand & Fils, 1903. 1 score (61p.), 34cm + 36 parts, 34cm. (収蔵番号：3K4.1/3)

【選定理由】来歴 手沢本

作曲家サン＝サーンスからチェリストのジョセフ・ホルマンに献呈された作品で、南葵音楽文庫のホルマン文庫に収められている。総譜は印刷出版に先立つ試し刷りで、最初のページには印刷所の押印などがある。詳細は本紀要6号, p. 58-59参照。

5.カミーユ・サン＝サーンス《ミューズと詩人》作品132 **Saint-Saëns, Camille. La muse et le poète, Op. 132.** Paris: A. Durand & Fils, 1910. 1 score (27p.), 35cm + 2 parts, 35cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ楽譜/763.44/SA/)
【選定理由】来歴 手沢本

南葵音楽文庫が所蔵するピアノ三重奏版総譜のタイトルページには作曲者からホルマンへの献辞が記されており、その日付からこの曲の初演に使われた楽譜と分かる。ヴァイオリンとチェロのパート譜への書き込みはこの曲の初演者であったウジェーヌ・イザイとホルマンによるもの。ホルマン文庫にはこの曲の管弦楽版の楽譜も収蔵されている。詳細は本紀要1号, p. 76-77参照。

6.ヴァンサン・ダンディ『セザール・フランク』**Indy, Vincent d'. César Franck.** Paris: F. Alcan, 1914. 253p. 20cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ/762.3/FR/)
【選定理由】来歴 手沢本

ダンディから徳川頼貞への献辞が記されている。頼貞は1921年の外遊の際に、パリの音楽学校スコラ・カントルムで同校の創設者ダンディに会い、彼の演奏でダンディの師フランクのオルガン曲を聴いた。本書はこのとき頼貞に贈られたもの。詳細は本紀要5号, p. 58-62参照。

7. イツァーク・アルベニス《スペイン風セレナータ》作品181

Albéniz, Isaac. *Sérénade Espagnole, Op. 181*
London: C. Ducci, 1890. 6p. 35cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ楽譜/763.2/AL/)

【選定理由】来歴 手沢本

ホルマン文庫に収蔵された楽譜であるがチェロ用の編曲ではなく、ピアノのための原曲。表紙に作曲者からホルマンへの献辞が記されている。詳細は本紀要3号, p. 58-60参照。

8. ジョセフ・ホルマン自筆楽譜2点

Hollman, Joseph. *She is sleeping* pour chant et piano. Autograph, n.d. 6p. 35cm. (収蔵番号：3H2.6/10.18)

———. ***Reproche à Elsa de l'Opera Lohengrin de Richard Wagner.*** Autograph, n.d. 6p. 34cm. (収蔵番号：3G2.2/12.1)

【選定理由】希少性 来歴 音楽図書館

ホルマン文庫に含まれるホルマン自筆の楽譜。《彼女は眠っている》は作詞者未詳の歌曲。《エルザへのたしなめ》は、ワーグナーのオペラ《ローエングリン》第3幕第2場で騎士ローエングリンが妻となった公女エルザに歌いかける歌をチェロとピアノのために編曲したもの。南葵音楽図書館は遠藤宏の編纂によりこれらの楽譜の出版を計画したが、実現しなかった。

9. 田中正平『純正律の研究』

Tanaka, Shohé. *Studien im Gebiete der reinen Stimmung.* Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1890. 90p. 24cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ/761.12/TA/)

【選定理由】日本近代音楽

南葵音楽事業部の評議員も務めた音楽学者、田中正平によるドイツ語の論文。田中は1889年に「純正調オルガン」を製作し、ドイツで演奏。本書はこの楽器の理論的基礎を形成する。田中は1932年に南葵音楽図書館でも純正調オルガンの講演と演奏をおこなった。

10. 呉泰次郎《主題と変奏》 **Goh, Taijiro. *Thema and Variations*** for String Trio. 共益商社, 1933. 25p. 19cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ楽譜/764.23/GO/)

【選定理由】手沢本 音楽図書館

日本近代音楽

呉泰次郎がワインガルトナー賞を受賞した代表作のミニチュア・スコア。南葵音楽文庫には2冊が所蔵され、2冊ともこの曲が作曲された1933年の日付が入った南葵音楽図書館への献辞がある。しかしこれは南葵音楽図書館閉鎖後の日付であり、どのように受け入れられたかは未詳。

11. 徳川頼貞自筆論稿3篇

徳川頼貞「**楽器の研究**」手稿, 1910. 117p. 27cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ/763/カ*ツ/)

———「**グリーグとその音楽**」手稿, 1920. 79p. 30cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ/762.3894/グリ/)

———「**指揮者ヘンリー・ウッドに関して**」手稿, 1920. 45p. 30cm. (和歌山県立図書館請求記号：ナ/762.33/ウツ/)

【選定理由】希少性 来歴 音楽図書館

日本近代音楽

「楽器の研究」は頼貞17歳、学習院中等学科在学中に執筆された論文。「グリーグとその音楽」はヘンリー・フィンク著 *Grieg and His Music* の抄訳（前半部分を本紀要, p. 44-54に掲載）。「指揮者ヘンリー・ウッドに関して」はローザ・ニューマーチ著 *Henry J. Wood* の抄訳（全文と解題を本紀要6号, p. 66-77に掲載）。詳細は本紀要3号, p. 77-78参照。

徳川頼貞 『薈庭楽話』 年譜

これまで徳川頼貞について詳細な年譜は纏められていません。彼は、『薈庭楽話』を1941年に私家版として刊行配布、2年後には削除改訂をした市販版が刊行され、自身の生い立ちや音楽交友を軸に明らかにしています。ただし、音楽に関連しない部分、なかでも華族の社交や手がけた事業については語らず、音楽であっても自己の業績を殊更に記述したりはしません。それは華族としての矜持にもとるからです。ですから『薈庭楽話』をもとに頼貞像は語れず、頼貞の全体像が見えない限り『薈庭楽話』の内容について正鵠に語りえないのです。

2021年に『薈庭楽話』私家版の新版を、和歌山県による南葵徳川400年記念事業の一環として中央公論新社より刊行するに際し、校註者として協力する機会を得ました。今日の読者と本書の記述内容をどのように結ぶかという課題に対し、新字新かなへ直したり、語意や人名に若干の注を付すだけでは到底十分とはいえない隔たりを、校註者の立場と許された紙幅、時間では解消できない無為が残りました。

南葵音楽文庫にかかわる調査研究を受託して以来、音楽文庫の内容のみならず徳川頼貞の生涯や文化貢献活動、さらには大きな影響を及ぼした父徳川頼倫の活動、また徳川家が置かれた華族としての立場、その時代や環境の理解や情報は不可欠であるとの認識は日々に深まり、年譜の拡充と情報の追加を漸次おこなってきました。

座談の名手と言われた徳川頼貞ではありますが、自身で日誌を付けていた形跡はありません。徳川家としての日録、日誌は、他の有力華族同様に書記役の家扶により作成されていたと思われ、残存していません。頼貞が部長、理事長

を務めた南葵音楽事業部の会議記録も、偶然残された議案書一片をのぞき失われたようです。

徳川家側のオフィシャルな記録の欠落にもかかわらず、頼貞とその周辺に関する記録や言及は、実は少なからず残存、それらは多岐にわたり各所に散在しています。国内外の新聞（海外で発行された邦字紙、国内の英字紙ふくむ）、政党機関誌、音楽会などの催しものに際して刷られたエフェメラ、関係者の日記、関連した団体の活動報告などが含まれます。

これらに対するリサーチは数年にわたり継続していますが、悉皆的な調査完了には遠い状況にあります。したがって、ここに掲載している年譜にしても、いわばwork in progress に過ぎないことを了解ねがいます。

これとは別に、いっそう網羅的な年譜は、南葵文庫とそこに淵源をもつ南葵音楽図書館に鑑み、徳川頼倫、頼貞二代に互るものとして編まれるのが望まれます。（美山良夫）

年譜について

- ・おもに徳川頼貞の足跡を『薈庭楽話』を軸にたどるために編纂しています。没後に刊行された『頼貞随想』にも内容が重複する部分がありますので、併せ参考にしています。
- ・今回は、「第二次外遊」（『薈庭楽話』第9章）にあたる1921年まで掲載しています。
- ・中央欄には徳川家や関連した事案を掲載しましたが網羅的ではありません。
- ・右欄には徳川家、南葵文庫に関係する刊行物を記載しています。
- ・右側には、関係が深い歴史上の出来事も抄出掲載しました。
- ・年譜に引用される家令などの人物について略紹介を、舞台となった徳川本邸、別邸の地図、図面、画像を掲載しました。

徳川頼貞 『菅庭楽話』 年譜①

	年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境	太字は南葵による出版物
明治5	1872 6 27		徳川藤之助（頼倫）、両国の田安德川邸で生まれる		
	7 1874 10		藩祖頼宣を祀る南龍神社の創建を旧藩士族が提議、11月許可		
	10 1877 3		徳川茂承、墓参のため来県、旧和歌山藩士のために徳義社創設を提言、基金拠出		
	13 1880 2 2		茂承、田安德川家から養嗣子を迎え頼倫と改名		
	18 1885		頼倫、学習院に入学し以後4年間在学		
	21 1888		茂承の命により旧紀州藩士の堀内信が『南紀徳川史』の編纂を開始		
	23 1890 9 14		徳川頼倫、茂承の長女、久子（1873-1963）と結婚 茂承、貴族院議員に選任される		
	25 1892 8 16	徳川頼貞（頼倫の長男）、麻布飯倉の本邸で生まれる			山葉オルガン輸出開始
	27 1894 8 1				日清戦争 ～95年4月
	28 1895				下関条約、三国干渉
	29 1896 3 8		頼倫が横浜から英国留学へ。鎌田栄吉、斎藤勇見彦随行。4月16日マルセイユ上陸		
	6 25		茂承が大磯町高麗に土地と所在建物2棟を購入		YMCA会館開館 1894年5月5日
	10 29	徳川治（頼倫の三男）、麻布飯倉の本邸で生まれる			
			頼倫一行の行程 1896年9月までロンドン（8月スコットランド）、10月～フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、ポーランド、オーストリア、ハンガリー、ブルガリア、トルコ、ギリシア、エジプト、イタリア、スイス、フランス（リヨンなど地方都市）、スペイン、ポルトガル、パリからロンドン帰着（1897年4月4日）。以後半年間は英国滞在		
	30 1897 11 21		頼倫一行がアメリカ経由で帰国		
	31 1898 5 20		頼倫、麻布本邸内に新文庫創設発表 11月17日着工、設計は石村金次郎		
	32 1899 12		竣工、南葵文庫と命名（1階に閲覧室等、2階に庫主室、会議室等、別棟に書庫）		
	34 1901 4		『南紀徳川史』浄書本献納 南葵文庫に納められる		
	c.1901	頼貞のため頼倫が山葉オルガンを購入、納所弁次郎（1865-1936）に演奏を学ぶ			
	35 1902 4		南葵文庫竣成し、開庫式開催		
	37 1904	寄宿先の中島力造博士夫妻にピアノ学習希望を伝え、スウィフト夫人のレッスンが始まる			
	38 1905 4 3		南葵文庫の本館、第2書庫増築への安礎式開催		日露戦争 1904年2月～05年9月
	39 1906 4 7				アルヘシラス議定書調印

徳川頼貞 『薈庭楽話』 年譜②

	年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境 太字は南葵による出版物
明治	39 1906	6		南満州鉄道会社設立の勅令公布
		8 20	茂承、麻布飯倉本邸で死去 頼倫、第15代当主に	『南葵文庫概要』(第1版)
40	1907	5	頼倫、満州と朝鮮を巡る	
41	1908	10 10	南葵文庫の増築工事竣成、 公開式開催	『紀藩士著述目録』
		11 3	南葵文庫新館開館 一般公 開し閲覧開始	『南葵文庫蔵書目録』
		12 1		有楽座開場
42	1909	12	頼倫、大磯高麗園の既存建 物取り壊し、再整備へ	『南葵文庫報告』第一
43	1910			『南葵文庫報告』第二
44	1911	3 11		帝国劇場開場
		5	頼倫、南葵育英会設立 旧紀州藩士子弟支援へ	
		6 11	《バルカンの王女》有楽座	
		7 30	史蹟名勝天然記念物保存協 会設立、頼倫会長に	
		11 3		『南葵文庫報告』第三
			上田貞次郎が鎌田栄吉の依 頼で頼貞の学業指導役に	頼倫、大磯高麗園の隣接地 を新たに購入
45	1912	1	上田が頼貞と小旅行 治も 同行	
		1 30	《コルヌヴィルの鐘》帝国劇場	
		4 7		大磯高麗園の「澄心亭」完 成し落成式開催
		5	中学卒業 中島力造宅の寄 宿を解消、麻布我善坊町の 別宅に移る	
		5 24	小泉信三が鎌田栄吉の依頼 で頼貞と治の教師に	
		27	小泉が頼貞・治と初めて会う	
		6 30	《ダラー・プリンセス》帝国 劇場	
		7	上田が頼貞と日光に小旅行、 フランス人母子と出会う	
大正	元	9 11		小泉信三が留学のため新橋 出発 神戸から乗船
		2 1913	2 27	治、学習院で乗馬練習中に 事故、3月1日死去、6日 寛永寺で葬儀(享年16)
		3	頼貞の留学を岸幹太郎が提案 上田・橋井・山東の同行、 8月ないし9月出発を検討へ	
		3 31	頼貞、横浜港から乗船し上田 貞次郎・函師尚武らと奈良 吉野方面に旅行。4月10日 京都から夜行列車で帰京	
		5 6		鎌田栄吉 渡欧のため出発 頼貞の留学案進展へ
		6 15		頼倫、日本図書館協会総裁 に推戴される
			頼倫、留学中の頼貞後見役 を上田に依頼	

徳川頼貞『菴庭楽話』年譜③

年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境
大正2 1913 8 27	頼貞の先遣として山東誠三郎が和歌山入り 南葵育英会、三田会による和歌山倶楽部での歓迎会準備		太字は南葵による出版物
9 3	英国留学へ出発。京都・和歌山を訪問、朝鮮半島・東清鉄道・シベリア鉄道経由でロンドンに向かう 頼貞一行の行程(国内) 4日朝京都で桃山御陵参拝、大阪から南海電車で和歌山市駅、妹背別荘に宿泊。6日妹背山多宝塔で法要、南龍神社、東照宮参拝、和歌浦防波堤工事視察、報恩寺、感応寺参拝 十一番丁風月庵で午餐、城内の物産展会場、天守閣見物 夕刻南海電車で大阪へ 7日下関へ 8日壱岐丸で釜山着 頼貞一行の行程(満韓、ロシア) 夜行で9日朝京城(ソウル)着 ホテル・ゾンタク 10日京城発 11日長春經由ハルビン 12日満州里着 13日～シベリア鉄道 19日朝モスクワ着 《カルメン》 20日クレムリン等見物、夜行で発ち21日ペテルスブルク着 《ファウスト》《ボリス・ゴドノフ》 22日夜行でベルリン乗りかえ24日朝ケルン着 アーヘン、ブリュッセル經由でオステンド着		
9 17			『南葵文庫概要』(第2版)
9 24	オステンドからドーヴァー海峡わたりロンドンに到着。山東誠三郎・橘井清五郎も同道		
9 25	旅の会計とりまとめ 午後頼貞ら4名で正金銀行訪問、地下鉄に一驚、総領事館へ、2階建てバスで帰宿		
9 26	～10月1日市内で公園、博物館、劇場、コンサート(27日、エルマン)、カトリック典礼(28日)など体験		
10 2	上田、鎌田、小泉、山東らと低所得者層が住むイースト・エンド見物		
10 3	バトラー邸に止宿へ 同道者もそれぞれ下宿に 鎌田は米国経由で帰国へ(4日)		
10 15			『南葵文庫報告』第五
10 20	ケンブリッジに移りブル・ホテルに投宿		
10 31	上田とケンブリッジ・セルウィン・カレッジ学長ジョン・マレー博士(英国国教会聖職者)を訪ねる		
11 8	《トリスタンとイゾルデ》ロンドン		
11 18	上田、小泉と会食、ロンドン日本人会に出席 会場メトロポール(現コリンシア)ホテル、ロンドン 上田による5回の個人講義(第3回:1月29日、他は月日不詳)		『葵廼聖』(徳川治追悼誌)
3 1914 1 2	スイスのローザンヌへ。11日帰英 頼貞一行の行程 ヴィクトリア駅から出発 フォークストンから船でブローニュへ、パリ北駅午後10時着 10時50分発ローザンヌに向かう 3日朝パロルプで税関検査 9時32分ローザンヌ着 フランス貴族ル・スウィール男爵夫人が出迎え、ホテル・メルセデス投宿 夫人の案内で市内見学 5日昼音楽会へ その後シヨン城など見学		▶頼貞『冬の瑞西』(育英会会報7号掲載)
1 7		喜多村進、南葵文庫の掌書に任用	
1 16	ケンブリッジに移り、大学の学業がはじまる		▶頼貞『弟へ』(南葵育英会会報7号掲載)

徳川頼貞 『薈庭楽話』 年譜④

年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境 太字は南葵による出版物
大正 3 1914 2	ジョン・マレー博士の学舎への寄寓はじまる		
2 22		頼倫、進修学舎の寮生を大磯高麗園に招き、小宴 苗木の植樹	
2	大学正科生になり学位取得の希望を上田に伝達。上田、留学長期化と音楽専攻に徳川家側の懸念を案じる		
3 4	上田、頼貞の意志貫徹に不安をもちつつも支援と徳川家側を説得する決意を記す		
3 8	上田、ネイラー博士のもとを訪ねる この頃、各教授の指導始まる		
3 16	上田とケンブリッジ・コーパス・クリスティ・カレッジの建築家ライオンがもつ田舎家を訪問し滞在		
3 18	ロンドン経由でケンブリッジに戻る		
3	ネイラー《アンジェラス》ケンブリッジ		
4 23	《パルジファル》ロンドン		
6 6	《ボエーム》ロンドン		
6 20	《ボリス・ゴドノフ》ロンドン		
6 21	上田とともにパリへ。凱旋門に近いパンション・ガリレに投宿		
6 25	《アルセスト》パリ		
6 30	《マドンナの宝石》パリ		
	この年、音楽堂建設を構想、頼倫に伝達 B.トーマスに設計を、アボット・スミス社にオルガン製造を打診		
7 28			第一次世界大戦勃発
8 19	スコットランドに向け出発		
8 中		ドイツ滞在の日本人がロンドンへ避難。小泉信三、三浦環、南葵文庫の橋井清五郎も	
8 末		後見役上田に、帰国して大学復帰するようにとの依頼届く	
8 30	避難してきた橋井と彼の宿舎で会う。上田も同席。		
9 23		上田に大学から早期帰国を促す電報、12月大学復帰を決める	
10 8	上田、橋井、小泉がロンドンで会合、頼貞の後見引き継ぎを調整か		
10 24	パティ、三浦環を聴く（ロンドン、ロイヤル・アルバート・ホールにおける出征軍人のための慈善演奏会）		
10 25			『南葵文庫報告』第六

徳川頼貞『薈庭楽話』年譜⑤

年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境 太字は南葵による出版物
大正3 1914	11 14	上田貞次郎がシベリア鉄道 で帰国の途に	
	11	山本鼎、郡虎彦らとロンドンで彫刻家ロダンと会う	◇本居長世《涙の幣》ケンブリッジで初演
	12	ケンブリッジ大学の正式入学を諦め 音楽科聴講生にと小泉に表明 (小泉も賛同)	▶頼貞『私の見た英国と日本 (1)』(南葵育英会会報8号掲載)
	12 18	小泉、山東とともにスペイン、ポルトガル旅行に出かける	
4	1915	1 16	ロンドン帰着
	2 28	小泉、上田宛の書簡に音楽堂、帰国後別居について頼倫の内諾が反映した文面を残す	
	4 25	上田が日記に「南葵育英会あり、音楽堂オルガン決定」と記載	▶頼貞『英国だより (私信)』
	4 28	田村寛貞に自分用のピアノ (スティックのピアノーラ付き) を購入と書き送る	
	6	オルガン発注 (5月30日から7月5日までの間か)	
	6 5		W.H. カミングス死亡
	6 12		大磯高麗園招待 (和歌山出身者)
	7 11		大磯高麗園招待 (図書館関係者)
	9 16	頼貞帰朝準備委員会 福澤大四郎邸 (白金三光町) 購入を決定	
	9 29	頼倫、別府温泉にて静養、夫人同行~10月26日	
	10 5	リヴァプールから乗船し米 国経由で帰国の途に、カザ ルスも乗船	
	10 31		『南葵文庫報告』第七
	11 6	頼倫、即位の大礼参列のため 京都滞在~11月26日	
	12 5	和歌山の教育関係者を芝の 三縁亭に招待し懇談	
	12 7	サンフランシスコから春洋丸 にて横浜港帰着 白金三 光町の家に入る	兼常清佐、南葵文庫利用開始
5	1916	1	帰国記念音楽会を自邸で開 催 徳川治追悼曲《涙の幣》 国内初演
	1 26	頼倫と本部職員、和歌山へ、 南龍神社関連儀式 長保寺 臨時法要 ~30日	◇本居長世作品発表会 (三光町頼貞邸)
	2	上田、鎌田や日疋信亮と頼 貞の結婚問題で協議重ねる	
	3	結婚、財務に関し理事、財 務担当日疋らが協議、懇談 重ねる	
	3 22	島津為子が頼貞邸訪問、上 田は解決の兆しと記す	
	4 7	大磯高麗園で観桜会、議員 等招待。23日にも開催	

徳川頼貞 『薈庭楽話』 年譜⑥

年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境 太字は南葵による出版物
大正 5 1916 6 3		財務担当日疋が辞任 以後 上田、鎌田らと家政一新を 策定	
	6 25	華族会館で頼倫に鎌田、上 田が面談 家政一新の了解 を得る	
	7 3	徳川家新理事 (鎌田、三浦、 木下、日疋、斎藤、江川、上田) 委嘱	
	7 25	結婚式 (麻布飯倉徳川邸) 頼貞(25歳) 島津為子(20歳) 祝宴 (築地精養軒) 悪疫のため披露宴は延期	
	8	為子とともに軽井沢離山の 某家別荘を借りて滞在	
	8 29	小泉、上田、軽井沢から上京、 徳川家財務新事務所 (麻布 筆筒町) に日疋を訪問	
	9 5	東京西郊のミュラー邸にW. M.ヴォーリスを訪ね、音楽 堂建築を打診	
		秋、B.トーマスから設計図 到着 それをふまえた最終 案をW.M.ヴォーリスに依 頼、建築委員長を委嘱	シベリア鉄道全通
	10 8	頼倫、東北各県で図書館に ついての講演。日本弘道会 支部にて講話。25日帰京	
	10 10		『南葵文庫報告』第八
	11 4	徳川家理事会 東照宮、南龍 神社合祀後の祭典費、土地 株式の一部売却を決定	
	11 24	夜 進修学舎の寄宿生大挙 して頼貞邸におしかける。 夜更けまで歓談	
	12 4	結婚披露宴開催 (9日には 旧藩関係者のための披露宴 も) 会場はともに築地精養軒	
	12 頃	「南葵文庫音楽部」の名称で 海外に楽譜等の発注を始める	
	12 25	新婚旅行に出発 神戸から 乗船、上海、香港を廻る	
6 1917		頼倫より皇太子殿下に駿河 版「群書治要」一部献上	
	1 25	上海、香港方面の旅行から 帰京	
	1	南葵楽堂設計図が近江八幡 のヴォーリス建築事務所で 完成 (1階平面図16日、正 面建図23日など)	
	3 6	夫妻和歌山へ 頼貞一行の行程 7日南海電車で和歌山市駅 新和歌浦 望海楼へ 8日南龍神社、東照宮 報恩寺、観心院、午 後和歌山城 9日長保寺、10日歓迎会、11日青年大会 の歓迎会、12日招待会 13日和歌山発 14日帰京	

徳川頼貞『薈庭楽話』年譜⑦

年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境 太字は南葵による出版物
大正6年 1917 3 24	南葵楽堂（南葵文庫大礼記念館）地鎮祭 南葵関係者音楽関係者出席 同夜自邸で祝賀音楽会		
3 26		大山園地所購入について日疋財務部長と行き違いあり。上田、日疋らと会談（三縁亭）	
3 27	南葵楽堂建築につき上田、ヴォーリス、戸田組代表者が会談		
4 6			アメリカが大戦に参戦
4 13		南葵文庫で全国図書館大会 15日に高麗園招待会	
5 17			カミングス旧蔵書競売（～24日）
	初夏、箱根滞在中にカミングス旧蔵書オークションを知り、ネイラーに打電、購入を打診		
7 19	妻為子の着帯式		
7 25	上田貞次郎とともに中国北部旅行に出発、8月26日帰京 頼貞一行の行程 詳細不詳 8月23日朝紀州出身の山本中尉の案内で砲台保塁見学 11時西京丸乗船帰国へ 24日朝鮮南端の多島海を航行 25日10時下関上陸、山陽ホテルで休息、午後7時10分急行にのる 26日朝大阪着 上田、頼貞とわかれて和歌山訪問		
		頼倫、奈良を経て大台ヶ原登攀	
8	カミングス旧蔵書競売残余購入を頼倫が承認、ネイラーにその任を託す旨打電 購入額13300円		
9 15	南葵楽堂定礎式		
10 10			『南葵文庫報告』第九
10	最初の所蔵楽譜目録となる <i>Catalogue of the Nanki Musical Library. Musical Score. I</i> を刊行		
11		頼倫、史跡名勝天然記念物保存協会九州支部大会（鹿児島）参加 帰路日豊海岸探訪	
12 3	長男頼韶誕生		
12 17		頼倫夫妻銀婚式 本邸で祝宴（～21日）	
12 24			◇大田黒家演奏会
12		徳川家理事会 来年の経費大幅縮減を相談	
7 1918 2 初		頼倫、大磯高麗園で静養 ～4月12日	
3 1	頼貞邸で徳川治の追悼演奏会開催		
5 10		頼倫夫妻、東京発宇和島へ 瀬戸内海航路利用 23日神戸着、25日帰京	
5 19		前年購入の大山園で南葵育英会春季大会開催	
5	最初の所蔵音楽書目録となる <i>Catalogue of the Nanki Musical Library. Books on Music. I</i> を刊行	大山園地所を山下太郎に売却	

徳川頼貞 『薈庭楽話』 年譜⑧

年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境 太字は南葵による出版物
大正 7 1918 6 1			徳島で《第九》日本初演
	6 28	頼倫、陸軍武官を招待、育英会幹事陪餐	
	7 4	頼倫、上野発夜行で相馬地へ 講演講話をおこない7日夜行列車に 8日6時帰京	
	7 6		◇プロコフィエフ演奏会 帝国劇場 (～7日)
	7 8	南葵女子学生会頼倫邸で開催	
	7 12	プロコフィエフが頼貞邸を訪問、自作《スケルツォ》楽譜を贈る	
	7 18	頼貞、上田とともに鎌倉に向かい3月頃より療養中の小泉信三を見舞う (9月に回復)	
	7 30	南葵楽堂(南葵文庫大礼記念館)竣工	
	8		スペイン風邪流行～1920年
	8 13	坂東俘虜収容所(徳島)を訪問し、《第九》の一部分の演奏を聴く	和歌山市で米騒動
	8 16	徳川家、和歌山に波及した米騒動に対応するため3万円を寄附	
	10 6	第2回の在京女子学生会南葵文庫観覧記念撮影	
	10 上	頼貞健康状態悪化へ	
	10 27	南葵楽堂(大礼記念館)開館式 頼貞は悪疫罹病のため欠席 ◆「開館記念」第1回秋期音楽会(28日も開催) ピアノ協奏曲《皇帝》全曲の日本初演	
	10 28		『第巻回音楽會演奏樂曲に就て』
	11 8	海軍の有馬良橋、鎌田栄吉、台湾民政長官下村宏ら計22名を大礼記念館に招待	
	11 9	南葵文庫第1回講演会(主題「力」)10日も開催、11日講演者らを頼倫本邸に招待	
	11 14	麻布本邸で南葵育英会秋期大会開催 大礼記念館で記念講演会、立錫の余地なし	
	11 29	頼貞、流行性感冒(スペイン風邪)に罹る 数日後肺炎に、重態と伝えられる	
	12 4	上田、しばしば自邸の頼貞を見舞う	
	12 14		『南葵文庫報告』第十
8 1919 2 16	◆春期臨時音楽会 横浜、神戸在留外国人による管弦楽団 指揮H. ホーン		

徳川頼貞『菴庭楽話』年譜⑨

年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境 太字は南葵による出版物
大正 8	1919 4 1	頼倫、聖徳太子奉賛会のため大阪と奈良へ（～6日）	
	4 7	南紀美術会設立	
	4 11	第14回全国図書館大会、大礼記念館で開催（～15日） 頼倫、邸内で園遊会開催し招待	
	4 14	徳義社解散 関連資料は長保寺が保管へ 建物は和歌浦の別邸双青寮に移築へ	
	4 20	頼倫、和歌山で長保寺の藩祖廟へ、大阪神戸で有志と歓談、24日神戸港から台湾へ 頼倫一行の行程 28日基隆着、台湾各地歴訪、5月23日基隆発、26日門司港着、別府温泉で休養	
	5 4	◆第2回春期音楽会 横浜 在留外国人による管弦楽団 指揮 Ch.H. ソーン 外国大使等の参会多数	
	5 10	◆英国負傷兵、合衆国赤十字社のための基金寄附音楽演奏会 メンデルスゾーン《エリア》（全曲日本初演）	
	5 13	頼貞、和歌山各地を歴訪、27日帰京 頼貞一行の行程 同行者：夫人、家職山東、高見、女中小林 13日東京発、伊勢山田に泊 14日相可より自動車を駆って尾鷲、船で勝浦赤島温泉へ 15日那智滝、軽便鉄道で新宮へ 16日有志歓迎会 17日曳舟で瀬峡を上り瀬に泊 18日瀬八丁上下を観察、新宮泊 19日勝浦より乗船し湯崎温泉に上陸予定だったが悪天候のため田辺に上陸、湾を廻って有田屋旅館に投宿 20日田辺泊有志の会に参加 21日陸路、御坊へ 22日道成寺 23日陸路、湯浅、宿舎深専寺 24日陸路長保寺で藩祖廟参拝、黒江より電車で和歌浦の望海楼に 25日西浜御殿、市議場で歓迎会出席 26日神戸へ、トアホテルに投宿	
	11 2	南葵育英会秋期大会 麻布飯倉の本邸で開催	
	11 7		『南葵文庫報告』第十一
	11 8	頼倫、南紀美術会会員を本邸に招待 展覧会は18日（招待日）、19～29日、白木屋にて	
	12 14	◆大正八年秋期音楽演奏会 東京音楽学校、海軍軍楽隊による管弦楽団 指揮 G. クローン	
9	1920 1	カミングス旧蔵書購入分が到着	
	3 18	◆シベリヤ救済資金寄附音楽演奏会 指揮 Ch.H. ソーン 主催は東京及横浜合唱団	
	3 28	南葵文庫講演会「昔の桜と今の桜」（講師：三好学） 開催、展示会も併催	
	4	和歌浦に双青寮落成（名草御殿移築、双青閣新築含む）、紀州徳川300年祭を開催	
	5 8	◆大正九年春期音楽演奏会 横浜在留外国人による管弦楽団、指揮 Ch.H. ソーン	
	5 23	聖徳太子1300年記念美術展（上野公園）に行啓、太子奉賛会会長徳川頼倫に謁を給う	

徳川頼貞 『薈庭楽話』 年譜⑩

年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境
大正 9 1920 6 12		海軍協会定時総会 (築地水交社) に徳川頼倫会長出席	太字は南葵による出版物
7 3	英国アボット & スミス社製のパイプオルガンが到着 オルガン組立技師派遣を製作会社に打電 オルガン組立協力のための技師派遣を日本楽器に要請		
8	<i>Catalogue of the Nanki Musical Library. Musical Scores. II</i> 刊行		
9	<i>Works of Beethoven (Beethoveniana)</i> 刊行		米国で日本人移民排斥運動激化
9 3		頼倫、貴族院議長として帝国ホテルにおける米国議員団歓迎会で英語で歓迎挨拶	
10 2	楽譜、音楽書の閲覧開始 楽譜 1264 冊、図書 (洋書) 473 冊 カミングズ文庫公開		
11	南葵楽堂パイプオルガン備付工事竣成		
11 8			『南葵文庫報告』第十二
11 12			『南葵文庫概要』(第3版)
11 22	◆パイプオルガン備付工事竣成 特別音楽演奏		
11 23	◆パイプオルガン備付工事竣成 特別音楽演奏 ネイラー：序曲《徳川頼貞》 初演 24日再演		
12 11	◆ベートーヴェン百五十年記念音楽会 東京音楽学校、海軍軍楽隊による管弦楽団、指揮 G. クローン		
12 12	◆臨時音楽演奏 海軍軍楽隊 横枕文四郎指揮 H. ホーン (org)、柴田秀子 (ms)		
10 1921 1 25	神戸港から加賀丸に乗船し欧米歴訪に 2月15日シンガポール入港 3月マルセイユ着、ニースへ		
3	グノー《ファウスト》ニース 《魔笛》モンテカルロ		
4	《マノン・レスコー》ローマ ローマでプッチーニに会う ニキッシュ、ブゾーニと知り合い来日を打診		
4 21		全国図書館大会和歌山大会 頼倫、市公会堂で講演、双青寮で展示会、午餐会を開催	
5	パリ着 (1日)、ホルマンとサンサーンス宅訪問 スコラ・カントールムにダンディを訪問		
5 17			和歌祭 300年
5 23	パリのロシア・バレエ団公演でプロコフィエフに再会、ストラヴィンスキーを紹介される		

徳川頼貞『菴庭楽話』年譜①

年月日	頼貞	徳川家	歴史・環境 太字は南葵による出版物
大正10年 1921 5 27		頼倫、田辺市に南方熊楠を訪ね歓談	
8	ベルリンを経てロンドンにヘンリー・ウッドと会う	二条基弘による銅駄坊陳列所蒐集品（アイヌ資料等）を頼倫が受け入れ	
9 18	ベレンガリア号でニューヨーク着 ポストン、トロント、シアトル経由 サンフランシスコから乗船 11月3日 横浜着		
10 3			『南葵文庫報告』第十三
10 15		双青寮の集合した和歌山県下の教員、頼倫の招待で瀬戸内研修船旅へ、船内感染発生	

徳川家の家令・家扶・関係者

ほりのうち まこと
堀内 信 1833(天保4)～1920(大正9)年
 江戸赤坂の藩邸で紀州藩士の家に生まれる。1872(明治5)年紀州家家扶となり、1887年麻布飯倉の邸内に移住、会計取締役になる。藩主事績が不備であるため徳川茂承に上申、編纂を命じられる。邸内資料、聞き取り調査、和歌山の県庁や社寺を巡り資料蒐集。1896年『南紀徳川史』前集70巻完成。1900年徳川家を辞職、編纂に専念し、翌年『南紀徳川史』全172巻完成。用いた資料の多くが震災、空襲で失われたが、残余は1994～95年に和歌山県立文書館に寄託された。

ひびきのぶすけ
日足信亮 1858(安政4)年～1940(昭和15)年
 紀伊国黒江日方町生まれ。1882年陸軍士官学校卒業、陸軍主計監を最後に1914年予備役となる。クリスチャンとしての活動に加え、予備役となってからは徳川家の財務に尽力、しばしば頼倫の旅行に同行し、頼貞に建築家ヴォーリズの起用を進言した。

まし かんたろう
岸 幹太郎 1860(万延元)年～1914(大正3)年
 父は和歌山県会議員の岸新作。1881(明治14)年慶應義塾を卒業、当時は三田にあった慶應義塾幼稚舎に奉職。日本銀行を経て1897年横浜正金銀行入行。徳川家の家令、理事を務めた。また弟で芝浦製作所に入社、電気技師として特許を12件取得、経営の中核としても活躍することになる岸敬二郎の勉学を支援した。

しもむら ひろし
下村 宏 1875(明治8)年～1957(昭和32)年
 和歌山県出身。東京帝国大学卒業後通信省に入り、為替貯金局長等を任ぜられる。1915年台湾総督府民政長官、総務長官。1921年大阪朝日新聞社入社、1930年に副社長。退社後1937年貴族院議員。1943年には日本放送協会会長。45年「玉音放送」実現。戦後は1951年まで公職追放。徳川頼倫の台湾歴訪に協力、頼貞の結婚式で徳川方陪席、葬儀では委員長を務めた。

ふくざわ だいしろう
福澤大四郎 1883(明治16)年～1960(昭和35)年
 福澤諭吉の四男。1904年慶應義塾卒業。日本製鋼所、日本瓦斯、昭和電力、相模鉄道などで役員歴任、1931年慶應義塾評議員になる。白金三光町の後は上大崎に自宅を構え、その近隣地に1921年頼貞も居住した。長男進太郎は仏文学者、その妻アクリヴィは声楽家、孫の幸夫はカーレーサー。

たかみれんきち
高見廉吉 生没年不詳
 田村寛貞が主宰した「音楽奨励会」でクラリネットを演奏。南葵楽堂、南葵音楽図書館主事として活動。美術懇話会会員。名取春仙による肖像画が残されている。

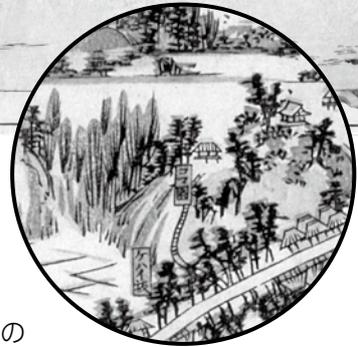


相陽大磯駅全圖 1888 (明治21)年8月 大磯町立図書館所蔵
茂承が購入する前の大磯。すでに「コマ園」の表示が見える。

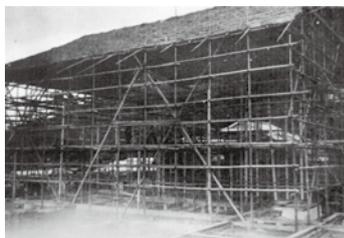
こま 大磯高麗園

鉄道の開通にあわせ、明治の元勳たちの多くが大磯の海浜に別宅を構えた。徳川茂承は1896年6月25日に、高麗山の麓にあった建物を購入した。徳川頼倫は、南葵文庫の公開を終え、史蹟名勝天然紀念物保存協会の会長に推戴されたばかりの1911年に既存建物を撤去、翌年にかけて整備をすすめた。関東大震災で多くが被災したが、徳川頼貞は南葵文庫の一部を移築した。彼の『菴庭楽話』はここで纏められた。

絵はがきに採り上げられた当時の風景
(所蔵 大磯町郷土資料館、和歌山市立博物館)



高麗園内 知足亭



建築中の高麗園 澄心亭



澄心亭 球戯室



高麗園内 愛日廬 八俵亭



澄心亭 玄関前より高麗山を望む



澄心亭 書齋 花卉障子
大磯高麗園を中心として採集したる野草
乾燥を試みに張り交ぜたる唐紙障子



高麗園内 陶器所の内部

麻布飯倉本邸 洋館

階段室外観



客間(1階)



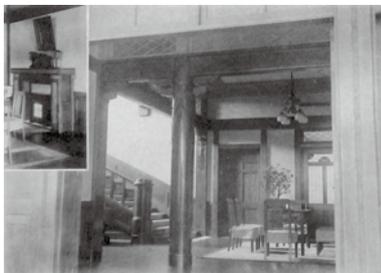
婦人室(2階)

頼貞が生まれた麻布飯倉の大きな本邸に代わり、
1916年に頼倫の意向を汲んだ洋館が完成した。
1924年5月の本邸移転まで多くの賓客を迎えていた。

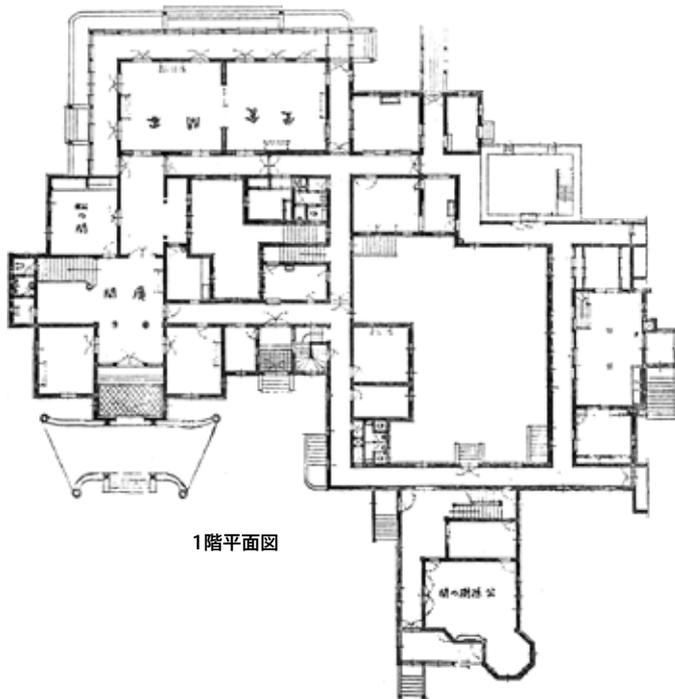
岡本定吉編『新住宅図譜』建築工芸協会 1919(大正8)年 による



広間(1階)



広間(1階)と室内の一部



1階平面図



正面玄関



公孫樹の間(1階)

麻布飯倉本邸とその周辺

1873（明治6）年、皇居として使用していた旧江戸城西の丸御殿が焼失すると、徳川茂承は赤坂の旧紀州藩中屋敷（現在の赤坂御用地）を皇室に献納した。代わりに旧米沢藩上杉家の中屋敷を徳川家の本邸とした。南北が傾斜地になった高台、飯倉町6丁目14番地のすべてにあたる。



地図の「徳川邸」表示の部分が本邸、北西に1908年に増築竣工した南葵文庫。「同 六丁目」表示部分が家扶らの住居等。

帝国地理院 地図「三田」（縮尺1万分の1）
1909(明治42)年



1916年に完成した洋館の本邸が的確に反映されている。市電が開通、飯倉片町電停が敷地角に設けられてもいる。

1916(大正5)年



南葵文庫の南、電停近くに1918年に完成した南葵楽堂（大礼記念館）が、また本邸洋館の増築が反映されている。

1921(大正10)年



本邸は1924年5月に代々木の清和園に移転、洋館は中華民国公使館に。家扶等の建物跡地も売却された。

1928(昭和3)年



南葵文庫、南葵楽堂の敷地は分譲され、一部は民間に売却されたが大部分は東京府が買収し学校用地とした。空地だった東側部分には貯金局の大きな建物が建てられている。

1937(昭和12)年

2022(令和4)年
6月10日

南葵音楽文庫アカデミー Newsletter『南葵文華』第6号発行



7月2日

南葵音楽文庫アカデミー 2022年度第1回

会場：和歌山県公館

◎「徳川侯爵交遊録—大音楽家に出会った日本人—
ヴァンサン・ダンディ」

講師：近藤秀樹

◎「H. ベッセラー『音楽聴の根本問題』(1925)
—南葵音楽文庫所蔵の音楽雑誌より—」

講師：泉健

7月3日

会場：和歌山県公館

◎「カミングス文庫研究のこれから… 写本資料と透かしの研究」

講師：佐々木勉

◎「音楽を通じて徳川頼貞の友人となった建築家 W. M. ヴォーリス」

講師：芹野与幸



10月21日

南葵音楽文庫アカデミー Newsletter『南葵文華』第7号発行



11月19日

南葵音楽文庫アカデミー 2022年度第2回

会場：県立図書館 講義・研修室

◎ミニレクチャー「和歌山の音楽家たち(戦前編)」

講師：林淑姫

◎講演と報告「和歌山が伝える〈南葵の記憶〉」

・「徳川家と長保寺 —頼倫、頼貞を中心に—」

講師：珠樹弘芳

・「徳川邸にかかわる資料をもとめて」

講師：美山良夫

11月20日

会場：県立図書館 講義・研修室

◎ミニレクチャー「赤貧、洗うがごとし —池長孟と徳川頼貞」

講師：美山良夫



重要資料報告会

会場：県立図書館 講義・研修室

南葵音楽文庫ミニコンサート

「徳川頼貞 初々しい体験を胸に」(協力)

会場：県立図書館

文化情報センター メディア・アート・ホール



2023 (令和5) 年
2月21日

南葵音楽文庫アカデミー Newsletter『南葵文華』第5号発行



3月4日

南葵音楽文庫アカデミー 2022年度第3回

会場：県立図書館 講義・研修室

◎ミニレクチャー「頼貞、カザルス、グラナドス
—『大西洋上のパブロ・カザルス』後日談—」
講師：近藤秀樹

◎講演「和歌山が伝える〈南葵の記憶〉」
・「幕末維新期の和歌山における軍楽 —太鼓とラッパー—」
講師：奥中康人
・「紀州徳川家と根来寺再興 —重倫侯御寄進能面—」
講師：中川委紀子



3月5日

会場：県立図書館 講義・研修室

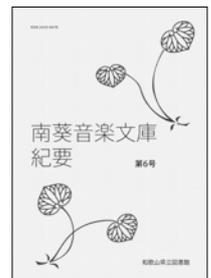
◎ミニレクチャー「南葵音楽文庫で学ぶ西洋音楽史(12) バロック期の音楽『組曲』」
講師：佐々木勉

◎鼎談「南葵音楽文庫からの温故知新」
・「和歌山の音楽史を発掘する —その試みと今後—」
パネリスト：奥中康人、江本英雄、林淑姫、司会：近藤秀樹
・「南葵音楽文庫を活かすみち」
パネリスト：宮下直子、岩橋和廣、美山良夫



3月25日

『南葵音楽文庫紀要』第6号発行



動画による文庫案内の作成 (収録/編集/デジタル・アーカイブ作成/公開)



「南葵音楽文庫とは」
(16分55秒)



「南葵音楽文庫閲覧室」
(7分7秒)



「スナール室内楽シリーズ」
(14分42秒)



※YouTube「和歌山県公式チャンネル」所収
<https://www.youtube.com/@PrefWakayama/>

『南葵音楽文庫紀要』 総目次 第1号(2018年)～第6号(2023年)

第1号 2018年3月19日発行

○南葵音楽文庫の1世紀.....	1-04
■論文・調査報告	
・南葵音楽文庫の特徴と魅力 ―コレクションの形成から―.....	美山良夫.....1-09
・ミュージック・ライブラリーの夢 南葵音楽図書館の成立と展開 ―南葵文庫音楽部の頃―.....	林 淑 姫.....1-19
・南葵音楽図書館の出版活動.....	篠田大基.....1-29
・《通奏低音の演奏を習得するためのいくつかの勘どころ》とヘンデル?.....	佐々木勉.....1-41
・スナール社の挑戦 ―南葵音楽文庫に眠る室内楽シリーズ―.....	近藤秀樹.....1-49
■資料紹介	
・ベートーヴェン自筆書簡.....	美山良夫・篠田大基.....1-58
・カゼッラ自筆書簡.....	近藤秀樹・篠田大基.....1-62
・南葵音楽文庫収蔵の《メサイア》楽譜.....	佐々木勉.....1-66
・ルソー『音楽事典』.....	美山良夫.....1-72
・《グリー、キャッチ集》手写楽譜本.....	佐々木勉.....1-74
・サン＝サーンス《ミューズと詩人》.....	近藤秀樹.....1-76
・R. シュトラウス《アルプス交響曲》 ―「演奏権付き楽譜」をめぐって―.....	美山良夫.....1-78
・松山芳野里《5つの日本的な歌》.....	近藤秀樹.....1-80
・日本吹奏楽の師・フランス陸軍軍楽隊長ルルーの2つの楽譜.....	林 淑 姫.....1-82
・音楽とともに ―徳川頼貞著『蒼庭樂話』『頼貞隨想』―.....	林 淑 姫.....1-84
■関連歴史資料	
・「故ダブリウ・エイチ・カミング博士文庫」「カミング音楽文庫競賣残餘図書購入顛末」.....	篠田大基.....1-88
■収蔵貴重資料 目録と紹介	
・和歌山県立博物館保管資料.....	佐々木勉・美山良夫.....1-94
○凶案解題.....	美山良夫.....1-111

第2号 2019年3月31日発行

■論文・調査報告	
・南葵音楽文庫の特徴と魅力(承前) 手沢本の世界.....	美山良夫.....2-07
・ミュージック・ライブラリーの夢 南葵音楽図書館の成立と展開(2).....	林 淑 姫.....2-15
・南葵楽堂の演奏会プログラム.....	篠田大基.....2-25
・カミングス文庫とW. H. カミングスをめぐって ―W. H. カミングスとその生涯―.....	佐々木勉.....2-35
・時代とともに/時代の傍らで ―スナール室内楽シリーズ―.....	近藤秀樹.....2-43
■資料紹介	
・トーマス・パーセル	
「1678年2月8日付けジョン・ゴスリング宛書簡」と「権利委譲証書」.....	佐々木勉.....2-54
・ベートーヴェン《交響曲第9番 二短調 作品125》総譜・パート譜.....	美山良夫.....2-60
・ベートーヴェン《月光ソナタ》日本版初版 ―楽譜と刊行の顛末―.....	林 淑 姫.....2-66
・サン＝サーンス《チェロ協奏曲〔第1番〕 作品33》.....	美山良夫.....2-70
・プロコフィエフ《スケルツォ 作品12-10》.....	篠田大基.....2-72
・ジル＝マルシェックス編曲 ラヴェル《ティータイムフォックストロット》.....	近藤秀樹.....2-74
・オペレッタの楽譜.....	林 淑 姫.....2-78
・ネイラー 序曲《徳川頼貞》.....	篠田大基.....2-82
■関連歴史資料	
・徳川頼貞「英國だより」(1915).....	林 淑 姫.....2-86
■収蔵資料 目録と紹介	
・南葵音楽文庫〈重要資料〉の選定.....	2-92
・ホルマン文庫所蔵 ジョセフ・ホルマン作品 解題と資料一覧.....	美山良夫.....2-96

第3号..... 2020年3月31日発行

■論文・調査報告

- ・南葵音楽文庫の特徴と魅力（結） 個人文庫における「私性」と「公共性」.....美山良夫.....3-07
- ・ミュージック・ライブラリーの夢 南葵音楽図書館の成立と展開（3）
南葵音楽図書館長徳川頼貞・その形成.....林 淑 姫.....3-15
- ・エフレム・ジンパリストと徳川頼貞 ―その交流と南葵音楽文庫所蔵資料―.....篠田大基.....3-23
- ・カミングス文庫とW. H. カミングスをめぐって ―カミングス文庫資料の来歴―.....佐々木勉.....3-31
- ・オネゲルとスナール ―室内楽シリーズを中心に―.....近藤秀樹.....3-41

■資料紹介

- ・《ヘンデル氏の作曲によるオペラ「リナルド」の歌曲集》初版楽譜.....佐々木勉.....3-52
- ・クリストファー・シンプソン《ディヴィジョン・ヴァイオル奏者》とディヴィジョン関連資料.....佐々木勉.....3-55
- ・アルベニス《スペイン風セレナータ》.....近藤秀樹.....3-58
- ・ジル＝マルシェックス編曲 リュリ《パサカイコ》.....近藤秀樹.....3-61
- ・ワインガルトナー《日本の歌 作品45》.....篠田大基.....3-64
- ・徳川頼倫と音楽 ―残された資料から―.....林 淑 姫.....3-72
- ・徳川頼貞自筆論稿3篇・目録.....林 淑 姫.....3-77

■関連歴史資料

- ・「冬の瑞西」―徳川頼貞のスイス紀行―.....林 淑 姫.....3-80

■収蔵資料 目録と紹介

- ・スナール室内楽シリーズ 目録と解題.....近藤秀樹.....3-88

第4号..... 2021年3月31日発行

■論文・調査報告

- ・徳川頼倫試論（1） ひと・仕事・時代.....林 淑 姫.....4-07
- ・南葵音楽文庫収蔵「カミングス文庫」の研究 ―その沿革とカミングス文庫「音楽書」目録―.....佐々木勉.....4-15
- ・高野武郎 ―徳川頼貞『薈庭樂話』の口述筆記者―.....泉 健.....4-25

■資料紹介

- ・リスト《ファン族との戦い》.....近藤秀樹・井戸慶治.....4-36

■関連歴史資料

- ・南葵音楽堂の建築について ―ヴォーリズ建築事務所に遺された建築図面―.....芹野与幸.....4-44
- ・喜多村進宛徳川頼貞書簡.....竹中康彦.....4-57

■収蔵資料 目録と紹介

- ・南葵音楽文庫〈重要資料〉の選定.....4-68
- ・南葵音楽文庫収蔵カミングス文庫「音楽書」目録.....佐々木勉.....4-72

■活動報告

- ・南葵音楽文庫 活動の記録 2017年12月～2020年3月.....4-86
- ・南葵音楽文庫 ミニレクチャー一覧 2017年12月～2020年3月.....4-89

第5号..... 2022年3月31日発行

■論文・調査報告

- ・徳川頼貞による文化貢献の特性 ―「私性」と「公共性」の輻輳―.....美山良夫.....5-07
- ・南葵音楽文庫収蔵「カミングス文庫」の研究（2）
W. H. カミングスとJ. L. ハットンの歌曲資料をめぐって.....佐々木勉.....5-15
- ・市販版『薈庭樂話』 その出版、その時代.....江本英雄.....5-29
- ・貴重資料の修復その心と技 ―南葵音楽文庫を例にして―.....飯島正行.....5-39

■資料紹介

- ・ワーグナー《ローエングリン》 日本初演使用楽譜.....美山良夫.....5-54
- ・ダンディ『セザール・フランク』.....近藤秀樹.....5-58

■収蔵資料 目録と紹介

- ・フリートレンダー文庫 目録と解説.....林 淑 姫.....5-64

■活動報告

- ・南葵音楽文庫 活動の記録 2020（令和2）年度.....5-78

第6号 2023年3月31日発行

■論文・調査報告

- ・徳川頼貞による文化貢献の特性（2） 公共財化への試行と実践.....美山良夫.....6-07
- ・ミュージック・ライブラリーの夢 南葵音楽図書館の成立と展開（4）
1926年の蒐書計画と田村寛貞.....林 淑 姫.....6-15
- ・写真帖『南葵文庫附属御大礼奉祝記念館大風琴』の概要と来歴 —朝香宮家との関係を中心に—.....工藤哲朗.....6-24
- ・南葵音楽文庫収蔵「カミングス文庫」の研究（3）
ヨーゼフ・ハイドン、自署入り楽譜2点をめぐって.....佐々木勉.....6-39
- ・H. ベッセラー「音楽聴の根本問題」（1925） —南葵音楽文庫所蔵の学術雑誌より—.....泉 健.....6-47

■資料紹介

- ・サン＝サーンス《チェロ協奏曲第2番 作品119》.....美山良夫.....6-58
- ・ジル＝マルシェックス《果てしなく憂鬱に広がる……》.....近藤秀樹.....6-60

■関連歴史資料

- ・徳川頼貞抄訳「指揮者ヘンリー、ウッドに関して」（1920）.....篠田大基.....6-66

■活動報告

- ・南葵音楽文庫 活動の記録 2021（令和3）年度.....6-78

南葵音楽文庫 紀要 第7号

令和6年3月31日発行

令和7年7月11日改訂

発 行 和歌山県立図書館

〒641-0051 和歌山県和歌山市西高松一丁目7番38号

電話 073-436-9500

<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/>

編集協力 有限会社ティアンドティ・デザインラボ

〒531-0071 大阪市北区中津七丁目3番2号1階

<https://www.ttdesign.co.jp/>

印刷製本 株式会社 協和

〒642-0017 和歌山県海南市南赤坂五丁目3番

<https://www.kk-kyowa.jp/>